

と思つたのであらう、書を四方に發して、『老僧この度寶鑑國師百年忌の因み、瑠璃光寺に於て報恩供養のために『碧巖集』を提唱する。苟も國師が岡極の慈恩に報いんと欲する者は、咸な來つて焼香禮拜せよ』と云つた。従つて曩に鉗鎚を受けた良哉、鐵肝、靈源、空印、天瑞などの麒麟兒が雲の如く集り、東嶺も亦連つて分座説講した。

白隱は自ら末後の大會を莊嚴するために、更に愚堂派下の諸老宿に書面を出し記念事業として愚堂の語録を出版したいと勸めた。於戲、憐むべし、信仰なく懈怠懶惰の輩は、下らぬ理窟を付けて一向賛成せず、衆議紛々として遂に決しなかつた。白隱は實に憤慨した。『葦原や絶えて久しき法の道を踏み分けたるは此の翁かな』と自ら歌へる愚堂の兒孫が、その法祖の稀有の大盛事に際し、その語録の上梓すら出來ざるは何事ぞ。咄、無慚無愧無道心の輩よと泣然として泣いた。その潜々たる熱涙を磨つて墨と作し、熱烈、火の如き慷慨を寄せ、終に『寶鑑貽

寶鑑貽照の著述

照』一卷を書いた。而して寶鑑國師の兒孫の無道心を痛撃して殆んど完膚なからしめた。

白隱は復た美濃の山河に憂宗の涙を濺いで去つた。

第二節 無量寺と龍澤寺

白隱は澤山の門下を出し、大勢の信者があつた。而して後半生の多くは松蔭寺に居つた。白隱に若し寺を建てたいと云ふ野心があつたならば、金の上にも時間の上にも將た又た處の上にも、必ず自由に得られたのであつた。が、唯だ眞風の擧揚に汲々として更に餘念が無かつた。殊に白隱の教ふる處は、伽藍佛法、形式佛法、外見佛法ではなかつた。否、恐らくは久しい間の舊習に囚はれた是れ等の佛法を一槌に擊破し、眞正堅固の禪門を建設せんとして、唯一條の宗門中興の路に向つて、獅子吼して驀直に進前したのであつた。それでも因縁あつて無量寺と龍

白隱の獅子吼

無量寺と龍澤寺

澤寺には、開祖の位牌を祀られた。

無量寺は寶曆二年、白隠が六十八歳の四月八日に落慶式を行つた。白隠は請ぜらるゝまゝに開山第一祖となつたが、寺務は弟子の東嶺をして掌らしめた。初め元祿の頃に信州の獨園と云ふ人が或る廢寺の趾を拓いて庵を結んでゐた。その後、脱上座がこゝにゐた。それから延享の頃に共龍が復興しようとしたが果さずして寂くなつた。それ等の人々の志を憐んで石井玄徳、古郡平七、杉山總左衛門等が力を協せて成功したのであつた。石井や古郡は已に二十餘年前から白隠に參じて居つて、一時は比奈の三公三伯と稱せられた連中である。比奈と云ふは無量寺の村で、寺の前には彼の『竹取物語』發祥の遺跡と傳へられた、頗る詩的の處である。この冬には京都の世繼政幸が佛舍利七粒を無量寺に納めた。無量寺が建つて後七年にして豆州の龍澤寺が出来た。正に白隠が七十五歳の春である。龍澤寺は舊と弘法大師の開創したのであつたが久しく頽廢して居つた。

無量寺の建

立龍澤寺の建

龍澤寺と禪昌寺との關係

それを江戸時代の初めに天外と云ふ人が臨濟宗にしたが、不幸、久しからずして滅くなつた。それを此の度再興したのである。山を圓通山と號するのは、白隠が信仰の觀世音菩薩を本尊とするからである。而してこゝの開基となつたのは、飛驒の禪昌寺の檀家たる武川久兵衛、法名を徳元院遠山良遊居士と云ふるのである。而して寺號の龍澤は元と禪昌寺の山號である。のみならず、山號の圓通の字も亦た禪昌寺と關係がある。禪昌寺は、飛驒國益田郡中呂に在り、舊と大雄山圓通寺と稱し、後圓融天皇の勅願所となつてゐたが、その後、曩に十刹に列せられたる龍澤山禪昌寺と合併したものと云ふ。白隠は先年、寶鑑國師百年忌齋會を美濃の瑠璃光寺に終へてから、關の梅龍寺や上有知の清泰寺、さては神淵の龍門寺などを經て飛驒に入つて此の禪昌寺へも行つたので、武川氏との化縁を結んだのであつた。

龍澤寺は白隠が一世一代の寺であつて、武川氏等の因縁に依り、自ら心血を灑

白隠が墳墓の地

應化と承寂

一八二

いて經營したものと云つて差支ない。而して白隠は大にこゝが氣に入つた。或る日、庭を歩いてゐたが『あゝ、好い處だ。拙者が死んだら此處へ埋めて呉れ』と云つた。白隠は墳墓の地として龍澤寺を建てたのであつた。

痛快なる復讐

宗門には昔から『粉練三合持つたら孫寺へ住職するな』と云ふ語がある。白隠が剃髪し且つ住職し、久しく法輪を轉じた懐かしい松蔭寺は、興津の清見寺の末寺で謂ゆる孫寺である。白隠が如何に氣象豪邁なりと雖も、既に寺を持つて居る以上は、絶對無限なる本寺の權勢に、或は壓制せられ、威嚇せられ、或は脅迫もせられた。宗門では人よりも寺である。肯かぬ氣の白隠は、これ見よとばかりに龍澤寺を建てた。龍澤寺は妙心寺の直末で、堂々として敢て清見寺の下に立たなくとも好い。實に是れ痛快なる復讐であつた。

無量寺は其の後廢絶し、松蔭寺は又た火災に罹り、獨り龍澤寺のみが恙無く儼然として百五十年後の今日まで、白隠研究の豊富なる史料を保存して居る。龍澤

寺は眞に白隠の唯身舍利の在る處である。

第四節 普門示現の利益

池田侯の歸敬

東海道の一宿たる原の松蔭寺には、江戸へ參觀交代する因みには白隠を訪うて禪要を問うた人が多かつた。備前岡山の城主池田繼政侯の如きも亦たその一人である。

白隠は行脚時代の因縁もあつて、寶曆元年の春、岡山の少林寺で金剛經を講じた。その折に池田侯は屢々參見した。その後、江戸へ參觀の砌、原宿の本陣渡邊氏に宿り松蔭寺に白隠を訪れた。丁度その時、庫裏の典座の僧が過つて大播鉢を破つた。白隠は『時節到來ぢや、破れたものは仕方がない』と、小言も云はないで池田侯を迎へた。侯は請ぜられて書院に通り、久し振に悠揚たる白隠の風貌に接し、四方八方の清談に時を移した。歸りがけに侯は『今日は微行のことゝて甚だ

普門示現の利益

一八三

失禮して何も持參致さざりしも、若し老師がお望みの品も御座りますれば、何なりとも追てお届け致しますれば……』と云つた。白隠は『あゝさうか夫れは忝ない……然し別に不足のものも御座らぬが、唯だ先刻庫裏で播鉢を破つた……どうか播鉢でも貰ひたい』と笑つて云つた。候は白隠の清廉恬淡なるに感じ愈よ歸敬したが、後に國へ歸つてから名物備前焼の大播鉢を松陰寺へ届けたと云ふ。

或る時、西國の大名某が松陰寺に白隠を訪ひ、一場の垂示を乞うた。折柄、宿の農家から黍餅を御佛前へと持つて來た。白隠はこれ屈竟の茶菓子と、それを殿様の前へ出し『さア召上れ』と執つて進めた。が、元より山海の珍味に飽いた高貴の育ち、争かそれが口に入らうや、殿様は頗る當惑の體であつた。白隠はそれを叱して『是非ともお召上りあれ……せめて民百姓の困苦の程もお解りにならうぞ、老僧が垂示、この外には御座らぬ』と、毅然として云つたので、殿様も初め

て夫れと氣付き、深く慚愧し且つ感謝した。

白隠の接化は概ね斯様であつた。これ亦た觀世音菩薩の現身說法で、大名身を以て得度すべきものには大名身を現じて爲めに說法し、高貴身を以て得度すべきものには、高貴身を現じて爲めに說法するの妙がある。實に圓通無礙の大說法である。

白隠が岡山の少林寺からの歸途、京都に寄つて世繼氏に宿つた折、その頃、京都に在つて晝名漸く天下に聽えんとせる池大雅が來て禪要を問うた。大雅はその後二十五年、白隠の滅後八年にして安永五年に五十四歳で歿なつたが、一代に三十餘度も遙々京都から來て富士山に登つたと云ふ。大雅が富士山の秀靈に此の如く憧憬れたと共に、その化現たる白隠の禪機に深く歸敬したことは云ふまでもない。大雅は白隠の高弟たる遂翁と最も親密であつた。それがために遂翁は參禪の餘暇、晝を大雅に學んで翰墨に遊戯三昧を弄した。而して白隠の高逸淡雅なる

風流畫は、多く遂翁から學んだと傳へられて居る。大雅は禪を白隠に學んだが、畫は遂翁を通して白隠に教へて居た。白隠と大雅とは互に相弟子たるものである。大雅は白隠や遂翁に參じて、終に彼の『隻手の聲』を聞いた。この參禪に依つて得た思想が筆に表はれて、清肅幽遠なる畫風となつたのである。

池大雅の參見した頃、白隠は又た島原の遊女大橋女をも濟度した。女は素と江戸の武臣の家に生れたのであつたが、故あつて浮川竹に身を沈めた。紅燈緑酒の間、絃歌醉舞の中に待遇して、而も苦界解脱の要徑を一客に教へられて、獨り窈に參禪工夫して居つた。後に一素居士に娉れた。而して居士と共に白隠に參じた。その後又剃髮して尼となり慧林と稱したが居士に先つて死んだ。居士は白隠の高弟東嶺を請じて、尼のために追善供養を修した。東嶺が來て見ると佛前には一幅の觀音像が掛けてあるのみで、供養の佛たる尼の位牌が出てないので、『位牌は何うした』と問うた。すると居士は、『慧林は觀世音菩薩の化現で、謂ゆる婦女身を

大橋女の接
化と觀世音
菩薩

在家化導の
白隠

以て得度すべきものには、婦女身を現じて爲めに説法したのであるから、觀音像が即ち位牌である』と云つた。

在家化導としての白隠は、實に圓脫洒落であつて、決して惡辣な手段を弄しなかつた。これ亦た觀世音菩薩が普門示現の利益である。

第五節 江戸の教化

白隠一たび松蔭寺に住してより、春花秋月早や四十餘年、富士山頂の雪は幾たびか積み且つ融けた。而も白隠は四十年一日の如く、猛然として宗門の維新を大獅子吼して居つた。

龍澤寺の落慶式を終へて後、寺務は一切之れを東嶺に任せ、白隠は、江戸の醫者半田氏の請に應じ、七十五歳の老軀を提げて箱根山の險を踏えて初めて江戸に入つた。實にこれ寶曆九年の七月である。正に是れ服部南郭の卒せる年で、九代

江戸に入る

江戸の教化

將軍家重が將軍職を辭するの前年である。

江戸は將軍の城下である。白隠はこゝで一つ理想を實現したいと、大なる抱負を持つて來た。而して江戸も場末な深川引籠町の臨川寺と云ふ小さい寺へ入つた。白隠禪師來るの聲は、江戸八百八街を撼かした。それにしても彼の臨川寺ではと噂に上り、鯉の吹流しみたやうな江戸ッ兒の落首となつた。

名僧をひっこみ町の臨川寺

藪の中にも香の物かな

『藪の中にも香の物』と云ふ諺は、鎌倉時代からあつたものだが、その出處は支那で、魏の青龍二年に司馬懿が諸葛亮(孔明)と渭南と云ふ處で對陣してゐた時司馬懿が文帝に上表して決戦を請うた。この表文中に『豈知野夫有ニ功者一也。』とある。それが段々と轉化して俗諺となり『塵だめの中に鶴』と云ふ意に用ひられた。

白隠は此處に居つて『碧巖集』を提唱して、盛に家風を宣揚し、幢々として踵を繼いで來る緇林の龍象、武林の英傑の四來を提擲して居つた。道譽自ら高く諸方の歸仰を受けた。

白隠は或る日、時の寺社奉行たる小出侯を訪れた。侯は名を英持と云ひ、丹波園部の城主であつたが去る延享三年に寺社奉行を兼ねたのである。一度お尋ね申さうと約束して居つたのが、段々と遅れてゐたのであつたが、その日には侯は相悪く他出であつた。先づ請ぜらるゝまゝに書院に通つて暫らく待つた。そこへ家臣が來て『是非に一筆御揮毫下さるやうに』と、金屏風を出した。白隠は無雜作に筆執つて、少時、小首を傾けてゐたが忽ち莞爾として、

小出々々と待つ日にこいで

待たぬ日に來て屏風書く

と、墨痕淋漓として滴らんばかりに書いた。白隠の風流洒脱の境界が躍動して居

つた。

白隠はその冬十二月、一先づ江戸を去つて龍澤寺に歸つた。

その後六年を経て明和二年に至り、白隠は正に八十一歳であつたが、春から少し病氣で松蔭寺へ行つて臥てゐた。東嶺は江戸へ出て至道無難禪師の舊蹟たる小石川の至道庵を再興して、白隠が閑居の道場とせんとして其旨を手紙で申送つたが、松蔭寺にゐた門弟の者等はそれを肯かなかつた。

翌年の正月、東嶺は弟子の文恭を態々遣はして白隠を邀へた。白隠も近頃は大分衰弱したが、江戸へは出て見たい氣もするし、且は至道庵も再興されたと云ふから、遂に文恭に従つて駕に乗つて出た。その夜は箱根の宿の天野氏に宿つた。

然るに松蔭寺にゐた門弟四人、後追つ驅けて来て、「さア駕を戻せ、御師匠様を返へせ」と嗚鳴る。文恭はそれへ出て『お前達は何故そんな解らぬことを云ふか』『否、老師は近來大變お衰りになつた、それを強て遠い江戸までお伴れ申さば、

東嶺と至道庵

再び江戸に入る

却てお身體のために善くない……殊に又た後に残された私等は、誰を手頼りにして參禪しますか……』と泣かんばかりに訴へる。而し文恭は『その心配は御無用である。老師には姑く江戸へ出て御養生をなさるのだ、快くなれば復た直ぐお歸りになる、のみならず老師御自身から大變に進んで御座る、それをドウしても返へせと云ふのか……お前の方で返せと云へば、此方はドウしても返へさぬ』と云つて肯かぬ。追つて來た者も仕方なくその儘歸つた。

白隠は江戸に入つて相變らず諸方の接化に多忙を極めたが、夏、三島の福聚寺からの請に應じて歸つて來た。

前後二度の江戸行も、その年既に衰老であり且つその日も淺いので目覺ましい活動も出來なかつた。

第六節 大咩一聲

明和五年戊子、白隠は正に八十四歳の春を、我が墳墓の地と期した龍澤寺に迎へた。

玲瓏たる芙蓉の峰に棚引く春霞、吹く風さへも駘蕩として暖かく、白隠は藹然として『あゝ、好いお正月ちや、老僧は八十四になつたが、こんな好い正月を迎へたのは初めてちや……これも東嶺和尚のお蔭ちや、あゝ目出たい』と大喜びであつた。

近來殊に衰老した白隠は、正月から却て非常な元氣で處々の應化に無盡の法益を施してゐた。何時しか春と過ぎ夏と去つて、草間に唧く蟲の音も涼しい秋となり、暖かき嶽南にも雪の降る十一月には、白隠は松蔭寺へ歸つて來た。而して衰老とは云ひながら、病は次第に重るばかり。十二月七日に古郡氏が診察に來た。呼吸、脈搏ともに異状は無い。『別にお變りも御座りませぬ』と云ふと、白隠は之れを叱して『馬鹿ッ、三日前に人の死を知ることが出來ないで、良醫と謂へるか

龍澤寺の正月

松蔭寺に病を示す

大叫一聲の臨終

巖頭と白隠

ッ』と。古郡氏は唯々として去つた。白隠は自ら既に死を知つた。その十日には後事を遂翁に依囑し、翌る十一日の曉右脇にして高臥してゐたが、『あゝ、苦るしい』と大叫一聲、『ウーン』と一聲唸つたまゝ示寂した。

白隠の最後は唯だ是れ大叫一聲である。遺偈を留めず、閑葛藤を弄せず、言端語端に涉らず、少しも飾らず、作らず、氣取らず、苦るしいのを苦るしいと無難作に云つて洒々落々たるは、恰も巖頭の臨終の如くであつた。白隠は行脚の初め清水の禪叢寺に於て、巖頭渡子の話に撞着し、後ち越後の英巖寺に在て『巖頭健在なり』と叫び、而してその臨終は巖頭の如く大叫一聲するのみ、亦た是れ白隠は現在の巖頭にして、巖頭は過去の白隠であつた。白隠が八十四年の生涯は、唯だ是れ大叫一聲のみ。この外更に何の求むる處もなく、何の尋ねる處もない。猶ほ是れ彼の王陽明が『我が心光明、又何をか言はん』との臨終と相一致して居る。於戲、大叫一聲！ 白隠滅後百五十年の今日、猶ほ其の響は轟々として天地を

撼かして居る。未來兆載永劫の後までも白隠は唯だ大咩一聲して居る。この大咩一聲と隻手の聲とは、二にして不二である。前の白隠は隻手の聲にして、後の白隠は大咩一聲である。而も前の白隠を知つて後の白隠を知らざる者は迂である。後の白隠を知つて前の白隠を知らざるものは愚である。而して前と後とを二面に見て白隠を知らんとするものは癡である、妄である、迷である。若し隻手の聲を聞き得ば、大咩一聲も亦た聞き得ん。大咩一聲を聞き得ば、隻手の聲も亦た聞き得ん。隻手の聲と大咩一聲と、眞に二にして不二なり。唯だ是れ一聲である。この一聲！是れ古今超越の一聲である。乾坤打破の一聲である。法界彌綸の一聲である。この一聲！即ち是れ常在不滅の白隠である。白隠を知らんとする者、先づ唯だ此の一聲を聴くべきのみ。

願れば、白隠の一代は唯だ努力である。奮闘である。精進勇猛である。白隠は去る寶曆十三年の冬、龍澤寺に在て或る夜、夢を見た。白隠が近頃出來た隠察

の上間に坐つて居る。その傍には結城の節首座を初めとして大勢の舊友知己が圍繞して居る。下間を見れば白隠が平素から歸仰して居る愚堂、大愚、無難、正受續いて陽春、古月、巴陵、定山等の諸老宿、處狭きまでズラリと列坐して居る。スルと舊友中の一人が歎息して『イヤ私共は機根下劣で行解相應せず、皆様に顔合すもお愧づかしい』と云つた。これを聴いた節首座は冷やかな笑を浮べて、『それはお前達は二字不足して居るから、サウ云ふ愧づかしい思をしなければならぬのだ』と意味有りげに云つた。一座の者も愕然として驚き、『その二字とは何で御座る』と、言ひ合はせたやうに一同が問うた。が、節首座は『云うても駄目だ』と語らない。さう云はないで、聴かせて下さい——駄目だ——聴かせて下さいと押問答する。下間に居る愚堂等も、亦た同じやうに『聴かせて貰はうぢやないか』と云ふので、節首座は『それではお話し申さう』と一座を見下し、言葉を改めて『二字とは、唯だ此の勇猛の二字のみである』と云つた。その聲には力が

あつた。あゝ我れ等の不足は確に勇猛であると、一同は大に賞歎した。白隠は静に之れを聽いてゐたが、能く／＼考へて見れば、こゝに居るのは皆な先きに死んだ人ばかりである。と思つたから白隠は聲を厲まして『俺はお前等と一緒にならぬぞッ、』と云つた。その刹那、夢は豁然として覺めた。

白隠は門下の者に、この一場の夢物語をして、吾人唯だ勇猛あるのみなることを示した。而して『老僧はこの夢を見て大變元氣付いた』と語つた。

白隠は實に努力の人であつた。而して其の一代の努力は、宗門の中興であつた。白隠の滅後、舍利を分ちて松蔭、龍澤、無量の三處に塔を建てた。翌年六月、朝廷、特に敕して神機獨妙禪師と諡られた。去る明治十七年、勅して正宗國師と追諡せられた。白隠の行く處、草木も亦たその徳に化せざるなく、その胸中に藏する處の禪は、正に神なり、妙なり、古今に卓絶して獨立せり。神機獨妙の四字、寔に能く偉大なる人格を盡せりと云ふべきである。

肉の白隠は死んだ。而し靈の白隠は永遠に生きて居る。玲瓏たる富士山、普門示現の觀世音菩薩、是れ即ち白隠の清淨法身である。白隠は、過る寶曆三年に正受老人の三十三回忌を迎へた時に、香語を拈じて曰く、
掀○倒○天○源○一○滴○流○ 飯○山○深○處○使○人○愁○
嫉○焰○妬○火○懈○拈○出○ 留○與○兒○孫○結○寇○讎○
と、是れ正受老人がの常在不滅の法身にして、偶ま以て白隠自ら儼然として常在不滅なることを説いて居る。

第七節 鶴林の門下

白隠の出世は實に禪門の革命であつた。而して中興の偉業を大成せしめたものは、門下に俊才を輩出したことである。

鶴林の門下、鬱乎として多士儕々なりと雖も、指を先づ遂翁と東嶺の二人に屈

せねばならぬ。二人が副貳轉化の功に依つて、能く鶴林の宗風をして宣揚せしめたのである。猶ほ是れ曹洞宗の瑩山禪師門下の峩山と明峰との如きである。由來『大器遂翁、微細東嶺』と稱せられて、各々一特色を具して居つたから、二人を打して初めて一大人格を完成し得たのである。蓋し鶴林門下の天下を風靡したのは此の二人あつたからである。その何れの一人を缺いても、恐らくはその事業は成功しなかつたであらう。遂翁は東嶺に長ずること四歳、寛政元年十二月、七十三歳で寂くなつた。

遂翁は年三十餘にして初めて白隱に松蔭寺に参じた。一旦、紀州熊野に山居してゐたが、再び出て白隱に見えた時、白隱は色を作して『闇を恐れて静を樂しみ、深山に入つて木石と伴を爲すが如き、何の長處かある』と喝出して、惡辣なる手段を弄して、更に向上の一路を示した。

遂翁は久しく松蔭寺を去る三十餘里、葦原の西青島に庵居して、講日にあらざ

れば決して來なかつた。講終れば直ちにサツサと歸つて行く。或る日、白隱が偶々遂翁を呼んだ。が、その時は已に去つた後であつた。侍者が追うて漸く求め『老和尚召し給ふ、速に來れ』と告げたが遂翁は、『和尚は召すとも我れは召さず』と、袖を拂つて行つた。

天資卓犖にして太だ酒を嗜み、自ら醉翁と號して居つたが、人の言葉に従つて遂翁と改めたのである。細事に拘はらず、言行多くは繩墨の外に逸して放縱自如であつた。白隱の滅後、松蔭寺の席を繼いだが、偶々來り参ずる者有つても『我れ何をか識らん、去つて東嶺に參ぜよ』と、竟に一語を出して人に示さなかつた。而もその會下に隨ふ者、常に七八十人を下らなかつた。遂翁、常に衆に示して曰く『古人云ふ、寧ろ緩に失するも、急に失すること勿れ。と我れは則ち然らず、寧ろ急に失するも緩に失すること勿れ』と。

その孤危險峻な機鋒は、云ふまでもなく白隱の鉗鎚に打出せられたものである

が、又た能く『大器遂翁』の面目を發揮して居る。

東嶺は白隠に見え、數年にして悉く室内の事を參得したが、而も辛鍊苦修のため遂に病を得て殆んど死に瀕した。自ら謂へらく『我れ既に宗趣を究むと雖も一旦、溘死せば何の益あらんや』と、即ち心血を濺いで『宗門無盡燈論』を著して白隠に呈し、『この中若し採るべきものあらば、正に後世に貽さむとす。はた杜撰ならば火に投ぜんのみ』と、白隠一見して驚歎し、『斯は後世點眼の藥となすべし』と云つて喜んだ。が、東嶺は切に内觀の要を感じたので白隠を辭して京に行き、嘗て白隠が白幽真人を訪ねたる白河の邊に關を掩うて病を養ひ、遂に生死悠々たる自在の境遇に到つた。

江戸の俳人、雪中庵蓼太は、嘗て白隠に松蔭寺に參じたが、後又た東嶺に龍澤寺に相見して垂示を乞うた。東嶺即ち

飛込んだ力でうかぶ蛙かな

東嶺と宗門
無盡燈論

雪中庵蓼太
の參見

東嶺の機鋒

と句を題して與へた。蓼太深く契悟して益す歸敬したと云ふ。

東嶺、嘗て嵯峨にありて説法した。時に天寒くして衆皆な畏色があつた。東嶺大喝して曰く『寒を畏る者は、須らく早く俗に還るべし、禪を學びて何かせむ。汝等、何ぞ各々諸を心に求めざる。魚は水中に在つて水あることを知らず、人は妙法の裏に在りて妙法を知らず』と、時に座下に心學者中澤道二あり、この言を聞き豁然として悟り曰く、『説法、吾が心を外にせず、即身成佛これなり』と。

微細綿密なる東嶺の行持は、遂翁とは殆んど反對の方向を歩み非常な成功をして居る。而して頗る經營の才に富んで龍澤寺の建立、至道庵の再興等、實に偉大なる功績である。平生垂示の法語等を集めて『快馬鞭』と名け、盛んに世に行はれて居る。白隠の年譜たる『龍澤開祖神機獨妙禪師年譜因行格』二卷も亦た東嶺の撰する處である。

この外、鶴林門下に實參禪子の第一人として、後に比奈の無量寺に住せる脱首

鶴林の門下

微細綿密の
行持

座白隠が一見して文殊來也と叫べる文彩縦横なる良哉、續て峻機妙用、大作家の手段あつて愚溪、行應、隱山、卓洲、閱堂の五神足を接得して、鶴林の門風をして一時に振はしめたる峩山慈棹。平生、人に接するに白刃を座右に置き、擬議すれば即ち刀を揮うて逐ひ、白隠に十倍せる險峻なる手段を弄せる葦津。その他、靈源。圓桂。快巖。環溪。悟庵。梁山。提洲。天祝。斯經。大同。層巔。頑極。長堂。切運。天崖。愚庵。長沙。關振。大休などは、悉く皆な一方の宗匠で、各々鶴林の宗風を舉揚した人々である。

猶ほ鶴林門下と密接の關係あるは古月禪材である。古月は鎮西に在て類に真正の宗風を舉揚してゐたので、白隠も一たび之れを訪はんとしたのであつた。その後、古月は寶曆元年に八十五歳で寂くなつた。而して其の門下の多くは遙に東海道を下つて白隠の爐鞴に投じたのであつた。

白隠が宗門中興の努力は、即ち人物の養成となつた。これ其の革命の成功した

る所以である。

第八節 白隠の詞藻

禪は不立文字、教外別傳である。若し文字を以て禪を解せんとせば白雲萬里である。この故に白隠は「隻手の聲」と示し、大叫一聲した。而も此の「隻手の聲」の第一義を、姑く第二義門に下つて講演するもの法語となり、語録となり、文字となつた。この文字、是れ即ち白隠の暖皮肉であり、活骨髓である。

禪は不立文字なり

荆叢毒藥 九卷

槐安國語 五卷

息耕錄開筵普說 一卷

寒山詩闡提記聞 三卷

寶鑑貽照 一卷

白隠の詞藻

應化と示寂

毒語心經 一卷

寒林貽寶 一卷

以上漢文

遠羅天釜 四編

寶鏡窟記 一卷

假名法語 一卷

辻談義 一卷

漢鹽草 一卷

邊那以智語 一卷

斂相子 一卷

兔專使稿 一卷

夜船閑話 二卷

壁生草 二卷

於仁安佐美 一卷

八重葎 二卷

假名葎 一卷

等の外に、

坐禪和讃。

大道ちよぼくれ。

子守唄。

薬病相治説。

御代の腹鼓。

草取唄。

主心お婆粉引歌。

白隠の詞藻

安心ほこりたゝ記。

施行歌。

三教一致辯。

御洒落御前物語。

見性成佛丸方書。

寢惚氣廻眼覺誌。

おたふく女良粉引歌。

與察女書。

等の短編物もある。

禪文學者の
第一人

白隠は少壯時代に、一時非常に文字に耽溺した。而して天京の詞藻を鍛錬したのであつた。瑰麗雄偉の文字、能く辛辣險峻なる機鋒を表はして居るが、而も深く語言三昧に入り、時代の趨勢に鑑み、平易明暢に世間禪を説いて、平民的に禪を布教したのは、終に白隠の名を今日に成さしめた所以である。白隠は、實に江戸時代に於ける禪文學者の第一人である。

附 録

夜 船 閑 話

白 隠 禪 師

序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾が鶴林近侍の左右に寄せて云はく、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とかや云へる草稿あり。書中多く氣を練り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、専ら長生久視の秘訣を集む。謂ゆる神仙鍊丹の至要なりと。是の故に世の好事の君子是を思ふ事、荒早の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶竊に傳寫し來るあるも、祕重し珍藏して人をして見せしめず。天瓢むなしく櫃にをさめて匿たるが如し。

夜船閑話序

願くは是れを梓に壽ながふして、以て其の渴を慰せむ。聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しみ玉ふと。若し夫れ人に利あらば、師豈是れを畜しみ玉はんやと。二虎含み來つて師に呈す。師微笑として笑ふ。此に於て諸子舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の中に葬らるゝ者中葉に過ぎたり。諸子即ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。即ち封裏して以て京師に寄せんとす。予が馬齒一日も諸子に長たるを以て、此の端由を書せん事を責む。予も亦辭せずして書す、云はく師鶴林に住する事大凡四十年、鉢囊を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子纒に門闥に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を滋しとして、辭し去る事を忘るゝ者或は十年、或は二十年、鶴林林下の塵となる事も亦總に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各西東五六里が間に分れて、舊舍廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として清苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投ずるものは菜葉麥麩、耳に觸るゝものは熱喝垢罵、骨に徹するものは噴擧痛棒、見

るもの額を攢め、聞者肌汗す、鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初め來るときは、采玉、河晏が美貌ありて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島が、形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂みあつてか片時も湊泊する事を得んや。是の故に往往參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癰塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み是れを愁ひて、師不豫の色あるもの連日、乍ち忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて、是れに授くるに内觀の秘訣を以てす、乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火道上し、身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三ツを以て是れを治せんと欲せば、縦へ、華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はず。我に仙人還丹の秘訣あり。儂が輩試みに是れを修せよ、奇效を見る事、雲霧を披いて皎日

を見るが如けん。此の秘訣を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし、其の未だ眠につかず、眼を合せざる以前に於て、長く兩脚を展べ、強く踏み揃へて一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我が此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目何の鼻孔かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が自分の家郷、家郷何の消息かある。我がこの氣海丹田、總に是れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説くと打ち返し、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の效果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たる事、いまだ篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ち去つて、五日七日乃至三七日を経たらんには、從前の五積六聚氣虛勞役等の諸症、底を拂つて平癒せずんば、老僧が頭を斬り將ち去れ。此に於て諸子歡喜作禮して、密々に精修す。

各々悉く不思議の奇效を見る。效の遲速は進修の精麤に依るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇效を讚嘆して休まず。師の曰く、爾が輩心病全快を得て以て足れりとする事勿れ。轉た治せば轉た參せよ。轉た悟らば轉た進めよ。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟すらく、生きてこの憂苦に沈まんよりは、如かじ早く死して此革囊を捨てんにはと。何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて、全快を得る事今の諸子の如し。至人の曰く、是れは之れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歳なるべし。其餘は計り定むべからず。予即ち歡喜に堪へず、精修怠らざるもの大凡三年。心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ふ。此に於て重ねて心に竊に謂へらく、縦ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の窟窠に眠るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ。今既に獨りも葛洪、鐵

扱、張華、費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て、内觀と參禪と共に合せ並べ貯へて、且つ耕し且つ戰ふ者、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩、増し得て、今既に二百衆に近し。其の中方來の衲子勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密にこの内觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉た悟れば、轉た進ましむ。馬年今歲古稀に超えたりと雖も、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず。眼耳次第に分明にして、動もすれば靈聽を忘る。毎月兩度の法施遂に倦怠せず。詩に陀方に應じて三百五百の海衆に聚會して、或は五旬七旬を経、又縁に雲水の所望に隨つて胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶと雖も、終に一日も罷講齋を鎮さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時よりは遙に勝されり。是れ皆彼の

内觀の奇效に依る事を覺ふ。住菴の諸子各々悲泣作禮して曰く、吾が師大慈大悲願はくは内觀の大略を書せよ。書して留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち領す。立處に草稿成る。稿中何の説く所ぞ。曰く、大凡生を養ひ、長壽を保つ要、形を鍊るに如かず。形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣集まる。氣集まるときは即ち眞丹成る。丹成るときは形固し。形固きときは神全し。神全きときは壽ながし。是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴の諸子此の必要を勤めて勵み、進んで怠らずんば禪病を治し、勞役を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到つて、年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜あらむ。何が故ぞ、月高くして城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正二十五曹

窮乏菴主飢凍炷香稽首題

夜船閑話

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を起激し、精鍊刻苦する者、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す。従前多少の疑惑根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して漚滅す。自ら謂へらく、道人を去る事まことに遠らず、古人三十二年是れ何の捏怪ぞと、怡悅踏舞を忘るゝもの數月、向後日用を回顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊總に脱洒ならず。自ら謂へらく猛く精彩を着け、重ねて一回捨命し去らむと。こゝに於て牙關を咬定し雙眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せむとす。既にして未だ期月に互らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、舉措恐怖多く、心神困倦し、寢寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帶ぶ。此に於て遍く明師に投じ、廣く名醫を探ると

雖も、百藥寸效なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せるものあり、世人之を名づけて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閱し、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好まず、行くとときは必ず走つて避く。人其の賢愚を辨ずることなし。里人専ら稱して仙人とす。聞く故の丈山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す。人あり禮を盡して咨叩する時は稀に微言を吐く。退いて之を考ふるに大に人に利ありと。此に於て寶永第七庚寅孟正中浣、密に行纏を着け、濃東を發し黒谷を超え、直に白河の邑に到り、包を茶店に下して幽が巖栖の處を尋ぬ。里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨つて遙に山徑に入る。正に行く事里許に乍ち流水を踏斷す。樵徑も亦なし、時に一老夫あり、遙に雲烟の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨ふて或は現はれ、或は隠る。是れ幽が洞口に垂下する所の蘆簾なりと。予即ち裳を褰げて上る。巖巖を踏み蒙茸を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露衲衣を壓す。辛汗を滴らし、苦膏を流して、漸く彼の蘆簾の

處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を覺ふ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰慄す。且らく巖根に倚て歎息するもの數百、少焉あつて衣を振ひ襟を正して、畏づく鞠躬して簾子の中を望めば、朦朧として幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に至り、朱顏麗ふして棗の如し。大布の袍を掛け、軟草の席に坐せり。窟中纔に方五六笏にして全く養生の具なし。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予即ち禮を盡くして、苦ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ。少焉幽眼を開いて熟々視て徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、樞栗を拾ふて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此の外更に何を知らむや。自ら愧づ遠く上人の來訪を勞することを。予即ち轉た咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を投らへて精しく五内を窺ひ、九候を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として頰を擗めてつけて曰く、已哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して終にこの重症を發す。寔に醫治し難きものは公の禪病なり。若し鍼灸藥の三ツの物を待んで、而して後に之を救はむ

と欲せば、扁倉力をつくし華陀類を擗むるも、奇效を見る事能はじ。只今既に觀理の爲めに破らる。勤めて内觀の效を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予曰く、願はくは内觀の要秘を聞かむ。學びがてらに之を修せむ。幽肅々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼公の如きは問ふ事を好むの士なり。我が昔聞ける處を以て徹しく公に告げんか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀なり。怠らずんば必ず奇效を見む。久視も亦期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生類、先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脈行はる。衛氣營血、互に昇降循環するもの、晝夜に大凡五十度、肺金は牝藏にして隔上に浮び、肝木は牡藏にして隔下に沈む。心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五藏に七神あり、脾胃各々二神を藏す。呼は心肺より出て吸は腎肝に入る。一呼に脈の行く事三寸、一吸に脈の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脈一身を巡行する事五十次、

火は輕浮にして常に騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず
 觀照或は節を失し、志念或は度に過ぐる時は心火熾衝して肺金焦薄す。金母苦し
 む時は水子衰減す。母子互に疲傷して各々五位困倦し六屬凌奪す。四大増損して
 各々百一の病を生ず。百藥功を立つる事能はず。衆醫總に手を束ねて、終に告る
 處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は、常に心を下に專
 らにし、暗君庸主は、常に心を上に恣にする。上に恣にするときは、九卿權に
 誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事なし。野に菜色多く、國餓孁
 多し。賢良潛み竄れ、民臣嘖り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、遂に民庶
 を塗炭にし、國脈永く斷絶するに至る。心を下に專らにするときは、九卿儉を守
 り、百僚約を勤めて、常に民間の勞役を忘るる事なし。農に餘まんの粟あり、婦に
 餘まんの布ありて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え國強く、令に違するの丞
 民なく、境を侵すの敵國なし。國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。

人身もまた然り。至人は常に心氣をして、下に充たしむ。心氣下に充つるときは
 七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず。營衛充ち心神健かなり。口
 終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上
 に恣にする。上に恣にするときは、三寸の火、四寸の金を尅して、五官縮まり
 疲れ、六親苦しみ恨む。是の故に漆園曰く、真人の息は、是を息するに踵を以て
 し、衆人の息は、是れを息するに喉を以てす。許俊が曰く、蓋し氣下焦にあると
 きは、其息遠く、氣上焦にあるときは、其息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の
 氣あり、丹田の中に降下するときは、一隔また復す。若し人始初復の候を知らん
 と欲せば、暖氣を以て、是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼
 ならむ事を要し、下部は常に溫暖ならむ事を要せよ、夫れ經脈の十二は、支の十
 二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一再を全ふす
 るが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是を地雷復と云ふ。冬至の候なり。眞

人の息は、是れを息するに腫を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す。是れを地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象。人は是れを得るときは營衛充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる。是れを山地剝と云ふ。九月の候なり。天是れを得るときは、林苑色を失し、百卉荒落す。是れ衆人の息する喉を以てするの象。人は是れを得るときは、形容枯槁し、齒牙搖落す。所以に延壽書に曰く、六陽共に盡く、即ち是れ全陰の人死し易し、須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ。是れ生を養ふ樞要なる事を。昔吳契、初石臺先生に見ゆ。齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の曰く、我に元立神丹の神祕あり。上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。古へ黃成子は是れを以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫れ大道の外に真丹なく、真丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり。備の六慾を去り、五官各々其の職を忘るゝときは、混然たる本源の真氣、彷彿と

して目前に充つ。是れ彼の太白道人の謂ゆる我が天を以て事ふる處の天に合せものなり。孟軻子の謂ゆる浩然の氣、是れをひきわた、臍輪氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ねて是れを守つて守一にし去り、是れを養ふて無適にし去つて、一朝乍ち丹竈を掀翻するときは、内外中間八絃四維、總に是れ一枚の大還丹、此の時に當つて初めて自己即ち是れ天地に先つて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の真箇長生久視の大神仙なる事を覺得せむ。是を真正丹竈功成る底の時節とす。豈風に御し霞に跨り、地を縮め水を踏む等の瑣末なる幼事を以て懐とするものならんや。大洋を攪いて酥酪とし、厚土を變じて黃金とす。前賢曰く、丹は丹田なり、液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是の故に金液還丹と云ふ。予が曰く、謹んで命を聞いて、且く禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は、李士才が謂ゆる清降に偏なるものにあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからんか。幽微々として笑つて曰く、然らず、李士曰はずや、

火の性は炎上なり、宜しく之を下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しく之をして上らしむべし。水上り火下る、之を名づけて交と云ふ。交るときは既済とす。交らざる時は未済とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂ゆる清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はんとなり。古人曰く、相火上り易きは、心中の苦しむ處、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して、静を主り、相火は下に處して、動をつかさどる。君火は之れ一身の主なり。相火は寄補たり。蓋し相火に兩般あり、謂ゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是の故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か水に非ずと云ふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く心勞煩するときは、虚して心熱す。心虚するときは、是れを補するに心を下して以て腎に交ふ。是れを補と云ふ、既済の道なり。公先きに心火逆上して、この重病を

發す、若し心を降下せずんば、縦へ三界の祕密を行し盡したりとも、起つ事得じ。且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に釋に異なるものとするか、是れ禪なり。他日打發せば大に笑ひつべきの事あらむ。夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀のものは邪觀とす。向きに公多觀を以て此の重症を見る、今之を救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間に於かば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん。是れ真觀清淨觀なり。云ふ事なけれ、暫く禪觀を放下せんと。佛の言く、心を足心に收めて、能く百一の病を癒すと。阿含に酥を用ゆるの法あり、心の勞疲を救ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に病因を論ずる事甚盡せり。治法を説くことも甚精密なり。十二種の息あり、よく衆病を治す。臍輪を縁して豆子を見るの法あり。其の大意心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但だ病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し繫緣誦眞の二止あり。誦眞は實相

の圓觀、繫縁は心氣を膺輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是れを用ゆるに大に利あり。古、永平の開祖師、大宋に入て如淨を天童に拜す。師、一日、密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子、坐禪の時、心を左の掌の上に置くべしと。是れ即ち韻師の謂ゆる繫縁止の大略なり。韻師初め此の繫縁内觀の秘訣を教へて、其の家兄鎮愼が重禱を、萬死の中に助け救ひ玉ふことは、精しくは小止觀の中に説けり。また白雲和尚曰く、我れ常に心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し衆を領し、賓を接し、機に應じ、及び小參普説七縱八横の間に於て、之を用ひてつくる事なし。老來殊に利益多き事を覺ふと、寔に貴ぶべし。是れ蓋し素問に見ゆる恬憺虚無なれば、真氣之に従ふ。精神内に守らば、病何れより來らんと云ふ語に基づき玉ふものならんか。且つ夫れ内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨接、八萬四千の毛竅、一毫髪ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。之れ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神

導氣の法當さに深く密室を鎖し、牀を安んじ席を暖め、枕の高さ二寸半、正身眠臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上に附けて、動かざること三百息を経て、耳聞く處なく、目見る處なく、斯くの如くなるときは、寒暑も侵す事能はず、蜂螫も毒する事能はず。壽三百六十歳、是れ真人に近しと。又蘇内翰が曰く、已に飢ゑるて方に食し、未だ飽かずして先づ休む。散步逍遙して、力めて腹を空しからしめ、腹の空なる時に當つて、即ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ。一息より數へて十に至り、十より數へて百に至り、百より數へて放ち去つて千に至りて、此の身兀然として此の心寂然たる事虚空に等し。斯の如くなる事久しふして、一息自ら止むる。出でず入らざる時、此の息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸症自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として目を開くが如けん。此時人に尋ねて、路頭を指さす事を用ひず。只要尋常言語を省略して、懶の元氣を長養せん事を。

是の故に云ふ。目力を養ふものは常に瞑し、耳根を養ふものは常に飽き、心氣を養ふものは常に黙すと。予が云く、酥を用ふるの法、得て聞いつべしや。幽が曰く、行者定中四大調和せず、身心共に勞疲する事を覺せば、心を起して應に此の想を成すべし。譬へば色香清淨の輭蘇鴨卵の大ききの如くなるもの、頂上に頓在せんに、其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間を濕ほし、浸々として潤下し來つて、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁骨次第に沾注し將ち去る。此の時に當つて胸中の五積六聚、疝癖塊痛、心に隨つて降下すること、水の下に就くが如く、歷々として聲あり。遍身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至つて即ち止む。行者再び應に此の觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積もり湛へて、暖め煎す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煎湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け煎すが如し。此の觀をなすときは唯心所現のゆるに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の輭觸を受く。身心

調適なる事、二三十歳の時には遙に勝れり。此の時に當つて積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若し夫れ勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらん、何れの徳か積まざらん、何れの仙か成ぜざる、何れの道か成ぜざる。其の效驗の遲速は、行人の進修の精進に依るらくのみ。走始め卯歳の時、多病にして、公の患に十倍しき、衆醫總に顧みざるに到る。百端の窮むと云へども、救ふべきの術なし。此に於て上下の神祇に祈りて天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや、計らずも此の輭酥の妙術を傳受する事を。歡喜に耐へず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半銷除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々、月の大小を記せず、年の閏餘を知らず、世念次第に輕微にして、人慾の舊習も何つしか忘れたるが如し。馬年今歲何十歳なる事もまた知らず。中頃端由ありて若丹の山中に遭逢するもの、大凡三十歳、世人凡て知る事なし。其の中間を顧みるに、恰も黃梁半熟の一夢の如し。今の此の山中無人の所に向つて、此の枯

稿の一具骨を放つて、太布の單衣僅に二三片を掛け、嚴冬の寒威綿を析くの夜といへども、枯腸を凍損するに至らず、山粒既に斷えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の力ならずや。我今既に公に告ぐるに一生育ひ盡さる底の秘訣を以てす。此外更に何をか曰はんやと云つて目を收めて默坐す。予も亦涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末僅に殘陽を掛く。時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで、畏づ／＼回顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る。即ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し、恐らく歸客を惱さん、老夫去ばらく歸程を導かんと云つて、大駒履を着け、瘦鳩杖を曳き、巖巖を踏み嶮岨を渉る事飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の溪水の所に到つて、即ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと云つて慘然として別る。且らく柴立して幽が回歩を目送するに、其の老歩の勇壯な

る事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し。且つ羨み且つ敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する能はざる事を。徐々として歸り來つて時々、彼の内觀を潜修するに、僅に三年に充たざるに、従前の衆病藥餌を用ひず、鍼灸を借らず、任運に除遣す。獨り病を治するのみならず、従前手脚を挟む事得ず、齒牙を下すこと得ざる底の難信、難透、難解、難入底の一着子、根に透り、底に徹して、透得過して大歡喜を得るもの、大凡六七回。其餘の小悟怡悅、蹈舞を忘るゝもの數を知らず。妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟數を知らずと。初めて知る、寔に我れを欺かざる事を。古、二三緇の襪を着くといへども足心常に氷雪の底に浸すが如くなるも、今既に三冬嚴寒の日といへども、襪せず爐せず、馬齒既に古稀を超えたりといへども、指すべき半點の小病なき事は、彼の神術の餘勳ならんか。云ふ事なけれ、鶴林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て陀の上流を誑惑すと。是れつとに靈骨あつて、一槌の既に成ずる底の俊流の

爲に設くるにあらず、癡鈍子が如く、勞病子に類する底、看讀して仔細に觀察せば、必ず少しく補ふならむか。唯恐る別人の手を拍して大笑せん事を。何が故ぞ、馬枯箕を咬んで午枕に喧し。

遠羅天釜

白隱禪師

鍋島攝州侯近侍に答ふる書

日の昨は遠路御使札益御勇健にて朝鮮人御馳走首尾よく相濟御安堵の旨一段の御事に候、草廬恙なく罷在候是又高慮を勞せられ間敷候、且又動靜二境の上に於て御工夫怠慢なく、御心掛なされ候條珍重の御事に候、其外に書中に仰越れ候件逐一老僧が野情に相契ひ、御奇特千萬の御事如何許り悦び入り候總じて一切の修行者精進工夫の間に於て、心掛悪く侍れば動靜の二境に障られ、昏散の二邊に隔られ、心火逆上し、肺金痛み悴け元氣虚損して難治の病症を發するも間々多き事に侍り、又内觀の眞修に依て能々修練致し侍れば、至極養生の秘訣に契つて心身堅剛に氣力丈夫にして、萬事輕快に法成就にも到る事に候、

去程に大覺調御も阿含部に於て、右の趣を委しく教諭此あり、天台の智者大師も其の大意を汲て摩訶止觀の中に丁寧に示し置れ侍り、書中の大意は縦ひ何分の聖教を披覽し何分の法理を觀察し、或は長坐不臥し或は六時行道すと云ども、常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ塵務繁絮の間賓客揖讓の席に於ても片時も放退せざる時は、元氣自然に丹田の間に充實して臍下瓠然たる事未だ篠打せざる鞠の如し、若人養なひ得て斯の如くなる時は、終日坐して曾て飽ず終日誦して曾て倦ず、終日書して曾て困せず終日説て曾て屈せず、縦ひ日々に萬善を行ずと云ども終に退惰の色なく、心量次第に寛大にして氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、立冬素雪の冬の夜も襪せず爐せず、世壽百歳を閱すと云ども齒牙轉堅剛なり、怠らざれば長壽を得、若それ果して斯の如くならば、何れの道か成ぜざる、何れの戒か持たざる、何れの定か修せざらん、何れの徳か充ざらん、若又如上の故實に達せず、眞修の秘訣を諳んぜず、妄りに自ら悟解了

知を求めて觀理度に過ぎ思念節を失する時は、胸膈否塞し、心火高ぶり上り、兩脚氷雪の底に浸すが如く、雙耳溪聲の間を行に齊うして、肺金痛み悴け水分枯渴して終に難治の重症を發して命根も亦保ち難きに至る、是た眞修の正路を知ざる故なり、寔に悲むべし、蓋し摩訶止觀の中に假縁止、誦眞止と申す事の侍り、只今申し談ずる内觀の法とはかの假縁止の大略にて侍り、老夫も若かりし時工夫趣向悪く心源湛寂の處を佛道なりと相心得、動中を嫌ひ靜處を好んで常に陰僻の處を尋ねて死坐す、假初の塵事にも胸塞り心火逆上し、動中には一向に入る事得ず舉措驚悲多く、心身鎖へに怯弱にして兩腋常に汗を生じ、雙眼斷えず涙を帶ぶ、常に悲歎の心多く、學道得力の覺えは毛頭も侍らざりき、何の幸ぞや、中頃よき智識の指南を受て内觀の秘訣を傳受し、密々に精修する者三年従前難治の重病は、いつしか霜雪の朝曦に向ふが如く次第に消融し、宿昔齒牙を挾む事得ざる底の難信難透難解難入底の惡毒の話頭は病に和して氷消し、今歳從心の齡を經と云ども

三四十歳の時より氣力十倍し、心身ともに勇壯にして脇席を濕さず、恣に偃臥せざる者動もすれば二三日を経る事間此あれども、心力衰減せず三百五百の燕頤虎頭に圍繞せられて經論を講演し語録を評唱して、三句五句を経れども曾て疲倦の色なき者は自ら覺ゆ此内觀の力による事を、初め養生を第一とし、内觀工夫の間求めざるに不慮の省悟得力幾度と云ふ數を知らず、唯動靜の二境を嫌はず取らず、密々に進修してもて行事、第一の行持に侍り、往々に靜中の工夫は思の外に抄行様に思はれ、動中の工夫は一向に抄行の様に覺えらるゝ事に侍れど、靜中の人は必ず動中には入事得ず、たま〜動境塵務の中に入る時は平生の會處得力は迹形もなく打失し、一點の氣力無して、結句尋常一向に心がけ、これ無人よりは劣りて芥許りの事にも動轉して思の外に臆病なる心地あつて卑怯の働も問多き者に侍り、然らば則ち何を指てか得力と云んや、去程に大慧禪師も動中の工夫は靜中に勝る事百千億倍すと申し置れ侍り、博山は動中の工夫成じ上らざる事一百二十斤の重

擔を荷つて羊額嶺頭上るが如しと申されき、蓋かく云ばとて靜中を捨嫌つて故意に動處を求め給へと云にはあらず、唯動靜の二境を覺えず、知ぬ程工夫純一なるを貴とす、所以に云真正參禪の衲子は行て行く事を知ず坐して坐する事を知らずと、中に就て眞實自性の淵源に徹底して、一切處に於て受用する底の氣力を得んとならば動中の工夫に越たる事は侍るべからず、譬ば茲に何百兩の黄金あらんを、人をして守護せしめんに室を閉扉を鎖して其傍に坐し守て、人にも取れず奪れずとて、中々氣力有んずる者の手柄とも働とも申さるべき事にし非ず、是を二乗聲聞の自了偏枯の修業に比す、又一人有り群盜蜂の如くに起り、凶黨蟻の如くに馳廻らんず中をか金の持して何某の處まで贈り届けよと命ぜられたらんに、彼の男膽氣あつて大劍を挟み脛高く褰げかの金を取て棒頭に突掛け、打傾て一交もせて彼所へ贈り届けて少しも恐るゝ氣色なくんば、天晴甲斐甲斐しき働き大丈夫の氣象とも稱嘆すべき事なり、これを圓頓菩薩の上求菩提下化衆生の

眞修に比す、何百兩の黄金とは正念工夫堅固不退の**大志**を云り、群盜蜂の如く凶
 黨蟻の如しとは、五蓋十纏五欲八邪の妄念を云り、彼男とは眞正參禪圓頓究竟の
 上士を云り、何某の處とは常樂我淨の四德具足大寂彼岸の實所を云り、この所以
 に言眞正參立の衲子聲色堆裏に向て坐臥すべしと、往々に古の二乘聲聞なりと
 て輕しむれども、見道の力も智徳の光も今の世の人々の及ぶべき事にし侍らず、
 只修行の趣向あしく空閑の處をのみ好みて、都て菩薩の威儀を知らず、佛國土の
 因縁なき故に、如來は疥癩野干の身に比し淨名に焦芽敗種の部類なりと呵責し玉
 ひき、三祖大師の宣はく『一乘に趣かんと欲せば六塵を惡む勿れ、』と是又六塵を
 數奇好めとは非ず、水鳥の水に入ども少しも翼の潤はざる如く、平生六塵の上
 に於て取らず捨ずして間斷なく正念工夫相續せよとの心にて侍り、若又一向に六
 塵を避八風を恐れれば、覺ず二乗の白業に墮して、永く佛道を成ぜじとなり、永嘉
 大師は『欲に在て禪を行ず知見の力、火裏に蓮を生ず終に壞せず』と宣ひき、是

亦五欲に耽着せよとの心にて侍らず、五欲六塵の上^{うへ}に在ても蓮の泥土に汚されざ
 るが如く、純一に受用せよとの心にて侍り、然るに山林野外に在て一食卵齋し、
 六時行道する人さへ道業純一になる事能はず、況や夫婦昆弟の間に交り塵務紛然
 たる巷をや、若それ見性の眼なくんば毫釐も相應する事能はじ、是故に達磨大師
 云く若欲覓佛須是見性と、若又忽ち諸法實相唯一乘の知見を開かば、六塵即ち
 禪定五欲即ち一乘なるが故に、語默動靜常に禪定中なるべし、若果して然らば、
 彼山林に在て禪を行する底と得力霄壤の間を隔てん、火裏の蓮とは世間希有の行
 者なりと稱歎し玉ふにしあらず、永嘉は天台の三諦即一の堂奥に達し、止觀の修
 行は精く鍛鍊し玉ひたれば、傳中にも四威儀に常に禪觀に冥ずと稱歎したる程な
 れば、片言隻字といへども中々容易の事に非ず、四威儀に常に禪觀に冥ずとは、
 四儀即ち禪觀禪觀即ち四儀なるに冥合したる境界を云り、彼菩薩は道場を起すし
 て諸の威儀を現すと説たまひしと同一模範なり、それ蓮は水中にさける華なる

故に、火邊に近付時は立處に枯涸事なり、然れば火氣は蓮には上もなき敵藥ならずや、然るに火裏よりさき出たらん蓮は烈火に向ふ程いよ／＼色香を増して麗はしかるべし、彼五欲を避嫌つて最初より修行したらん人は、縦ひ我法の二空に通じ見道如何許り明かなりとも、靜中を離れ動中に向ふ時は蜺蝦の水を失へるに等しく、獼猴の林樹を離れたるに似て、半點の氣力無して左ながら水中の蓮の火氣に逢つて忽ち凋枯するが如けん、若又平生六塵の上にて於て精彩を著け純一無雜打成一片にして毫釐も錯らず、彼何百兩の黄金を亂世の時贈り届し人の如く猛く甲斐々々しき氣象を押立て、片時も間斷なく勵み進みたらんには忽ち自心の源底を掀翻し、生死の命根を踏斷して虚空消殞し鐵山摧る底の大歡喜あらん、彼火裏よりさき出たる蓮華の火氣に逢うて、うたゝ色香を増すが如けん、何が故ぞ火氣即ち蓮華、蓮華即ち火氣なる故に、只返々も内觀眞修寔に放過すべからざる至要なり、内觀の眞修とは吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是趙州の無字無字何の

道理かある、吾この臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是自己本來の面目、面目の鼻孔何れの處にかある、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾唯心の淨土、淨土何の莊嚴かある、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是吾己身の彌陀、彌陀何の法をか説く、吾此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心總に是吾本分の家郷、家郷何の消息かあると咳唾掉臂寤時寐時男子たる者の思ひ立たる事を遂げずや置べき、仕果すやあるべきと決烈勇猛の大憤志を震つて間もなく進み給は、平生の心意識情すべて行はれず、胸襟分外に清涼に分外に皎潔にして萬里の層氷裏にあるが如く、縦ひ亂軍の場に入り歌舞遊宴の歌吹海に入るといへども人なき處に在が如く、雲門大師の氣宇王の如しと道底の大機は求めざるに煥發せん、此時に當つて諸佛衆生も是幻生死涅槃猶如昨夢天堂地獄を徹見し、佛界魔宮を銷融し佛祖の正眼を暗却し、恣に百千無量の法門微塵恒沙の妙義を説き宣、一切の含識を利益し塵沙劫を経て退屈せず永劫大法施を行じて、曾て乏しき事なく空華

の萬行を展開し、谷響の度門を建立し臂に奪命の神符を掛け、口に法窟の爪牙を
 咬み鳴らして十方參立の衲子を惱害し、釘を抜き楔を奪つて毫釐も假事なく、一
 個半個牙劍樹の如く口血盆に似たる底の凶惡無義の鈍瞎漢を打出して、以て佛祖
 の深恩を報答す、是を佛國土の因緣菩薩の威儀と云ふ、是はこれ萬夫に傑出する底
 の大丈夫兒生平の懷素なり、彼寂靜無事の處に在て識神を認得して見性なりと相
 心得楷磨淨盡して以て足りとする底の無眼禿奴の族は、夢にも曾て見る事を得ん
 や、是等の族は終日無爲を行じて終日有爲を打し、終日無作を行じて終日有作を
 打す、何が故ぞ見道分明ならず親しく法性の實際を窮ざる故に惜べし、再び得難
 き一生を盲龜の空谷に入が如く鬼の棺木を守るに似て、やみくくと過了苦しか
 りし三塗の舊里へ懲もなく、立歸らん事皆是進修の指南惡く見性本より真ならざ
 るが故に一生空しく心力を勞し盡して、終に方寸の功を立る事能はず寔に憐むべし、
 去程に時宗一遍上人の如きは鉦子を頸に打掛念佛しながら、一度三塗に入ぬれば

再びかへる事ぞなきと打泣く、東は奥州出羽の果西は筑紫博多の浦の奥までも
 告廻り給ひけるが、終に由良の開祖に見て往生の大事を決定し給ひけるとぞ、寔
 に貴き芳躅ならずや、つらく人界の始終を思ふに、天上に生ずべきには福力足
 らず、三塗に墮すべきには罪業足らず、終に此娑婆穢土の生を感得す、その中國
 王大臣長者居士等の人々は前生多少の善縁を修し、許多の勝因を植ゑ來れども天
 上へ生ずべきには福力足らずして、今大饒富貴の家に生れて臣妾を前後に従へ寶
 財を左右に束ねて何の辨へもなく、萬民を憐まず士庶をも惠まず僑奢の心のみ多
 くて今日も惡業惡因明日も亦殺業苦種多少の福徳を擔ひ來つて徒に空華の榮耀
 をのみ極めて、限もなき罪業に仕かへて擔もて果しもなき惡趣の巷へ立ち歸り玉
 ふは、世間に限りもなき事に侍り、只返すくも内觀の秘要を捨ておかず熟鍊是
 あるべし、内觀の眞修は第一養生の秘術にして仙人鍊丹の大事に契へり、その初
 は金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に至つて、摩訶止觀の中に精しく口授し玉

へり、吾壯年の頃ほひ是を道士白幽先生に聞けり、白幽は城州白川の巖窟に隠れて聞壽齡二百四十歳を閱すと、時の人は是を稱して白幽仙人と云ふ、故の丈山氏の師範なりと、幽が言に曰く大凡生を養ふの術上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要す、須く知べし、元氣をして下に充しむるは是生を養ふ至要なる事を、往々に神丹は五行合て鍊と云ふ事をのみ聞いて、水火木金土の五行は即ち眼耳鼻舌身の五根なる事を知らず、五根を聚て神丹を鍊とは如何なる事ぞとならば、蓋五無漏の法あり、眼妄りに見み耳妄りに聞かず、舌妄りに言はず身妄りに觸ず、意妄りに思慮せざる時は、混然たる本元の一氣湛然として目前に充つ、是即ち彼孟軻氏の謂ゆる浩然の一氣なり、是を引て臍輪氣海丹田の間に收て歲月を重ね是を守つて守一にし去り、是を養つて無適にし去時覺えず丹竈を掀翻して、内外中間八絃四維總に是一枚の大還丹自己即ち是天地に先つて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の長生久視の大神仙なる事を覺得せん、茲に於て大洋を

攪いて酥酪となし、厚土を變じて黄金とす、是故に言『還丹一粒鐵を點じて金と成す』白玉蟾が曰く『生を養ふの要は先づ形を練るに若かず、形を練るの妙は神を凝すにあり、神凝れば則ち氣聚る、氣聚れば則ち丹成る、丹成れば則ち形固し、形固ければ則ち神全し』と須く知るべし、丹は果して外物に非る事を、蓋し地に玉田あり、梁田あり、玉田は珠玉を産するの地、梁田は禾稼を成するの場、人に氣海丹田あり、氣海は元氣を收養ふの寶所、丹田は神丹を精練し、壽算を保護するの城府なり、古に云く『江海、能く百谷の王たる所以は其の善く之に下るを以てなり』滄海既に萬水の下を占て百川を包容して増減なし、氣海既に五内の下に居して真氣を收て飽事なし、終に神丹を成就し仙都に入る、丹田なる者一身三處吾謂ゆる丹田は下丹田なる者なり、氣海丹田各々臍下に居す、一實にして二名あるが如し、丹田は臍下二寸氣海は寸半真氣常に此内に充實して、身心常に平坦なる時は世壽百歳を閱すと云ども、鬢髮枯れず齒牙動かず眼力うた、鮮明にし

て皮膚次第に光澤あり是則ち元氣を養ひ得て神丹成熟したる效驗なり、壽算限り有べからず、但し修養の功の精處如何に在らくのみ、古の神醫は未だ病ざる先を治す、よく人をして心を攝め氣を養はしむ、庸醫は是れに反す、已に病の後を見ず針灸薬の三を以てこれを治せんとす、救ざるもの多し、大凡精氣神の三の物は一身の柱礎なり、至人は氣を惜んで使はず、蓋し生を養ふの術は國を守るが如し、神は君の如く精は臣の如く氣は民の如し、夫その民を愛するは其國を全うするゆゑなり、其の氣を惜むは其身を全うするゆゑなり、民散ずる時は國亡ぶ、氣竭る時は身死す、此故に聖主は常に心を下に專にし、庸主は常に心を上に恣にする、上に恣にする時は九卿寵を恃み、百僚權に傲つて曾て民間の窮枯を顧る事なし、斂臣貪り掠め酷吏偽り劊、野に菜色多く、國に餓殍倒る、賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨み終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷るに至る、心を下に專にする時は、常に民間の勞疲を忘る事なく、民肥え國強く令を違するの臣民なく、境を侵の敵國

なし、人心も亦然り至人は常に心氣をして下に充しむ、此故に七凶内に動事なく、四邪外より侵す事能はず、營衛充ち心神健なり、身終に針灸の痛痒を知ざる事強國の民の刁斗の聲を聞ざるが如し、岐伯昔し黄帝の間に答ふ、恬淡虛無なれば真氣これに従ふ、精神内に守らば病安よりか來らんと、今の人は此に反す、生より死に至るまで、主心片時も内を守る事なし、主心とは何物と云ふ事をさへ知らず、無知なる事犬馬の日々に足に任せて走るが如し、危いかな、兵家に云ずや驚悲安りに起るは主心定らざる故なりと、蓋し主心内に守る時は憂悲恐怖安りに生ずる事なし、若人片時も主心なき時は死人に如同す、或は放辟邪侈至らずと云ことなし、譬へば茲に一箇の舊宅有んに、衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云ども、主の有んずる家へはゆる無うして他の人妄りに出入する事叶はず、其家もし主人を失する時は賊盜も潛み休ひ、乞兒も亦來り宿し狐兔競ひ走り、狸貉竄れ睡る閑神盡さけび野鬼夜吟ず、千妖百怪群邪の窟宅とならん、人身も亦然り、正念工夫の主

心臍輪氣海の間に磐石などを淘居たるが如く、凜然として主張する時は一點の妄念情量なく、半點の思想卜度なうして、天地一指萬物一馬、厚重山の如く寛大海の如くなる底の一員の大丈夫、佛祖も手を扱む事能はず、魔外も窺ひ知る事得ず、日々に萬善を行じて以て倦事なし、謂つべし、真正報恩底の佛子なりと、其人忽ち邪境に奪はれ妄縁に引れて覺えず正念工夫の主心を打失す、是を忽然念起名爲無明と云、煩惱の邪魔蜂の如くに起り、邪見の妖魅蟻の如くに競つて四大夢幻の廢舎五蘊空華の朽宅忽ち化して魔魅の住處となりぬ、千態萬狀日々に幾萬種の生死ぞや、外面は高踏たる君子の風標あれども、内心は夜叉の變態多きが如し、心上は鎮へに八島の合戦より苦しく、胸中は常に九國の兵亂よりも煩はし、恰も長者火宅の譬へに等し、是を生死亡常没の業海と云、若夫正念工夫の船筏精進勇猛の櫓帆なくんば、識浪情派の急流におし浸されて、臭烟毒霧の暗區を越得て四徳の彼岸に到る事を得んや、悲哉人人如來の智慧徳相を具足して少しも缺事な

く、箇々佛性の如意寶珠を圓備し鎮へに大光明を放つて娑婆即寂光の淨刹毘盧法性の眞土に住みながら、慧眼すてに盲たる故に、娑婆なりと見錯り衆生なりと思ひ違へて、得難き人身、逢ひ難き一生を闇々と牛馬などの無智昏愚なる如く、何の辨もなく明かし暮して、苦しかりし三塗悲しかりし六趣の巷を吟ひ遠りて、少しも變遷あらざる舍那常寂の眞土を把へて地獄なりと恐れ迷ひ、無間なりと泣き苦しむ、是只よの常とるにも足らぬ斷無の小見に傲り片腹痛き少許の口耳の學解に傲て、佛法を信ぜず正法を聞かず、虛口をのみりて正念工夫の主心を片時も守る事なき人々のなれの果なり、悲みても尙悲しむべきは流轉永劫の罪累、恐れても尙恐るべきは生死長夜の苦果なり、天下の三聖人なりと崇られさせ給ふ、延喜天曆の帝さへ焦熱の猛火に黒ませ給ふを筈が岩屋の日藏上人はまのあたりに見上りたりしに、我は粟散小國の王たる事を持ち、橋慢甚しかりし罪にて斯は成たるぞと宣けるとぞ、敏行の朝臣は和漢の才に長じ手迹麗しくおはして法華經二百部

まで書寫し給ひたれども、正念工夫はおはさりければ、苦趣に墮して紀の友則の許に來りて、救ひを乞給ひけるとぞ、又本朝無雙の名將也と稱せられ給ひて目に餘りたる朝敵を從へ、至尊の宸襟を休め奉り、南都北京の貴僧高僧も加持しあぐみたりける天子の御惱を弓のすびきして弦音にて搔拭ひたる如く治し上りたる程の八幡殿さへ、閻王の廳に跪き給ひ、多田の満仲は病中閻王の使に召されて冥府の有様を見了り蘇生し、殊の外に恐怖し給ひて直ちに六角堂に入道し念佛し給ひけるに、汗と涙と疊を打透しけるとぞ、六國を併呑し四海を囊括して八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も、鬼趣に墮して苦を受け、周の武帝は鐵梁の責を受け、梟雄天下に聞えたりける秦の白起は糞泥獄に沈みて後明の洪武の始吳山の三茅觀なる處に於て雷、白き蜈蚣の長け尺餘なるを震殺しけるに、背に白起と云る文字ありくと記しき由罪業の空じ難き事知ぬべし、謂事なかれ塵務繁絮にして參禪に暇なく、世事續紛として工夫續き難しと、須く知べ

し真正參禪の衲子の前には塵務なく、世事なき事を、譬へば茲に一人あらんに、往來絡繹たる巷稠人廣衆の中に於て錯つて二三片の金子を遺落したらんに、人目しげしとて棄てや置べき、物賦がしとて尋ねずやあるべき、多くの人々を押わけかいくつても一回尋ね出して我手に入ざらん限りは、心頭休罷する事能はじ、然らば則ち塵務繁しとて參禪を怠り、世事煩はしとて工夫を廢せん人々は諸佛無上の妙道を以て、彼兩三片の黄金程には貴び惜まざる者に非ずや、塵務の上世波の間に於て彼黄金を遺落したりし人の如く專一に究明したらんには誰か歡喜の眉を開かざらんや、此故に妙超大師曰く「見るやいかに加茂のきをひの駒くらべ、かけつかへすも坐禪なりけり」と、眞珠庵主は此意を述して看經すべからず坐禪すべし、掃地すべからず坐禪すべし、茶の實種べからず坐禪すべし、馬に乗るべからず坐禪すべしと、これは是真正參禪底の古實なり、吾正受老人常に云く、不斷坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、管絃歌舞の席

に入ても、安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで退かず、譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉られて、三千大千世界を遠る事千回百匝すと云ども、正念工夫片時も打失せず、相續不斷なる是を名て眞正參禪の禘子とす、十二時中只面皮を冷却し眼睛を瞪却して、毫釐も人情を交へざれと寔に貴ぶべし、兵法にも亦云ずや、且戦ひ且耕す是萬全之良策也、參學もまた爾り、工夫は且戦ふの眞修、内觀は且耕の至要、鳥の雙翼の如く車の兩輪の如し、内觀の秘訣は、予向に江湖參立の禘子の爲に夜船閑話に書し了れり、予常に此等の趣を以て禘子の禘病を救ふ事幾人と云數を知らず、中に就て重症必死に向とする者八九を治す、學者必ず内觀と參學と共に合せ並べ貯へて以て生平の本志を成ぜよ、學道の人縦ひ參じて五派七流の大事を究得るとも、若夫れ短壽ならば何の用を成すに堪んや、縦ひ又内觀の力に依て彭祖が八百の歳時を閱すと云とも、若し夫れ見性の眼無んば唯是れ一箇老大の守屍鬼何の好事あらん、若し又枯坐

默照を以て足りとせば、枉て一生を錯り大いに佛道に違せん、只佛道に違するのみに非ず、大に世諦もまた廢せん、何が故ぞ若夫諸侯大夫は朝觀を怠り、國務を廢して枯坐默照し、武夫は射御を疎にし武術を忘れて枯坐默照し、商賈は戸店を鎖し算盤を碎て枯坐默照し、農夫は犁鋤を擲ち耕耘を止めて枯坐默照し、工匠は繩墨を捨て斧斤を抛て枯坐默照せば、國衰へ民疲れ、賊盜頻りに起つて國を危からんか、然れば則ち衆民瞋り恨て必ず云ん、禘は窮めて不祥の大兆なりと、殊に知古へ禘林の盛なりし時南嶽、馬祖、百丈、黄檗、臨濟、歸宗、麻谷、興化、盤山、九峰、地藏等の諸聖拽石搬土、水薪菜蔬、作務普請の鼓を鳴して専ら動中の得力を求む、此故に百丈大師曰く『一日作ざれば一日食はず』と、是を動中の工夫不斷坐禪と云ふ、此風近代地を拂つて盡、蓋し斯いへばとて坐禪を嫌ひ静慮を誘るにし非ず、大凡一切の賢聖古今の智者、禘定に依ずして佛道を成就する底半箇も亦無し、夫れ戒定慧の三要是佛道萬古の大綱なり、誰か敢て輕忽にせ

んや、然るに向に謂ゆる禪門の諸聖の如きは、超宗越格眞正無上の大禪定擬議するときは、即ち電轉じ星飛ぶ、羝羊の眼狐狸の智、如何ぞ敢て窺知る事を得ん、縦ひ又黙照枯坐して立地に成佛し、立地に大光明を放つ底の好事ありとも、諸侯大夫子庶民家萬般の公務千般の家事ある何の暇あつてか片時も打坐する事を得んや、此に於て病と稱して公務を通れ、家業を廢して三五七日一室を閉ぢ戸牖を鎖して、幾枚の蒲團を重ね一枝の香を挾んで坐すと云ども、平生の塵務に疲れて、一寸坐すれば一丈睡り、三合の坐禪には千萬斛の妄想を集む、既にして眼を瞠り牙を咬み拳を握り梁骨を豎起して、坐すれば萬般の邪境頭を競つて生ず、茲に於て額を擡め眉を皺めて覺えず悲泣して曰く、官途道業を妨げ仕路禪定を障ふ、如かじ官を辭し、印を解て水邊林下寂寞無人の處に在て、恣に禪觀を修し永劫の苦輪を遁んにはと、大に錯り畢れり、大凡人の臣たるの道は主君の飯を喫して主君の衣を纏ひ主君の帯を結て、主君の刀を帶、水も亦他處より擔ひ來るに非ず、耕さず

して食ひ、織ずして纏ふ、身體手足髮毛爪齒總に是君恩の所成なり、恁麼にして成長し來つて三四十歳に至つて主君の政事を助け、専ら王佐の才を抽んで君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし専ら君恩に報答すべき時到つて、袖裏に密に念珠をつまぐり、口頭幽に佛號を唱へて、出仕に懶く公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなくて、動もすれば病と稱して退んとす、恁麼の志行にして縦ひ三年五歳、陰僻の處に在つて精鍊刻苦し、思想盡き情念止に似たりと云ども、肝膽傷み悴け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落るを聞ても胸間裂るが如し、大將にも諸卒にも何の専途にか立べき、萬一國家の大事あらんにかゝる人々を引て、一虎口の門戸を堅めたらんに、敵軍潮の如に湧き旌旗雲の如に覆ひ、火炮は雷の落かかるが如く響きわたり、貝鐘は山も崩る、許り轟き鳴り、戈戟は氷の如く拔連たるを見聞かば、飲食咽に入らず、混震にふるへて手綱とる事さへ叶はで、鞍つばにすがり平て、動もすれば自ら震ひ落とす、果は歩兵の爲に獲らる、何が故ぞ新

の如くなる、只是三年五歲寂默枯坐の致す所なり、縦ひ熊谷平山などが如き勇士也とも斯の如く修行したらんには豈に震へざらめや、此故に祖師大悲善巧有てこの正念工夫不斷坐禪の正路を指す、諸侯は朝覲國務の上、士人は射御書數の上、農民は耕耘犁鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡績機織の上、若し是正念工夫あらば直に是れ諸聖の大禪定、此の故に經に曰く、「資生産業皆な實相と相違背せず」若正念工夫無んば、老狸の空穴に眠るが如ん、悲むべし此道今人棄て土の如くなる事を、往往に我法二空の黒闇谷を認得て、向上最上の禪なりとして日々眉を皺め額を擡て死蓋の藪中に在が如く、祖庭は遙に雲煙を隔つ、佛經を嫌ふ事は跛鼠の猫兒を避るが如く、祖録を忌む事瞎鬼の虎聲を聞に似たり、殊に知らず此は是二乘帝没の舊窠相似の涅槃なる事を、此故に宗峰大師曰く「三年までわれも狐の穴にすむ今はかさるる人も理り」と悲歎し給ひき、去程に肇公は此れを「困魚箔に止り病鳥栖蘆に栖む」少き安事を知つて、大に安事を知らず」と呵し給ひき、

眞正参玄の上士は入理の淺深如何ん、見道の精麁如何んに在らくのみ、誰か爾が在家出家を擇ばん、誰か爾が朝市山林を論ぜん、古への相國公美、大夫陸互、尙書陳操、都尉李公、楊公大年、張公無盡等の諸君子の如きは、見性わが掌上を見るが如く参立わが肺腑より出るが如し、佛海の深源底を踏翻し禪河の毒波浪を並吞す、智鑑高明、識量寛大、閑神恐れ走り、野鬼悲しむ潜む、各々朝廷の政事を助けて天下を泰山の安きにおく、誰かその堂奥を見ん、張公の如きは官、宰相にのぼり、位人臣の頂を極む、王佐の才豊にして、君信じ臣貴み、士敬し民懐く、天膏雨を下し、君淋字を賜ふ、壽百齡に近うして澤を四海に流へ、民堯年の秋に傲り、人舜日の暄を負ふ、上君恩に報答し、傍ら法寶を鎮護す、寔に天下の人傑なり、此故に言「家に在つて道を成ず張無盡、祿を食み禪を究むる楊大年」と實に千歳の美談ならずや、蘇内翰黄魯直張子成張天樂郭功甫等其餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸君子豈にそれ際限あらんや、見道各々林下の人に超過す、常に

萬機の政務を佐け、肩を萬國の衣冠に交へて、銀魚金龜の朱紫、貴海中に立ち禮樂射御の間だ進退揖讓の席に臨んで、片時も道情を打失する事なく、遂に祖庭の玄微に徹證す、これ皆正念工夫不斷坐禪の靈驗ならずや、佛道微妙の深恩ならずや、祖庭孤危の威徳ならずや、彼の黙照枯坐を足れりとし、心源靜寂を禪なりとして、丘壑に餓死する底の類と寔に霄壤の間なり、これ謂ゆる尖兔を得ざるのみに非ず、鷹子も亦打失する者に非ずや、何が故ぞ徒に見性する事能はざるのみに非ず、主恩も亦廢す、太だ憐むべし、寔に知る得力の淺深は進趣の當否に依る事を、工夫若し一人と萬人と戰ふ底の氣力あらば、豈にそれ林下と室家とを擇ばんや、若それ見道は特り林下の人のみに在といは、民の父母たると人の臣たると、人の子たるとは望を其間に絶んか、縦ひ林下に在とも道業密ならず、志念純ならずんば何ぞ室家に異ならん、縦ひ又室家に在とも志願濃厚に操履堅實ならば、何ぞ林下に異ならんや、此故に言ふ「思ひ入る心の中に道しあらば、よしや芳野の山な

らずとも」と只兎にも角にも諸大將の心がけ給はらんずる坐禪は此正念工夫の不斷坐禪に超えたる事は侍るべからず、此は是二百年來廢れ果たる古實にて侍り、何をか正念工夫と云ぞとならば、咳唾掉臂動靜云爲、吉凶榮辱得失是非、束ねて一則の話頭となして、臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突据る、本尊には即ち大樹君、諸侯大夫は吾同業影向の諸菩薩衆、近習外様の大小の諸臣は吾が舍利弗目連等の二乗の大弟子衆、士庶萬民は吾が赤子の如くなる所化の衆生なりと思して、専ら仁恕の心これあるべし、袴肩衣は直に是、七條九條の大法衣、兩口の打物は禪板机案、馬鞍は一枚の座蒲團、川河大地は一箇の大禪床、上下四維十方法界は自己本有の大禪窟、陰陽造化は二時の粥飯、天堂地獄淨利穢土總に是吾が脾胃肝膽樂府、内外三百疊は朝夕の看教誦經、千百億の須彌山を束ねて以て一片の脊梁骨とし、其餘の進退揖讓射御書數皆な是れ菩薩萬善同歸の妙行なりと觀念し、大勇猛の信心を抽て、彼内觀の眞修に和して起居動靜の間に於て、那時か是打失の

處、那時か是不打失の處と、時々、點檢する是古今の賢聖眞修の正路にて侍り、去程に子思子も道は須臾も離るべからず離るべきは道に非ずと宣ひき、魯論里仁の篇には『造次も必ず是に於てし、顛沛も必ず是に於てす』とは片時も打失する事なかれとの教にて侍り、此道とは中庸の正道を云へり、正道とは、斯經難持若暫持者我即歡喜諸佛亦然と説き給ひたる法華經の事にて侍り、法華經とは即ち正念工夫の大事を云へり、工夫とは自己本有の有様を指す事なりと覺悟これ有るべし、生死の大事を透脱し佛祖の正眼を瞎却する底の眞實見性の正修にて侍れば、中々容易の事にし侍らず、只肝心は動靜二境の間逆順縦横の上に於て、純一無雜打成一片の眞理現前して、千人萬人の中に在ても萬里の曠野に獨立したる心地あつて、彼龐老が謂ゆる『雙耳聾の如く眼盲の如し』なる境界は時々、此あるべし、是を眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り、此時退かず勤め進み給はゞ氷盤を擲するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞ざる底の大

歡喜あらん、若し自家見性の眞偽如何ん、得力の精庵如何を知んと欲せば、先須らく謹んで傳大士の偈を見るべし、何が故ぞ、未透底の士は句に參ぜんより意に參ずべし、已透底の士は意に參ぜんより句に參ずべし、偈に曰く『空手にして鋤頭を把り、歩行して水牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、』又曰く『燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走りて山門を出づ、』又『懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る』又『張公酒を喫して李公醉ふ、端的を知らんと欲せば北斗南に向つて看よ』寒山子の偈に『青山白浪起り、井底紅塵颯る』若人見性分明なる事を得ば此等の言句は、吾掌上を見るが如けん、若然らずんば言事なかれ、見性したりと、縦ひ又如上言句に於て逐一分明に見得徹したりとも、足りとする事なかれ、棄去て者疎山壽塔の因縁、南泉遷化の話、乾峰三種の病、五祖牛窓權の話、宗峰大師曰く『朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何似又本有、圓成國師曰く、柏樹子話に賊の機有り』此等の話頭毫釐も疑ひ無事を得ば、須らく知べし、見處

佛祖と同一模範なる事を、参玄の上士と稱して何の愧る處かあらん、何が故ぞ、参禪は各誓つて佛祖の心を明めん事を要す、若し夫佛祖の心を明らめ得ば、豈に夫佛祖の語話を明らめざらんや、若し夫未だ佛祖の語話を明らめ得ずんば、須らく知るべし未だ曾て佛祖の心を明らめ得ざる事を、此故に七賢女經に曰く、「佛の言はく我が弟子大阿羅漢此の義を解すること能はず、唯大菩薩衆有つて應に此の義を解すべし」と此義とは何ぞや、西天此土祖々相傳し來る底の向上の秘訣なり、此義を了知せしめんが爲に此難透の語話を留む、此故に眞珠菴主偈あり曰く「天台五百の阿羅漢、身法衣を著て人間に出づ、神通妙用備に還可し、佛祖不傳の妙は難々」菴主は即息耕東海七世の孫にして、其知見斯の如く痛快なり、貴ぶべし此時眞風尙未だ落ざりし事を、今時奴郎辨せず、玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬、往々に言ふ自心即ち是佛話頭了して何かせん、心淨ければ淨土淨し、語録を閲して何の用ぞと、此等の類を未得謂得未證謂證無慚昏愚の外道とす、竊か

に彼が心と稱する所以の者を見れば、八識頼耶愚癡無明の闇窟なり、錯々賊を認て子となし、錯を以て錯に傳へて、祖々傳來の妙道なりとして、人の参禪學道、艱辛清苦するを見ては、彼と彼とは圓頓の直指をせず、二乗の根性なり、それとそれとは向上の禪を會せず、聲聞の部類なりと、彼が謂ゆる圓頓の直指點檢し見來れば、楞嚴に呵し給ふ、無明元本なり、彼二乘聲聞の人々には霄壤遙かに劣れり、而して逮得己利の賢聖を捉へて妄りに輕賤す、寔に笑つべし、或は又一般あり、無の字にもせよ、柏樹子にもせよ、一向に手脚の著ざる處を禪道なりと妄想して以て透過とす、此は是一等の惡風俗、膏肓難治の大禪病、錯を以て錯に就く底の不救の傳屍病、總にこれ妄分別眞正參學の上士の如きは則ち然らず、参じ参じて参ずべき無き處に到つて理盡き詞究まつて、技も亦究まり、天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて、而して後に因地一下の安堵は得る事に侍り、左もなくして無明妄想生滅の心行を以て難透難解の秘訣換骨奪命の大事を、彼此沙汰致し侍ら

んは恐ろしき事なり、佛も生滅の心行を以て實相の法を説事なかれと堅く制し給ひたるぞとて、正受老漢は常々眉を皺められ侍りき、然るに雲水往來の僧侶、十が八九大口を開いて傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひは侍らぬなど、會釋もなく云ひ散す底多し、試みに一則を擧揚すれば拳頭を豎るあり、一喝を吐くあり、十が八九は疊を叩く者多し、輕々に撻著すれば見性は存じも依らず、學文の功さへ無くて一文不通頑陋無眼の人々なり、斯く恐ろしき無頼不敵の働きは何れの知識の許より習ひ持ち來るやらん、去程に三五年も斯くわめきあるくよと思へば、天竺へ渡りたるか唐へ行たるか蔦に成たるか筵になりたるか、果は音も臭もなく成り行くは幾等と云ふ數を知らず、蟲齒の藥にも成らざる底の悟りなり、惜むべし棟梁の質あつて神俊の才を具足し、參立力を盡し琢磨功を重ねば、佗後馬祖石頭にし去り、臨濟德山にし去つて、天下の蔭涼樹とも成り去るべき底の人々、苗にして秀んとする肝心の時節、筋なき妄解を習ひ來つて人の參禪學道精神を盡す

を見ては、馳求の心止まずと云うて地空を叩いて大笑す、儂が頑空無記頼耶の暗窟を認め得て歇得する底の糟見解三日五日眉を皺めば驅鳥の童子も亦須らく解すべし、況や他人の處より習ひ持來らんをや、佛祖も手に餘したる者に成て初めは信ずる人も間これあれども、元來無記暗鈍の瞎凡夫、次第に在家實頭の人々にたも及ばず、果は檀那施主にも忌嫌はれ、行方知らず成り行くは近年行脚の風俗なり、如何がして真正の得悟は得る事ぞとならば、塵務繁絮世事紛然七顛八倒の上に於て、譬へば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に、匹馬單鎗大勇猛の精神を震つて一方を突き破つて、かけ拔んず時の心持にて正念工夫絶えずりもなく、精彩を著け手脚の下すべき様もなく、四面空洞として心身ともに消失せたる心地は時にこれ有る者に侍り、此の時恐怖を生ぜず、勵み進み侍れば一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り、總じて參學は妄念情量と戦ひ、昏沈睡魔と戦ひ、動靜違順と戦ひ、是非憎愛と戦ひ、一切の塵境と相戦ひ、正念工夫を推し立もて行張合

にて不慮の省覺はこれ有事に侍り、彼勇施菩薩の如きは大重禁を犯して懺悔すべきに地なし、徒に憂悲惱亂す、忽ち自ら大誓を發して憂惱と戦つて黙坐す、忽然として無生を悟る、雲門大師は老睦州に左脚を遍折せられて大悟し、蒙山の異禪師は痢疾を患る事晝夜百次、身體苦しみ疲て前面只死あるのみ、此に於て誓願を起し苦痛と戦つて死坐す、少焉腸大に鳴動する事數回、痢疾は拭ふが如く、平癒して大に得所あり、大圓實鑑國師の如きは華園に入つて聖澤の庸山老師に謁して所見を演ぶ、山漫罵して打つて追出す、師憤然として煩暑の日、竹林の中に入つて寸糸かけず裸形にして枯坐す、夜に入つて蚊子百萬競ひ來つて身上に集り圍んで師の肌を咬む、此に於て痒癢と戦つて齒を切り拳を握つて癡坐す、正氣を打失せんとする者殆んど數次、圖らず豁然として契悟す、昔し調御世尊は雪山に在つて苦修六年、皮骨連立蘆芽膝を穿つて臂に至り、慧可大師は臂を斷つて自の本源に徹し、玄沙は泣々象骨を下つて蹶躓して左脚を破つて徹骨徹髓し、臨濟は痛

棒を喫して破家散宅す、これ古今の榜樣なり、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なし、今時の如く、徒に空しく胸臆の凡解を恃んで自己脚跟下の大事を了簡分別して以て足れりとせば一生妄想の魔網を破る事能はじ、小智は菩提の妨とは此等の輩に侍り、中古禪門の盛なりし時、正念工夫心掛け給ひし士大夫は、公より退るの閑暇の日は如何にも健かなる士卒七八箇を従へ、大馬に跨つて兩國淺艸などに等しき人立多る所を用有げに馳せ廻り給ひける由、是は動中の工夫親疎如何ん得失如何んを矯めし試ん爲なりける由、去程に蟻川新左衛門は鬪諍喧嘩の席に望みて大省力を得、太田道灌は陣中に在つて組布れながら和歌を詠じ、正受老漢は其里へ狼の數限りもなく來り集つて讒をせし時に所々の墓原に七夜まで坐し明したりと、是は彼等に頸筋耳の根など吹喚れんずる時に正念工夫相續間斷ありや否やを矯し試みん爲なりと申されき、書寫の性空上人は常に悲嘆し給ひけるは世念濃厚なれば道念輕微なり、道念濃厚なれば

ば世念輕微なりと宣ひき、つらく思ふに果しもなく管々しき繰言、披見も六節
 布思すべき者を、世念濃厚に書續けたるに似たれども、鶴林半死の殘喘長庚曉月
 頼みなき命に何の不足の處有りてか尾を揺かして憐みを乞んや、寵遇を權勢の門
 に栽るにし非ず、聲名を世波の底に釣るにし侍らず、是を序に人々の道情をも助け
 よかし、法門無量誓願學と申す事の侍れば菴居の人々の他後法施の一助ともなれ
 かし、且千兵は得易く一將は求め難しと申す事も侍れば、書中少にても取べき處
 あつて幕下の道情をも助け、増て禪學成熟し給は、その餘波必ず左右の人々に及
 ばん、左右若其恩波に浴せば其澤必ず一城の人々に及ばん、一城若その恩波に浴
 せば其澤必一國の人々に及ばん、何が故ぞ、一人の心は千萬人の心なる故に、終
 に天下國家に及ばし、上王化を佐け下庶民を利せん、然らば則ち宇宙の間那箇の
 盛事か是に如んや、これ老僧が平生の微志なり、若然らずんば何の追從にか終夜孤
 燈を挑げ老眼を摩塗して果しもなき問ず語りを繰返し繰返し書送り侍るべきや、

道理ある事に思はば捨置ず熟讀し給ひて内觀養生の秘術に契ひ心身共に壯健にし
 て速に參禪得力因地下下の歡喜をも得給へかし、次に願くは此内觀の加彼力に
 依つて武内の宿禰浦島子が長壽をも保ち給ひ、上天下の政事をも輔けて萬民を憐
 撫し、内法寶を衛護し飽迄法喜禪悅の樂を究めて法成就にも至り給へかしと思
 ふ計りの寸志にて侍り、老夫壯年より思ひ付侍りけるは正念工夫の勝手には武士
 の身の上程よき事は有べからず、武士は明け暮れに身を懦弱に持事叶ず、出仕に
 も附合にも如何にも嚴重なる者なれば髮結立て、上下か又は袴羽織にて大小手袂
 み、折目高なる起居の上には正念工夫は溢れ建る、程潔よく打見ゆ、増てよき駿
 馬の太く逞きに打騎つて百萬騎の敵軍をも人無き處を通る如く乗破り、驅崩
 すべき顔色は天晴見事なる不斷坐禪かく工夫しても行たらんには、出家は一年に
 て得力これあらば武士は一月、出家は百日にて得力是あらば武士は三日にも利運
 は開かるべき者を、志なく案内知り給はぬ故に、生暖磨墨とも云ふべき大馬の

背上に闇々と八石五斗の無明妄想の重荷を建れ々々積載ていかめしげなる貌曲して、あたりを拂つて乗連々々打通り給ふは近頃以て残念なる風情ならずや、かく大切なる場所をば遣過して我々は仕官の身なれば坐禪などする暇隙は勤の内は存じも寄ぬ事なるぞなど宣ふ人々は、海中に在乍ら水を尋ぬる心地こそすれ、四十二章經には人に二十の難あり、豪貴にして學道難しと、誠なる哉、王侯より庶人に至るまで、榮耀富貴の人々は數限りも無事に侍ど、來生の苦輪を恐れ出離の要道を尋ね求むる人々は世界を一掃して一人も見え侍らず、是定めて金口の所説に違はじとの心なるべし、只富貴の上にも富貴を貪はりて足る事を知らず、榮耀の上にも榮耀を求めて飽事もなき世の中に何の善縁ぞや、幕下のみ獨富貴を見る事空華の如く、榮耀を見る事夢幻に等しく、常に無上の大道に賢慮を傾け、予が艸慮を顧み給ふ事既に三次、昔し照烈の武侯が艸慮を顧み給ひしに等し、彼は三國を並さん事を圖り、此は三界を越えん事を求む、その趣は同じといへども、志

は大に異なり、昔し武侯は鋤を棄て、命を委ねて以て三顧に答ふ、老僧豈に三顧を報ずるに片言を惜まんや、如何なる法理を書贈りてか幕下勇猛の精神を増長し、圖すも宗門向上の大事を透過し、怡悦の眉を開き給へかしと祈る許りに、かなはぬ文章にて斯まで書續けたるにて侍り、去ながら宗門向上の大事は中々文字言語の力にても誘引すべき事にし侍らず、然れども修行の趣向錯まり給はずば自然に大事に契當し給はでやあるべき、專使一昨鳥、急に回鞭を執る、貴答を裁するに暇あらず、頻りに廢禮の緩怠を恐る、幸にして昨日宜願廬原に歸る事を告、歡踊に堪ず、押へ留て鄙酬を修す、睡らざる者一夜、晩陰より書して天明に至れば醜書既に五百行を得るといへども、猶情實を盡す事能はず、老來諳記の力無うして前に書しけるを後又書し、始め演けるを終りに亦演ぶ、字々鳥焉多く、行々魯魚の差ひあれども、再看するに暇あらず、裁封して以て額が歸袖に附す、恰かも楚鷄を籠て丹山の鳳なりと稱して王侯に進むる者に似たり、電照の後請ふ丙丁童

に與へて彼をして祕重せしめ給へ、若し又書中取るべき處あらば再び清書して以て進獻せん、幕下書記の人々に命じて繕寫三五冊年少顯發の近習三五輩、及び和田國堅が輩に分ち與へて時々熟讀せしめ、閑暇の日は幕下の股肱、堤中澤の人々及び故老の舊臣良醫六七輩を召され圍み坐して聽受せしめ、幕下も亦蒲團上に且聽且つ睡つて道情を保養し給ひ、半日の餘閑を樂み給は、法喜禪悅の境致自然に現前して、四王忉利の歡樂、夜摩兜率の勝界も亦羨むに足らず、況や世間穢濁充滿の宴會、輕浮傲奢の逸遊、八音耳を蕩かし、萬舞眼を昏す底の無慚無愧の幻戲をや、豈に顧るに足んや、此趣を以て能々勘辨これ有て、近習をも外様をも我八萬の大衆なりと思はして、密々に誘引し給は、いづしか上求菩提下化衆生の本願に契つて、塵中衣冠希有の善知識、誰か知ん劍を帶し鞍馬に跨つて往來しながら、時々諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは、然らば則ち強將下に弱兵なしと申す事の侍れば、龜氏慶喜身子滿慈等の有力の武臣は野村田村等の人々を初め、旗

下には幾人も出來侍るべし、萬一天下の事故あらんに、大將も諸卒も通身一團の眞元氣百騎を牽して萬騎に對すといへども從來生ある事を見ず、豈にそれ死あるべけんや、恰も鐵石を突立て行が如し、靜なる事山嶽の如く疾事颯風の如し、向ふ處破らずと云ふ事なく觸る處碎かずと云ふ事なし、譬へば保元平治の亂軍中に在とも無人の曠野に立が如けん、それこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ、君恩と法恩と並べ流て士卒を撫す、誰か幕下の爲に身命を惜まんや、生死の恐るべき無れば涅槃の求むべきなし、十方を目前に消融し、三世を一念子に貫通す、皆是かの正念工夫の力に依れり、かくの如なる時は士敬し民懷き、君仁に臣正し、農に餘の粟あり婦に餘の布あつて、上下こもく道を好んで、國脈泰山の安きが如く萬世を経て衰滅なけん、然らば則ち人間天上の善果これに如べからず、宰官身得度者、即現宰官身の大士は豈にそれ異人ならんや、穴賢。

延享第五戊辰曆仲夏二十五冀

鍋島攝州侯近侍に答ふるの書

沙羅樹下闍提老衲書

遠方の病僧に贈りし書

便の度毎に貴書並に傳語、者回欽禪人便に又々芳書、殊更野外珍らしき水沉一封親切の至りに候、貴兄事貴境へ飛錫致され候も吾等勸め申し侍れば何とぞ道業怠慢なく因地下の勸喜をも得られよかしと好便り待入候處に、夏頃より氣分悪く今程延壽堂に入れ候旨、旦夕案じ暮し候、者回、欽禪人物語りには左程の事にもこれなく、發足の二三日已前に入堂致され候由如何許り嬉しく存じ候、氣分は如何様の重病沉痾なりともそれは世間に打任て、自分は随分正念工夫肝要と心がけこれあるべく候、病中苦患の間に仕拔たる修行は他後如何様の逆縁に逢ても退情これなき物の由、承り及び侍り大切の時節ぞと思して努々油斷これある間布候、三十年前去る老漢、病中の僧に對して物語せられけるは、

世に智慧ある人の病中ほど淺猿しく物苦き事はなき事なるぞや、智慧ある儘に來方ゆく末の事ども際限もなく思ひ續け、看病の人の好惡を咎め、舊職同伴の間關を恨み、生前には名聞の遂げざるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、郷里を思ては羽翰の生ぜざるを憤り、神明に祈ては感應のおそきを嘆り、目を打塞ぎて臥居たるは殊勝に物靜なれども、胸中は九國の合戦よりも騒しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に八石五斗の物思ひなるべし、かく病狂れ死したらんには後の世の有様こそ推量らるれ、物思ひして藥にも養生にもなるためしならば吾々も打より手傳ひて物思ひ得させんなれども、痛く物思へば心火逆らひ上り肺金痛み費へ、水分枯渴し寒熱止事なく、自盜の二汗は次第に繁くて果は命根も亦保ち難きに至る、是皆平生の志行懶惰にして少し許りの病を妄想心の手傳ひて夥しくそだて上たるものなり。然れば病に害せられたるにはあらず、妄念に食殺されたるなるべし、寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり、虎狼は戸牆さしたる内へ

は入事は叶はぬものなり、妄念の狼は坐禪靜慮の床の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入奴なり、或病人はほろくと打泣て、吾等程薄福なる者はなきぞとよ、偶々に受難き人身を受け、貴き僧形を得ながら辨道の功をも積ず、佛道の光をも見ずして朽果んずる事の口惜さよなど泣口説たるは殊勝に愛らしけれども、是も懈怠油斷の大不覺者のなれの果なるべし、大凡辨道工夫の爲には病中程よき事はこれあるべからず、古來賢達の人々の巖谷に身をよせ、深山に形を隠し給ふ事は世縁を遠ざけ塵務を捨離して道業純一にはげみ勤んが爲なり、然るに病中を除いて別の山谷なく、病中を去て外の深山はあるべからず、病中の人は托鉢作務の勞倦を遁れ、使僧知客の應對を省き廣衆雜話の喧憤もなく、僧堂の治亂を知らず、常住の豊儉を見ず、死活は天運に投かけ、饑寒は看病の人に打任せて、只狗猫など憍伏たる體にて何の合點もなく、何の了簡もなく、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻死も亦夢幻、天堂地獄

穢土淨刹 悉く抛擲下して一念未與已前萬機不到の處に向つて是何の道理ぞと時に點檢して正念工夫の相續を肝心とせば、いつしか生死の境を打越悟迷の際を超出して金剛不壞の正體を成就せん事これ眞箇不老不死の神仙ならずや、人界に出生したる思ひ出ならずや、圓顛方袍の威徳ならずや、佛道微妙の靈驗ならずや、眞正參禪の人の前には吉凶榮辱逆縁順縁 盡く道業を助る糧となり、懈怠惰弱の人の前には假初の塵事芥子許りの病氣も 夥しき障りに仕なして果は宿業のわざなり般若に縁こそなければなど、種々の道理をつけて遠からぬ般若を遠ざけ根もなき業障を種ぞだて、一生を錯る程の苦々しく情なき事はなきぞとよ、古來より重病を受ながら疑團打破の人々は問多き事なるぞかし、中比去老和尚の重き腫物を受給ひて背後は爛冬瓜の如く腫塞がりて目もあてられぬ病惱なりけるに湯藥食事進め參らするより外は人をも近づけ給はて目を打塞ぎて惱み伏し給ひけるに、ある時法眷の人々兩三輩見來りて見問上りける處へ外療人來りて土肉とらんとて

膏藥に藥加へ參らせたれば今夜は常よりも痛ませ給ふ事も侍りぬらん、かゝる貴き御身に心なき腫物の出來りて日數多く惱ませたる御いとしさよ、去にても今日よりは愈肉の上りて目出度快氣ましまさん待奉る許りなるぞやとて撫勞り申ければ上人は濃く寝入たる人の、目打覺たる御顔ばせにて人々はよくこそ見え來り給ふもの哉、包みはつべき事ならねば物語して聞せ申すべきぞ、誰々も近寄給ひてよ、扱も此度の病惱は愚老が爲には貴き善知識なるぞや、腫物の蔭にて二十年の非をしり、四十年の素懷を遂たる事の嬉しさよ、重病受ざりし已前は悟に事缺たる事も無、修行に不足もなき境界なりと思ひて修行も打捨臆面もなく供養など受く會釋もなく起居振舞けるが思はずもかゝる重病に沈みて五體も煎あぐるが如く骨節も碎け離る、許りなれば氣遠く心塞りて黒繩衆合焦熱叫喚の苦患を纒に形體に集め上せたる心持にて悟も見解も何地へや行ぬらん、半點の力をも得ずして殘るものとは想念と苦痛とのみなりければ、あな口惜、かく惱み苦み死したれば

とて誰恨むべき事にしも非ず、逆も助かるまじき命なるに是より正念工夫に取掛りて苦惱や勝べき工夫や勝べき心の長の及ばん程は責戦はんずものをと思ひ定めて、傑烈の大志を憤起し勇猛にはげみ進めるに一度も二度も苦しく絶入る心地しけるが打返し取直して間斷もなく進みける程にいつしか戦ひ勝て晝夜のさかひもなく寐寤の隔もなく終には打成一片の工夫現前して此十四五日以來は想念も苦惱の雲霧などはれ失たる心持にて大安樂なるのみに非ず、眞正生死不二佛魔同體の眞理に契當し唯一乘金剛不壞の奧義に徹底したるぞかし、今日より後は如何様の逆縁重障なりとも菩提を妨ぐる事はあらじと覺ゆるぞ、人々も少し許りの會處得力あらんを頼み給ひて、茲はの時に至つて愚老などが如く興さまし給ひて、返々も健ならん時正念工夫怠り給ふべからず、賢くも煩ひける事よ、簡程目出度事や有べき、思へば、此度の腫物は愚老が爲には上もなき善知識ならずや、然らば則ち如何なる供養をもし如何なる讚嘆をも述度思ふに次第に愈行事の名殘

惜さよと打笑給ひけるを其時随侍申しける僧の物語しけるを聞たるぞかし、又或
 眞言家の驗者なりと聞え給ふ法師の御房の重き傷寒に惱給ひて夜晝の分ちもおは
 さで、うなりどめき給ひけるを弟子の小法師の小黯氣なるが打聴てあの御房の日
 頃の氣情にも似給はず、吾等を呵責し給へる時の言葉にも似給はて、あのうなり、
 叫び給ふ事よとて打笑ひければ上人も打笑て、やをれ小法師よ三日已前のうめき
 は叫喚泥犁の苦痛、三日已後のうめきは最大微妙の法音なるぞ、慢り笑ひて誹謗
 正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ小法師かへして左許り早く手の裏翻す如
 く成佛はし仕給へるにやと申しければ、さればとよ佛も懈怠の衆生の爲には涅
 槃三祇にわたり勇猛の衆生の爲には成佛一念に在と説給へるぞや、去し頃病苦の
 堪難くて次第に性體もなく惱み行まゝに來生の業苦を恐れ、生前の行相を悔て泣
 明しけるが思ひ直して大日不二の觀念に入り目を閉齒を切りて間もなく勤め進
 みたれば貴やな、いつしか病惱は搔拭ひたる如く打消え病臥たる形骸は瑜伽微妙

の寶印と現じ圖らずも金剛不壞の正體を成就し此うなりどめく聲は三密不思議の
 大陀羅尼と冥合し寢たる床は毘盧本有の大道場と打ち成り四重圓壇の大曼荼羅は
 心上に嚴然として目前に燦爛たり、嬉しや忽ち有情非情同時成道、草木國土悉皆
 成佛の素懷を遂たるぞや、小法師原が聞知べき事にしあらねどかく有難き慧日に
 逢たる目出度さに物語りはするぞかしとて、嬉し泣に打泣々々語られけるが後に
 は道業比類もなくおはしける由、其外異國にも株宏の湯厄蒙山の痢疾何れも病に
 依て道心進み給ひける人々は間多きぞかし、和僧達は左許りの小病にけきたなく
 云甲斐もなき有様かな、などかは昔の人々にも劣るべきや、只今死なんずとも正
 念工夫目出度て死に給んには眞の佛祖の兒孫たるべきぞ、かくいへばとて重病受
 んを待つて參禪工夫せよとはあらず、けなげに健かならんずる人々も日夜に怠
 らず、彼人々の如く用心したらんには十人は十人、百人は百人ながら學道成就せ
 ざる事はあるまじきぞ、兎にも角にも正念の工夫程貴ぶべく重んずべき事はなき

事なるぞとよ、正念の端的未だ悟入なからん人々は眞正の導師に見えて第一に決定し給ふべし、決定あらん後は四威儀の間正念工夫打失せざるを第一とすべし、大慧禪師曰く「那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處、一切處に於て是の如く點檢せよ」と、これは是從上の諸聖正念工夫親切の様子なり、これ則ち萬古不易の正修なり、是を直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人とも云ふなり、此の眞人は空劫以前空劫以後、少しも病氣なく鼻もしみたる事はなき人なるぞ、是を法華には久遠實成の古佛と稱歎し給へり、南嶽の隨意願行に昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音と釋し給へるも此の眞人の事なるぞかし、此の人を供養し此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば何れの病か治せざらん、何れの道か治せざらんや、佛法中には病疲れたる老女、瘦悴けたる老夫なりとも正念工夫間斷無んば無病堅固の有力の人とす、縦ひ七尺八尺の身財あつて身子の智圓かに滿慈の辨鏡にして三經五論を講じ得、五家七宗の奧義を究め盡

して力周鼎をあげ、眼寰宇を空じたりとも正念工夫なからん人をは臭爛膨壞の死人とする事なり、あひかまへて容易に心得べからず、寔に保ち難く寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや、末代の悲しさは人毎に名聞の心強く利養の心盛にして道心ありげに見せかけ莊り立れども、正念工夫決定の人は得難き事なり、増て正念工夫相續不斷の人を求るに千人萬人が中に一人もなき事なるぞ、老僧十三歳にして此事ある事を信じ、十六歳にして娘生の面目を打破し十九歳にして出家三十五歳にして此山に遁居す、今年六十五に垂とす、中間四十年萬事を放下し世縁を杜絶し、專一に相守て漸く五六年來、眞箇正念工夫の相續は得たりと覺えるぞ、檀那施主に輕薄追従し利養名聞を希望貪求しながら參禪工夫せんとは寔に片腹痛き事なり、往々に師學ともに常住の潤澤を榮耀とし多衆開熱を宗風とし、辯才利口を智慧と思ひ衣食の結構を佛道に充つ、尊大美麗を道徳とし人の信仰を法成就の時なりとす、悲みても尙悲むべきは得難き人身を名聞の奴婢に責使ひ、上

もなき佛心をば安縁の塵埃に吹埋ませて此の招請、彼この供養には似合ぬ綾羅絹帛を惜げもなく著飾り、得もせぬ禪道佛法を會釋もなく説散し、無智の白衣に對しては孔明子房が辯口を逞うし、苦汗の財施を掠め取には目連鷲子の神通を得たり、暫時の名利を偷み求めて因果を信ぜず報應を恐れず、臘月三十日狐燈獨照半生半死の際に到つて泣うめき、七顛倒八狂亂、手脚の置處なく、あがき死にして弟子門徒の面ぶせになり給はんは違ひはあるまじきぞ、今の人々の心ばへにて禪道修行の人といは、何國の誰か佛祖ならざる者有べきぞ、不思議の因縁にてかかる物すごき處に來りて一夏をも明し給ふ者を何しに惡き事教へ申すべきや、世間は知ず老僧が破屋の内には甘く心易き佛法はなき事なるぞ、只兎にも角にも修行者は吾身を高ぶり吾身を重んじ吾身を最負する程惡き事はなき事なるぞや、一年狼の多く來りて此麓の里へ冤をなせし時に愚老は七夜まで處々の墓原に坐し明したるぞ、是は彼等に取圍まれ耳の根咽ええなど吹喚んずる時に正念工夫間斷

ありや否をためし試みん爲なり、蛇にもせよ水神にもせよ男子たる者の思ひ立ち取かゝりたる事を遂ずや置べき仕果ずやあるべきと思ひ定めて如何なる飢寒をも忍び堪へ如何なる風雨をも堪凌ぎ、火の底に入り氷の底に浸りても佛祖の開き給ひたる眼を開き佛祖の到り給へる田地に到りて宗門の大事を參歇し最後の奥義を徹了して十方參玄の衲子を惱害し、釘を抜き楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと、壓劫不退の大誓願を憤發し給は、病ひ何れの處にか湊泊せん、古徳の修行に一人として疎かなるはなき事なれど中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歴給へるは取別貴く覺ゆる事なり、油斷し給ひたらば果して相似の修行者になり給ふべきぞ、但しその相似とは似せ者と云ふ事なり、誰やの人か不足なき身に似せ者と成んと思ふ人はなき事なれども好法友の手引を受給はず道心深からずして少し許りの會所などを頼みて口を利、人にも貴ばれ給は、見事なる似せ者なるべきぞ、操履を慎み正念を守りて事足り給はずは如何なる野の末山の奥にても飢

死寒え果給ふべし、黄金は菰に包みても黄金なれば實の佛祖の兒孫神明掌を合せて尊信し龍天頭を低て擁護すべきぞかし、諂ひ屈て財産を積み重ねて千僧の葬儀七寶の莊嚴あつて幡蓋目を奪ひ道場心を驚かしたりとも閻王怒眼を張、牛頭鐵鞭を撚つて相待んは苦々しかるべきぞなど、戌の上刻より丑みつ頃まで物語りせられけるを傍に侍りける兩三輩只片時許りの心持にて感涙肝に銘し慚汗肌を侵し侍りき、其後病中などに此物語りを思ひ出し侍れば忽ち慚愧の心起りて病氣も軽く成行様覺え候故、あたまし書付け遣す事、延壽堂中の人々病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り、去乍ら如上是正受老漢平生受用底の施薬にして甚だ一味單方攻撃の冷劑なり、茲に又一方あり、尤も虚弱の人に宜し、心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり、上昇を引下げ腰脚を温め腸胃を調和し眼を明かにし眞智を増長し一切の邪智を除く事大に効あり、軟酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五釐、放下着一斤、

右七味忍辱の汁に浸す事一夜、陰乾して抹す、例の通り般若波羅蜜を以て調鍊し丸じて鴨卵の大きさの如くならしめて頂上に安着す、初心の行者は藥種如何、斤量如何を觀ぜべからず、只色香微妙の軟酥鴨卵の大きさの如くなる者我頂上に頓在すと觀ず、病者此薬を用ひんと要する時、厚く坐物を敷、脊梁骨を堅起し目を收めて端坐し徐々として身心を洵定めて須らく思惟すべし、大凡生を保つの要、氣を養ふにしかず、氣盡る時は身死す、民衰ふる時は國亡るが如しと、此語を三復し了つて正に此觀を成べし、彼頂上に安着する軟酥鴨卵の如くなる者、其氣味微妙にして遍く頭顱の間を潤し浸々として潤下し來つて兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁骨、次第に沾注し將去る、此時胸中の五積六聚痼癖、塊痛、心にしたがつて降下する事水の下におもむくが如し、歷々として聲あり、遍身を流へ潤して下つて雙脚を温む、足心に至つて即ち止む、行者再び此想念をなすべし、彼浸々として潤下する所の餘流積り湛へ暖蒸して恰も世の良醫の種々妙香の藥

物を聚め是を煎湯にして浴盤の中に盛湛へて我臍輪以下を漬浸が如しと、此觀を作時、唯心所現の故に鼻根希有の香氣を聞、身根妙好の輕觸を受、身心共に調適なり、忽ち積聚を消融し、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を増す、若し時々に此觀を成熟せば何れの病か治せざらん、何れの仙か成ぜざらん、此は是養性の秘訣にして長生久視の妙術なり、此方始め金仙氏に起つて中頃天台の智者大師に到つて大に勞疲の重痾を治し、且其兄陳秦が必死を救ふ、澆末難遭の靈方なり、宜哉此道今人知得する底希なる事を、老僧中頃道士白幽に聞、效驗の遲速は行人の勤と怠とに在る而已、怠らざれば長壽を得、道ことなかれ、鶴林老去つて大に老婆禪を説くと、恐くは知音の一見して手を拍して大笑するあらん、何が故ぞ、「亂に臨まざれば貞臣の操を見ず、財に臨まざれば義士の志を知らず。」

法華宗の老尼の間に答ふる書

老夫當秋より法華講演の刻み、心の外に法華經なく、法華經の外に心無と申し談じたりしを聞及ばれ、怪き事に思ひて書通を以てなりとも、右の道理を申し越し其外にも有難き事どもこれあらば書付遣し候様にとの御事これによつて大略の趣書付進じ候間何遍も繰かへし、披覽致され能々得心これあるべく候、成程我等常々申し談じ候通り心の外に法華經なく法華經の外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし、是即ち決定至極の法理にて愚老に限らず、三世の如來も十方の賢聖も極處に到つては皆々かくの如く説給ふ事にて法華本文の大意は大段此等の趣を宣給ひたる事にて此外にも八萬四千の法門を設け給ひたれども皆權教の説にして方便の間を出でず、至極に到ては一切衆生と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と説給ひたる是即ち佛道の大綱なり、大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門有て無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其中の至極の旨は法華一部八卷の中に促り法華一部六

萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に促り妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り妙法の二字は心の一字に歸す、心の一字は却て何れの處にか歸すとならば『兔角龜毛別山を過ぐ畢竟如何、限り無き春を傷しむる意を知らんと欲せば盡く針を停めて語らざる時に在り。』さる程に妙法の一心は展ぶる則んば十方法界を包容し、收る則んば無念無心の自性に歸す、此故に心外無法とも説給ひ、三界唯心とも諸法實相とも説き給ひぬ、其極處に到つては法華經と云ひ無量壽佛と云ひ禪門には本來の面目と云ひ眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ、皆是一心の異名なりと覺悟致さるべし、然るに妙法蓮華經の五字一心の源を指とは如何なる證據かあるとならば、取も直さず直に此妙法蓮華經の五字よきたしかなる證據にて侍り、如何となれば、妙法蓮華經とは一心不思議の徳を讚歎したる題號にて一心本具の性徳を指顯したる言葉なり、仔細は大凡手蹟にもせよ、畫圖にもせよ、誰々は琴の妙を得たり、誰々は琵琶の妙を得たり

と云れんずる人も其妙とは如何なる場所を申す事に侍るぞと問れたらん時に如何なる辯才利口の人にて中々言葉に演る事は叶はざる事なり、去程に父子不傳の妙とて吾大切なる一子にさへ教ふる事は能はず、妙處に到つては吾とても覺らず知らずの處より働き出る事なり、人々具足の妙法の心性も左の如し、只今此文を披覽し或は笑ひ或は談じ、絡環の絲線出す如く果しもなく五人に逢ても十人に逢ても少しも間違もなく働きもて行事不思議なる有様ならずや、然るに何物か斯の如く自由には働く事ぞと内に向ひて尋ね求るに、聲もなく臭もなし、然ば一向に頑空無記なる物にして木石の如くなりやと思へば例の通り、千變萬化自由自在にして有と云はんとすれば有に非ず無と云んとすれば無に非ず、言語道斷脱洒自在なる處を假に且く妙法とは名付給ひたる事なり、蓮華とは蓮の泥土の底に有つても少しも泥土に汚されず、妙なる色香を具足して失はず、時を得て麗しく咲出るは此妙法の佛心の衆生に在つても穢れず減らず佛に在つても淨からず増さず、佛も凡夫に

て在し時は一切衆生に少しも違はせ給はで五欲の泥土に汚され給ふは左ながら蓮の泥中に在るが如し、其後雪山に於て、本具の心性を發明し給ひて稀有なる哉、一切衆生如來の智慧徳相を具すと高聲に唱へ給ひて頓漸半滿の諸經を説き宣三界の大導師と成給ひて梵天帝釋に尊信せられ給へば蓮の泥中を出で麗しく發けたるが如し、蓮の泥中に屹度具足して居たりし色香を水上に咲出すが如く佛も無量恒沙の法を宣給へども、外より持來り給ふに非ず、凡夫にておはせし時屹度具足し給ひし佛性の有様を其儘に宣給ふ者なり、衆生にておはせし時成佛の本懷を遂給ひて後も一心の妙法は少しも添減なきが如く、蓮の泥中にありし時も咲亂れたる夏も少しも變遷なきに等し、故に假用ひて且く一心の妙法に譬へ給ひたる者なり是即ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名づけ給ひたる體なる證據ならずや、さて又經とは常と云へる字義にて常住佛性の義を顯し給ふ者なり、常住佛性とは此心性は佛に在つても増もせず、衆生に在つても減じもせず、天地と同根萬物と一體に

して曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指て、經とは説給ひたるなり、然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讚歎し給ひたるにて畢竟一心の異名なり、一實二名併を歌贊と云つた程の事なり、然れば眞實の法華經は手にも把れず、目にも見えざる者なるを如何にやは受持すべきぞ、如何様に心得たるを法華經の行者とは云べきぞとならば、蓋し三種の根機ありて下根の行者は黄卷赤軸を把へて讀誦書寫解説し、中根の行者は自心を觀照して此經を受持し、上根の行者は眼に此經を見徹し自心の面を見が如し、是故に涅槃經に曰く「如來は目に事性を見たまふ」とは是なり、法華經の行持は大乗至極の眞修なれば中々容易の沙汰にし非ず、易き事は甚だ易く、難き事は甚だ難し、去程に本文にも此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然と説給ひて至極大切の行持なり、天台の智者の曰く、「手に卷を執らず、常に是の經を讀み、口に言音無けれども遍ねく衆典を誦し、佛、説法せずして恆に法音を聞く、心に思惟せずして普く法界を照す。」

とは真正誦經の様子なり、試みに問ふ、卷を執ずして誦する底是那箇の經ぞ、自心、妙法に非ずや、思惟せずして遍く法界を照すと是何物ぞ、真正の蓮華に非ずや、是を無字經と云ふ徒に黃卷赤軸のみを把へて法華經なりと偏執するたぐひは彼藥帖上の記を舐つて藥なりとして病を治せんと計る者の如し、大に錯り了れり、若人此經を持んと欲せば十二時中胸中一點の缺曇りもなく、不思議不思議の當體を正念工夫の眞修と云ふ、去程に捨得子の偈にも「無爲の理を識らんと欲せば、心中、絲をも掛けざれ」と、かくの如きの正修は三世の如來も一切の智者高僧も、此處より大悟得道し給へる事にて萬古不易の大綱なり、一念不生前後際斷頓悟成佛の直路なれば如來の此經難持と宣給へるも理り至極ならずや、大凡三教の聖人も實處に到つては大段同じ、其進修の淺深精麁に依つて得力の高下はあるべけれども最初の一步は趣等し、儒門には此處を至善といひ、未發の中と云ひ道家には虛無自然といひ、神家者は高間ヶ原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事と

す、眞言にては阿字不生の觀法と云ふ、家々の祖師達の座禪をす、誦經を勧め給ふも誦々唱々て一心不亂純一無雜の田地に到らしめん方便ならずや、永平の開祖も行持あらん一日は貴ぶべきの一日なり、行持なからん百年は恨むべきの百年なりと宣ひき、寔にたま〜受難き人身をうけながら、何の行持の心もなく逢難き一生をやみ〜と犬猫などの何の覺悟もなく朽果つる如く苦しかりし三塗の舊里へ懲もなく立歸らんずる事口惜く淺猿き境界なりと涙を落すべき事なり、然るに難き事は甚だ難しとは我得て疑ふ事なし、易き事は甚だ易しとは如何なる故ぞとならば若人此經を手を放て行住坐臥にやす〜と持んとならば、誓つて一回法華眞の面目を見届くべしと願ひ給ふべし、法華眞の面目を一旦見たらん上は咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情、悉く皆妙法蓮華經と現成する故に十二時中此經と冥合す、何ぞ別に持つ事を用ひんや、眞の法華を一旦見せずして法華經を持たんと擬するは、譬ばこゝに一人あらんに手に一椀の水を擎て、こぼさじ

動さじと晝夜に慎み守りて養ひ増さんと願ふが如し、縦ひ一生警げ守つて十成なるも養ひ増す事は存じもよらず、自家の飢渴も亦救ふ事能はず、彼二利の願行に於ては望を其間に絶ものなり、何の用を作にか堪んや、若又眞の法華を一見して此經を持つ人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し忽ち三萬六千頃の煙波と混合し、德澤を大湖と共にして飛ぶ者走る者翔る者蠢く者、同く共に行て呑まんに盡る事なし、眞の法華を見ざる人は一椀の水を撃る人の如し、他を利する事能はざるのみに非ず自己も亦利する事能はじ、眞の法華を一見する人は彼一椀の水を江湖に投ずるが如し、覺えず諸佛の大寂滅海に投入して諸佛の眞法身戒定智慧と冥合して忽ち頼耶の暗窟を擊碎し、大圓鏡光を放出して塵沙劫を経て大法施を行ぜんに終に乏しき事なし、一見法華の功德の廣大なる事上下四維等匹なし、人あり一切諸經論を熟讀せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、無量の寶塔を修造せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、百千の佛を造立せんよりは須らく眞の法華を一

見すべし、三界の祕密を學得せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、彼黄卷赤軸のみを捉へて法華經なりと偏執せんよりは須らく眞の法華を一見すべし、口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは須らく眼に一回眞の法華を見るべし、是實に成實不壞の高談なり、如何して法華眞の面目を徹見すべきぞとならば、先須らく大疑團を起すべし、何物を指てか法華眞の面目とはするぞ、自己本有の妙法の一心なりと聞かからに自心を見るにしかず、自心とは如何なるものぞ白き物とやせん、赤き物とやせん、是非く一回見得すべきぞと猛く甲斐なくしき志を震つて大誓願を起して晝夜に究め見るべし、自心を參究するに行持は様々多き中に法華經の行者ならば法華三昧の行持に越たる事や侍るべき、法華三昧の行持とは今日より思ひ立て憂につけ、つらきにつけ、悲きにつけ、嬉きにつけ、寝ても覺ても、起ても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經くと間もなく唱へらるべし、此首題を杖にも力にもして是非とも法華眞の面目を見届くべしと深く望をかけて

唱へらるべし、願くは出る息、入る息を題目にしてほしき事よと随分親切に斷間もなく唱へらるべし、唱へて怠らずんば久しからずして心性たしかに大石などを淘居たる如くにて安住不動如須彌山の心地はほのかに覺えあるべし、其時にすて置ず、随分唱へらるべしいつしか聞及し正念工夫の大事に契當して平生の心意識情都て行はれず、金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく忽然として大死底の人と異なる事なけん、纔かに蘇息し來らば覺えず、純一無雜打成一片の眞理現前して立處に法華眞の面目に撞著して忽ち身心を打失し本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして推ども去じ、此時に當つて天台の法性寂然、寂而常照の寶所に投入し、眞言の阿字不生の恵日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の即心往生極樂報土の素懷を遂、水鳥樹林念佛念法念佛の妙莊嚴をまのあたり見届け娑婆即寂光の正眼を開き草木國土悉皆成佛の田地に至らん事、毫釐も相違あるべからず、然らば則ち人中天上の善果何事か

これにしかんや、是即ち三世の諸佛出世の本懷なり、一遍の題目は禪門一則の話頭と其功異なる事なし、此等の趣き三世十方の賢聖扶桑八萬餘座の神慮もおはする者を老僧が毫髪ばかりもあやぶむ處あらば何しに罪作りにくだしき事を書贈り侍るべきや、少しも疑ひ給ふべからず、此上猶又息り給はずば禪門にはゆる左手を握て中指を咬等の心地も次第に明かなるべし、今時往々に道、參禪無益なり話頭了じて什麼かせん、即心即佛の直指なれば念の起るをも愁ず、念の止たるをも喜ばず、山賤の白木の合子、只生れ付たる自性の儘なるがよきぞ、漆つけねば剝色こそ無れとて日々徒に盲龜の空谷に入るが如くし去つて以て足りとす、此は是天然の自然外道の所見なり、恁麼にして佛心向上の宗旨なりと稱せば七村裏の土地も亦掌を撫して大笑すべきぞかし、何が故ぞ、これ總に長沙の謂ゆる識神を認得する底の癡人ならずや、楞嚴に賊を認て子となす、終に元淨明の體を知る事能はずと呵せられしは此等の部類なり、殊にしらず如來は四果の聖者の諸

漏已盡し、我法の眞理に達し神通具足し名稱普く聞え給ふをさへ禪を知りとは許可し給はず、故に經に曰く『我が弟子大阿羅漢この義を解する能はず、唯大菩薩衆のみ有つて應に此の義を解すべし、』とも説給へるものを見性の功さへなくて、妄に自ら尊と稱す、是何の心ぞや、人は只兎もあれ萬縁を抛擲して唱ふるに越たる事はなき事なり、去ながら題目ばかりの利益なりと偏執し給ふべからず、眞言に限らず、淨土に限らず、何れも優劣あるべからず、淨家の人々は專唱稱名の功に依つて是非々々一回唯心の淨土己身の彌陀の妙相を見届けてや置べきと決烈の大志を憤起し頭念を救ふが如く間もなく唱へ進みたらんに佛も去此不遠と説給ひたる者を、などや七重の寶樹八功德池の有様を見届けずやあるべき、眞言の人は陀羅尼微妙の威力に依つて是非とも阿字不生の大日輪を拜し奉るべしと、禪門に於て一則の話を擧揚するが如き精進勇猛の憤志を震つて繰たらんに高野大師も不轉肉身と唱へ給ひたる者を、などかは彼金剛不壞の正體を磨出さずや

有べき、何れも死後を待つて利益に預んと打延し給ふは不覺油斷の至り覺束なきものぞかし、遠き事とな歎給ひそ、八重の湖路を隔てたる唐土天竺の事を見給へ聞給へと云にこそ、遠き事とは歎くべけれ、自心を以て自心を見る吾睡を以て吾睡を見るより近き事には侍らずや、深き事とな恐れ給ひそ、九淵の潭の底、千尋の海の中なる物を見給へ聞給へと云にこそ深き事とは恐るべきなれ、吾心を以て吾心を見る、吾鼻を以て吾鼻を嗅より近き事には侍らずや、世は末世なれども法は更々末世ならず、末世なりとて打捨願み給はずば寶の山に入りながら自ら飢凍を苦しむが如し、末世には去事は及ばぬ事とな恐れ給ひそ、遠は惠心院の僧都、近は赤澤の即往、山城の圓愚、何れも稱名の力に依つて右の素懷を遂給ひたるぞかし、法然上人も此望は深くおはしけれども先達なき故に翼短うして長空に翔らざる心地なりと宣ひき、末法澆季の驗にや、近代惡き風俗起りて出家も在家も見習ひ聞習ひになりて今時妙法の佛心などを見んと計るは鰻が木にのぼらんと

する心地なるぞとて闇々と一生を過行事淺ましき心ばへならずや、是は左ながら過分の田地を譲れたりし百姓の子共數多在べきに其内一人軟弱不肖にて然も口利て小點しげなるが曰く、今時吾々風情の柔者共が先祖昔の人々の真似美して農業耕作などして大勢の妻子眷屬など養育せんと計は及びもなき事なり、それは左ながら家鵝が鷹の真似して鶴と組で落さんと羽づくろひするが如く、跛龜が鯉魚の真似して瀧上りせんとて頭さし伸るに似たる事ぞ、片腹こそ痛けれ、左しもて行たらんには必ず鎌にて水をなん呑べきぞ、存じもよらぬ事なるぞとよ、つもりても見よや和殿原や我等如きの疲孩子者どもが、芝野を見が如なる草生茂りたる田地を草刈切立、耕し水載、鉏上種子かし早苗し、植つけ耘り、刈干こきあげ、糠すり繩なひ、菰あみあげ高あぐらして詠め見んずる事、あだや通途にて送らるべき事かは、それは昔物語なるぞ、あらぬ様なる端立なるぞや、夫よりは安々と拔入祖して世渉るすべはある事ぞや、かなたこなたあるきても五日三日宛の日は送

らるゝぞかし、肩有つて著すと云ふ事なく、口有つて食すと云ふ事なしと聞ものを、殊更何某の國、何某の侯は仁徳厚おはして我々如き者をば扶持し給ふと聞なるに、果はそこへなり行べきぞ、斯許よき事のあるにに欺く事の有べき、手足をなん動して自力にて口過さんとかゝるは又なき僻事なるぞ、心慮ひなしそ、初より下手に組むがよきぞ、働だてなしそ、かせぎ振見するな、一二枚ある古著も脱すて菰をなん被りて我々は告る方もなく居ど立どに迷ひたる貧窮下賤の者に侍り、哀れ助け給ひてよと打泣々往たらんに慈悲深き世の中なるものを、など口一つばかりすぎ兼る事のあるべき、少しも疑ふ心なうて、兎せよ角せよと教られて悦び勇て誰々も兼てより斯なん思つる事よとて生れもつかぬ貧者に成て一生を送るに似たり、此等の輩を自暴自棄の人と云ふ、臨濟大師は甘つて下劣人と作ると呵責せられたり、是は左ながら魚の水中にありながら我等風情にて水など見んと計は及びもなき事なりと歎き、鳥の長空を翔りながら、今時長空などを見ん

と計るは存じもよらぬ望みなりと悲むに似たり、殊にしらず十方法界の中真如ならざる國土なく妙法ならざる衆生なき事を、惜むべし、唯心の妙法寂光淨土のまつたゝ中に住ながら生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無間なりと泣悲む事皆是目前に充溢たる妙法の佛心、前後に澄湛たる法性をば及もなき事なり、存じもよらぬ望みなりとて打棄筋なき妄想情識の料簡を頼みて空く暮せるより起る事なり、惜みても惜むべきは、三界無比の妙法醍醐上味の經典なれども、教の如く修行する人なき故に文車に稠載たる世の並々の書籍と共にあり甲斐もなくやみくも朽果穢土淨刹と見違ひ三塗六趣と思ひ成事歎の中の歎ならずや、問ふ、教の如くとは如何なる教をか指や、四安樂の法門か、五種の法師の行持か、曰く然らず方便品に謂ゆる開佛知見道故出現於世の本文、經中の眼目なり、番々出世の如來無量恆沙の法を説給へども何れも一切衆生の佛知見を開かしめん爲なり、然らば佛知見の望なくて如何なる法を行じたりと

も諸佛の本懐に契事は努々これ有べからず、開佛知見とは一心の妙法を發明する事なり、悲みても悲むべきは今末世澆季の世の中なれば、一心の妙法の沙汰はすたれ果て、思ひくの有様なり、たまくと有るに似たるも此頃は皆々教へ事になりて云甲斐もなき風情なり、大日經にも如實に自心を知るべしと説給ひたるものを願る人さへなけれ、法華經の教に隨はず、妙法は何地に有もしらでうろくとして西ぞ東ぞとて混ざわざに騒廻りて、佛道なりとて月日を送るは、譬へば此に大福長者あらんに、初め多少の艱難を経て限もなき田地を切開きて爾等も此田地を耕して我如く大福長者になれとて大勢の子供に優劣もなく、過分の田地を譲與へたりしに、父の教に隨はずして何れも他國に流浪し、人の門戸に傍乞食するもあり、我は鏡とぎなりとて瓦を把て磨行もあり、粟稗の鳥を追てすくみ居るもあり、長者の子なりとて自身は乞食非人の體にて亂りに人を輕しむるもあり、田畑の帳面ばかり毎日繰かへして田畑の有處も知らぬもあり、帳面さへあれば恐る

る事はなきぞとて、恣に悪行を行ずるもあり、我は長者の作法を知りたりとて飢渴て作法ばかり行ずるもあり、田畑の有處もしらて晝夜に田畑々々と叫もあり、田地の廣大なるを少し許り見付て大橋慢して煙酒食肉心に任せて亂行なるもあり、長者の心に契たる子は一人もなきが如し、田地とは一心の妙法を指なり、帳面とは諸經論を云ふなり、人の門戸に傍て乞食するとは、かの開佛知見の大事は自身艱難刻苦して冷暖自知する事なるを末世になりては人の教を受て正體もなき事を聞覺て是を大悟とする事なり、これは法華經の中の窮子ならずや、方等部にては四果の聖者をさへ二乘凡夫と呵責し給しものを、人々の教を給ふ通りの埒もなくたわいもなく、繩にもかづらにもかづらぬ事ならば、何しに佛は六年まで雪山に閉籠て皮骨連立し絲を以て瓦を編立たる如く瘦衰へ、蘆すゝきの膝を突貫きて臂まで穿ち抜たるをも覺え給はん、目のあたり雷の落も牛馬を打殺したるをも御覺えましまさぬ程、苦吟し給ひて初めて佛知見を開き給ひたるは如何なる事ぞや、

蓋し佛道も上古は大いに難く今時は大いに易しとするか、且蘿蔔を煨し芋栗を煮るが如く初めは硬く、後には軟かなるものとするか、今時の易きが是ならば古への難きは非ならん、古の難きが是ならば今時の易きは非ならん、古の難きは苦吟する事は甚だ苦吟す、纒に發轉する時は忽ち賢聖佛祖たり、那邊を透過し今時を透過して毫釐も觸著すれば電轉じ星飛ぶ、今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり、望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し、纒に發轉する時は依然として困魚窟に止り、跛鼈甕裏に落つ、今時を透らず那邊を透らず、撻著すれば瞎驢氷稜に上る、今時の易きを取んか、古への難きを取んか、如何に末世なればとていひ甲斐もなき有様なり、古人も末々は禪法も正體もなく成果べきを知給ひけるにや、妙心を瘡紙に求め正法を口談に付すとは兼て悲み云ひ置れたるなるべし、此事もし紙授口傳にて濟べくば神光の臂を斷ち、玄沙の足を傷ひ、法心は頭腫れ法燈の涙を落す事はこれあるべからず、人は兎もあれ角もあれ、我は是非く晝夜に間もなく

首題を唱へて眞の法華のあり様を見届くべきぞと親切にさへ唱へ給は、雪山には入らず頭は腫ずとも、決定必定自性の妙法蓮華は麗しく開け侍るべし、たゞ肝要は自心の妙法を見届ずば置まじきぞと望み深き程貴き事は無事なり、如來世尊も自心の妙法を見届け給はざりし間の流轉常没の凡夫に少しも違ましまさて、生死往來し給ひき、末後雪山に於て自心の妙法を見付給ひて初て正覺を成就し給ふ事なり、瓦を磨とは八識賴耶の無分別識を認て本來の面目なりと合點して、妄念さへ無れば其迹は鏡の如くなる佛心ぞ、只鏡の萬境を寫して鴉は黒く鶯は白く、柳は緑に花は紅に少しも錯らず照せども、毫釐も迹を留ぬ如く時々勤めて拂拭せよと教られて晝夜に妄念を拂ふは瓦を磨き粟稗の鳥を逐に同じ、是を識神を認むと云ふ、山河大地を照破する光明の發する事はなき事なり、此類の修行は昔より大唐にも間多き事なり、南嶽大師の馬祖の庵前にて瓦を磨き給ふも馬祖に此意を知らしめん爲なり、去るに依つて長砂大師の偈に曰く『學道の人、眞を識ら

ざることは、只從前識神を認むるが爲に、無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人となす、』と是故に慈明眞淨息耕大慧等の祖師齒を切つて觥排して親切を盡されし事なり、其外の諸師の有様は逐一擧するに及ばず、大凡三世十方の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖はなき事なり、是萬古不易の大綱なり、見性と法華眞の面目を見届くる事なり、此望なくて種々の事して佛法なりと心得るは船頭もなき大船に幼童多く競ひ乗て何地へよるべき湊もしらで、かなたへ漕が好ぞ、此方へ漕が好ぞとて思ひ〜に櫓棹推たて昨日は東の方へ潮に隨ひて漕ぎ漂ひ今日は西の方へ汐に隨つて漕ぎ漂ひ終に海中を出る事能はず、其船中へ案内しりたる船頭忽ち打乗り磁石を見定め楫を把る時は一日の内にも思ふ湊へ着く事なり、船頭とは見性の志なり、磁石とは正法の指南なり、楫とは平生の志行なり、如何にして妙法の湊へは漕入べきぞとならば一切の行人は佛を求め祖を求め、涅槃を求め淨土を求めて外へ〜と漕出る風情なり、故に轉求むれば轉遠く轉尋ぬ

れば轉遙なり、眞正妙法の行者は即ち然らず、自己本有の妙法は如何なる物ぞと推究て佛を求めず祖を求めず、彼妙法は内に在とやせん、外にありとやせん、内外中間にありや、又青黄赤白なりや、是非くく一回見届けずば置くまじきぞと、十二時中一切處に於て間斷なく、猛く甲斐くしき氣槩を推立流石の者が思ひ立たる事を遂ずや置べき、仕果ずやあるべきと寢ても覺ても起ても居ても捨おかず、晝夜に點檢して或時は打返して恁麼に尋る底は何物ぞ何物ぞと尋る備は是阿誰と進み入る、是を獅子人を咬の法と云ふ、心の妙法は如何くくとはかり尋ねもて行を韓獺塊を逐と云ふ、唯兔にも角にも萬事を放下して無念無心になりて南無妙法蓮華經くくと唱へ給ふべし、此外別に有難き法理の老僧が書送るべき事ありと思さば上もなき錯りにてこれあるべく候。南無妙法蓮華經

延享第四丁卯曆仲冬廿五日

沙羅樹下老衲書

右管々布、長書、披覽も六箇布侍るべけれども、此れを序に菴居の人々も一

覽ぜらるべければ法施にもなれかしの心にて書續けたるにて候、至極の旨は自心の妙法を是非く見届くべしと思して絶間もなく首題を唱へ給へとの心にて候。

『老夫此の草書を裁し畢つて竊かに看讀す、時に一僧あり予が傍に在り、是れ予が舊友の僧なり、讀んで法華眞の面目と云ふ處に到つて長吁して曰く、師復た止啼の金葉を掃ひ給ふか、予勃如として曰く何と謂ふことぞ哉、爾吾が草書を以て黄葉と爲る乎、是れ金なり黄葉には非ず、此の書の如きは法華本文の大意を汲んで書す、爾指して以て黄葉と爲す、是れ法華を謗する者に非ずや、誹謗正法の罪累、懺悔を容るゝに所なし、爾那處を指してか以て黄葉と爲るか、僧低頭して曰く今近遠住菴の諸士各英豪の才を懷いて枯淡を忘れて坐し、軀命を抛つて修す、舊宅を借り廢社に潜んで十年五歳する者は師の惡毒の苦乳を甘つて分離するに忍びざる者なり、今歳狂浪田園を洗ひ粒米を留めず、民家各妻孥を携へて竊

法華宗の老尼の間に答ふる書

かに他方に往かんと欲す、予杳かに嗟悼すらく、已ぬる哉鶴林住菴の緇侶、一箇も錫を留むる無く禪苑の荒蕪之に過ぐべからず、近ごろ一僧あり曰く飽煖を探り開熱を慕うて朝秦暮楚する底の庸常下劣の族は閑いて論ぜず、眞實辨道、透過を求むる底の舊參の上士は一箇も去らず、其の精進勇銳前月に十倍せり、五箇黨を爲し十箇絆を結んで此の水邊彼の林下に食せず寢ざる者或は五日或は十日、盡く言ふ此れは是れ凶年飢歲を守る、佛法の格式叢社の古實なりと、瘦せたることは考妣を喪する人の如く、衰へたることは重病に罹れる人に似たり、凍餒困苦、鬼神も亦涙を落すべし、波旬も亦掌を合はすべし、今時諸方の叢林、佛閣の高貴、僧舎の嚴麗、二輪並べ轉じ、四事重ね備ふ、而るを顧みずして何の心ぞや、貧困飢凍、窮餓交煎の巷に在つて耳に聞く所は師の惡言苦罵、口に投ずる所は佗の粟麥糝糠、心の可なる底の事一滴も亦無し、然るに彼れ亦五尺の身を容るゝに所無き所以の輩に非ず、盡く是れ今時叢林頭角の上使なり、只各透過を求

むるに急にして其の餘は總に顧みざる者なり、予聞き得て大に歡踊して曰く且喜すらくは佛法大に人を得べきの時なりと、師も亦宜しく向上の鉗鎚を提起して實參實悟の上士を求むべし、隨他意の説に涉つて第二機を以て人を接せば大に人を損せん、必ず他の悟門を妨げて蟲の氣息ある底の漢子も亦得ること能はず、予が如きは三十年前、師の提携に依つて精鍊刻苦、多少の艱辛を喫し盡して本有の佛性を見得し法華眞の面目を徹了して一念三千の妙理、三諦即一の奧義に於て豪蓋も疑惑無し、師亦吾を以て法華眞の面目を見得したりと爲して許可し給ひき、予も亦心に竊かに謂へらく天下既に定まりぬ、近頃師の碧巖録を評唱し給ふを聞くに恰も田夫の杳かに階下に立つて中書堂上諸君の公儀を聞くが如し、替者の眸を張つて湘水の佳景を窺ふが如く、聾者の耳を敬て、洞庭の雅樂を聞くに似たり、此に於て大に力を失して慚汗腋に滴つて傷淚胸に滿つ、従前の苦修尺寸の功を立てざる者にあらざる者に似たり、初め吾が得力、師と一般なりと謂ひき、今予を以て

師に擬するに疲羊の駿驥を指して吾が父なりと稱するが如く、跛龍の神龍を指して吾が師なりと道ふに似たり、心に竊かに師を以て吾を賤し給ふ者と爲して懊々として樂まず、師今又法華眞の面目の事を書す、一見して怨恨乍ら發す、故に言ふ又是れ止啼の金葉を包むと亦宜ならずや、住菴の諸子も亦今往々此の歎息あり、況んや師も亦諸人辛勤して得る所を指して棺木裏の禪と稱するをや、予が曰く寔に其事あらん、嗟子來り進め、爾老松の丘壑に秀づるを見る麼、枝柯九霄を衝き根盤三泉に徹す、上に百尺の絲あり下に千歳の苓あり、勢ひ蛟龍の霧を騰んで長空に上らんと欲するが如し、下に青々たる一寸の松あり猶甲子を戴いて立つ、指にても抜くべく爪にても截つべし、此の二つの物を指して他に問うて曰はん、是れ什麼ぞと、他必ず言はん、共に是れ松なりと、唯歲月を積んで養ふと養はざるとに在るらくのみ、言こと莫れ歲月是れ可なりと、爾若し一箇の死棺材を守つて鬼家の活計を作し了らば縦ひ積んで驢年を重ぬと雖も甚麼の用を作すにか堪へん、古

へ張氏の子あり、兄を張五と稱し弟を張六と曰ふ、兄弟糧を裏んで遠く百里に往く、中路にして各金一錠を拾得せり、大に歡踊す、而して後索居互に死生を知らざる者此に三十餘歳矣、六その兄の事を思うて四方に尋逐して其兄の所在を認め得て杳かに來つて相訪ふ、其兄の室を望めば水磨列り鳴り穀車轟き過ぐ、牛馬槽檻を列ね家鵝溝瀆に滿つ、簫竿遠く流へて歌聲抑揚す、佳賓の往くあり高客の來るあり、六、震ひ恐れて直に門闥を越ゆること能はず腰を折り膝を屈めて畏る畏る名刺を出せば雙童來り迎ふ、容貌秀麗態度高雅なり、踟躕して從ひ進めば屋壁の麗、堂宇の美、康藝が室に入るが如く石奴が堂に上るに似たり、魂蕩げ股戰いて坐せん所を知らず、少らくあつて張五婢妾に扶けられて錦張を挑げ出づ、侍女圍み羅つて綺羅魂を驚かし繡紋目を奪ふ、金爐千花の芳を吐き玉佩百禽の音を流ふ、頭紅羅の帽を穿ち、肩紫錦の袍を掛く、綠熊の茵に坐し紫檀の机に凭れり、奢の睥り虎の如く抗れる肩窩の如し、六、一見して覺えず頭地に到る、身體委み

縮つて啼泣して休まず、頭を擧げて正しく視ること能はず、張五徐々として告げて曰く吾が弟何ぞ來ること晚つる、胡爲れぞ其れ此の如く郎當なるや、六、涙を拭ひ畏々問うて曰く、吾が兄今何れの候に仕へ誰が家の恩願を受けてか此の如く尊大、此の如く富貴なるや、張五の曰く我れ人の臣たる所以の者に非ず、我れ人の恩願を受くる所以の者に非ず、我れは昔者金を拾へる者なり、六が曰く兄の拾へる所その數幾百箇の金とか爲るや、大車の重ね積みける者か、巨船の柵て載せたる者か、天の墜す所か地の埋む所か、遺忘する底誰とか爲る耶、張五曰く然らず三十年前我れと爾と何某の路上に於て拾ふ所の者なり、六曰く怪しい哉纒に一錠の金にして此の富貴を得ることや、六此に於てか大に惑ひぬ、恐くは候白黒の流亞乎、盜跖の部屬乎、若し果して然らば我は早く辭して出でん、出で謀つて九族の難を通れん、豈坐らにして死亡を待つ者ならんと云ふ、張五聞々とし笑つて曰く爾向に拾へる所の者今其れ何れの處にか在るや、博奕して失へる者と爲る乎、

且花酒の惑に罹れる者乎、六が曰く宜なる哉、我が郎落たるを見て我が兄の甚だ怪めることや、願くは左右を避けよ、吾れに一言あり密々に之を告げん、張五纒に目撃すれば妻孥皆退く、六畏々近く進みて曰く吾れ豈博奕し及び花柳を顧みる者ならんや吾が貧しきは金を失はざるにあり、吾が瘦せたるは金を護るが爲なり、吾が兄向に言はずや、爾能く保護せよ亂に費し用ふること莫れと、吾は吾が兄の命を背かざるを以て足れりと爲る者なり、張六既に彼の金を得てより十重包裹して尊重保護すること明珠を懐くが如く夜光を持するに似たり、行くにも亦携へ歸るにも亦携ふ、蚤暮盜竊の難を恐れて三十年未だ曾て心を放して眠らず、人の窺ひ知らんことを恐れて友を絶ち交を避けて故さらに貧窶の人と爲りて肩百緞の鞞衣を掛け首千補の烏帽を穿つ、人皆吾れを棄て顧みざるを吾は却つて此を以て幸と爲す、金を費し盡さんことを恐れて妻孥も亦養はず、常に獨子にして往き獨子にして歸る、常に人縁無き處に竄れて舊舎を尋ねて臥し破廟を求めて眠る、

終に客店に入つて宿せず、曾て糟糠にだも飽くこと無し、常に人の門戸に傍うて乞ふ、久しく立つて與へざれば稀に歌ふのみ、彼の金今此に在りと云つて左右を顧みること再三、飽くまで人無きを窺つて頸、垢膩の破布囊を弛め再三押し戴き十重の包裹を解き左右を顧みて金を出して之に示して曰く、兄の捨へる今に在りや、願くば出して舊交を紹がしめよ、張五笑つて曰く三十年前備に別れて久しからずして彼の金を打失し了れり、六、勃如として熱張五が面を見、且吾が身を顧みて曰く兄は失へり吾は護れり、吾は護れり兄は失へり、失へる兄は是の如く尊大なり、護れる吾は此の如く貧凍なり、或は目を張り或は頰を攢めて板齒唇を咬んで沈吟休まず、少くあつて曰く、護るが非にして窮餓し、棄つるが是にして豊饒ならば後れたりと雖も我も亦棄てんか、願くば之を棄つるの道を聞かん、張五大に笑つて曰く、爾が捨へる所は金にして黄葉に劣れり、身を潤すこと能はざるのみに非ず却つて其の身を窮餓し其の心腸を傷賊す、若し黄葉を包めば來往

重からず、貧窶を現ずることを須ひず、茅舎の裏に在つて妻子を養ひ枕を高うして睡臥せんのみ、爾が護する所は之を棄つる所以の道なり、我が棄つる所は之を護する所以の道なり、我れ初め金を得、爾に別て後楊州に行く、金を以て黄葉より輕しとし放つて大に鹽を買ふ、鹽を賣つて足らず、其息を束ねて大に綿絮を買ふ、綿を賣つて足らず、其息を放つて大に麻絲を買ふ、麻絲を賣つて足らず、其息を放つて大に粟米蔬果魚肉を買ふ、人を吳楚蜀魏の間に放つて山海の珍、水陸の美昔ねく載せ聚め大店八九を開き、臣商三百人鐘を鳴し鼎に食む、大凡錢を握つて張五が門に入る者糟糠菜薪、鹽醋酒醬此に嚮がずと云ふこと無し、財を積むこと巨萬、陶朱を狹しとし猗頓を屑とせず、倉庫廩庾、甕を並べて列り立て、千頃膏腴の地を求む、松杉の山、梓楠の苑數十を買ひ得て今居を此の處に占む、是れ吾が向に黄葉より輕しとして金を棄てたる所以の道なり、六、立つて再拜して曰く我が兄萬歲、欽み冀くは疾病無からんことを、兄の捨は捨に似て久しく護

を勤む、小人が護は護に似て久しく捨を勤む、捨護互に勤めて利害大に異なり、寔に知る智者の手に入るときは則ち黄葉も亦真金なり、愚者の手に落つるときは則ち真金も亦黄葉なり、自ら恨む、三十年心肝を惱まし氣力を盡して實に方寸の功果を立てずと云つて聲を放つて哀號すと、參學も亦斯の如し、初め備が得る所即ち是れ人々本具の性唯一乘法華眞の面目なり、我が得る所も亦人々本具の性唯一乘法華眞の面目なり、此を見性と言ふ、是の性初め見道より終り種智成就に到るまで毫釐も變遷なし、一錠大冶の精金の如し、故に言ふ初發心時便成正覺と、教家に此れを十住の初住と言ふ、轉た最後の重關あり、誰か知らん祖庭猶天涯を隔つること存ることを、往々此の一片の所見を擔つて乃ち曰く、我今既に朕兆未發以前佛祖未興の處に向つて立つ、者裡全く生死無く涅槃無く煩惱無く菩提無し、一代藏經は不淨を拭ふ故紙、菩薩羅漢則穢の如く參禪學道閑妄想、古則公案眼中の翳、者裡今時無く那邊無く佛を求めず祖を求めず、饑飯困眠何の欠少す

る所か有らんと、者般の見解佛祖も亦醫することを得ず、只日々安閑の處を求めて今日も只恁麼死猶狙地にし去り明日も亦恁麼死猶狙地にし去る、縦ひ恁麼にして無量劫數を歷とも依然として只是れ一箇の死猶狙、什麼の用を作すにか堪へん、如來は此れを疥癩野干の身に比し給ふ、鶯嶋は呵して蚯蚓の智と爲し淨名は蕉芽敗種の部類と曰ふ、長沙は此れを百尺竿頭不動の人と言ふ、臨濟は湛々たる黒暗の深坑と言ふ、是を見地不脱と言ふ、謂はゆる機、位を離れざれば毒海に墮在する者なり、只一片の所見を執して措磨淨盡して一生を錯り了る、彼の張六、一錠の金を懷いて困倦逼迫去死十分なるが如くし、慈明、黃龍、眞淨、晦堂、息耕、大慧の諸老、力を盡して攘斥すれども救ふことを得ず矣、老婦初め七八歳の時母に随つて教院に入つて僧の摩訶止觀の中地獄の説相を講ずるを聞く、其僧辯才あり、叫喚無間焦熱紅蓮の苦境を演ぶ、恰も目のあたり見るが如し、一堂の縑素盡く寒毛卓堅す、歸り來つて子が平生の殺業を計るに身の置き所なきが如し、動止

悚然肌膚栗々たり、竊かに普門品と大悲神呪とを把つて晝夜讀誦す、一日母と共に浴に入る、母湯の熱からんことを求めて婢をして頻りに薪を添へしむ、浸々として火氣肌を衝き浴盤大に鳴る、乍ち地獄の事を想念して聲を放つて悲號す、哀聲四隣を動かす、此れより竊かに出家を求む、父母許さず常に寺に行いて經を誦し書を読む、十五歳にして出家自ら誓つて曰く願はくは肉身にして火も焼くこと能はず水も溺らすこと能はざる底の得力を見ずんば死すとも休まずと、晝夜孜孜として誦經作禮、病惱或は針灸の間に於て點檢するに其の痛痒平生と異なること無し、心甚だ歡びず曰く我既に父母に背いて出家、未だ方寸の功果を見ず、我れ聞く法華は一代の經王にして鬼神も亦欽む、往々幽冥苦界の人、人に託して救を求むるに必ず法華を言ふ、熟謂ふに他人の讀誦するすら且其苦患を抜く、況んや自身讀誦せんをや、且又經中必ず甚深の妙義あらん、此に於て親しく法華經を把つて窮め見るに唯一乘諸法寂滅の文を除いて餘は皆因緣譬喩の説なり、此の

經若し者般の功德あらば六經諸史百家の書も亦功德あるべし、豈特り此の經をしも云はんや、大に懷素を失ふ、實に十六歳の時なり、十九にして因に正宗贊を讀む、巖頭和尚末後盜賊の爲に害せられて叫聲三里の外に徹すと、予謂へらく徹することは甚だ徹す、如何せん盜賊の戈矛を免れざることを、嗟、巖頭和尚の如さんば僧中の麟鳳佛海の蛟龍なるすら且然り、死後豈獄奴の杖子を免るゝことを得んや、若し果して爾らば參禪學道何の益かあらん、佛法恁麼に虛誕なり、悔ゆるらくは身を以て此の妖邪の隊裏に投ぜしことを、今夫れ如何すべき、此に於て大に懊惱す、食はざること三日永く望を佛法に絶つ、佛像經卷を見ること泥土の如し、専ら俗典を讀み詩文を弄して少しく憂愁を忘る、二十二にして若州に往いて虛堂の勝會に交り乍ち省覺す、其後豫州に在つて佛祖の三經を讀んで大に猛省す、晝夜無字を提起して片時も休まず、只愁ふ純一無雜打成一片なることを得ざることを、又愁ふ寤寐恒一なること能はざることを、二十四歳の春越の英巖の僧舎に

在つて苦吟す、晝夜眠らず寢食共に忘る、忽然として大疑現前して萬里一條層氷裏に凍殺せらるゝが如く胸裡分外に清潔にして進むこと得ず、退くこと得ず、癡々呆々として只無の字有るのみ、講筵に陪し師の評唱を聞くと雖も數十歩の外にして堂上の議論を聞くが如し、或は空中に在つて行くが如し、此の如き者數日、乍ち一夜鐘聲を聞いて發轉す、氷盤を擲碎するが如く玉樓を推倒するに似たり、忽然として蘇息し來れば自身直に是れ巖頭和尚三世を貫通して毫毛を損せず、從前の疑惑底を盡し氷消す、高聲に叫んで曰く也太奇也太奇、生死の出づべき無く菩提の求むべき無し、傳燈千七百箇の葛藤、一捏を消するに足らず、此に於て慢曠山の如くに聳え憍心潮の如くに湧く、心竊に謂へらく二三十年來予が如く痛快に打發する底之れ有るべからずと、一段の所見を荷うて直ちに信陽に行く、正受老師に謁して所見を演べ偈を呈す、師左手に言偈を握つて曰く者箇は是れ學得底、那箇は是れ見得底と云つて右手を伸ぶ、予曰く若し見得底の師に呈すべき有らば

須らく吐却すべしと云つて嘔吐の聲を作す、師云く趙州の無字作麼生か見る、予が曰く無字甚麼の手脚を著くる所か有らん、師指を以て予が鼻を拗つて曰く多少か手脚を著け了れり、予擬議す、師大笑して云く此の守藏窮鬼子と、予顧みず、師曰く爾恁麼にして足れりと爲るか、予曰く甚麼の不足の處か有らん、師南泉遷化の話を舉す、予耳を掩うて出づ、師曰く爾黎、予頭を回らす、師曰く此の守藏の窮鬼子と、一夕師納涼して檐端に坐す、予亦偈を呈す、師曰く妄想情解、予高聲に叫んで曰く妄想情解と、師即ち予を捉住して瞋拳二三十終に堂下に突き落す、時に五月四日の夜、霖雨の後なり、予泥土の上に在つて偃臥して氣息共に盡く、去死十分、動も亦得ず、師檐上に在つて呵々大笑す、少らくあつて蘇息し起き來つて作禮す、通身汗流る、師高聲に叫んで曰く此の守藏の窮鬼子と、此に於て親しく南泉遷化の話に參ず、寢食共に廢す、一日些の省覺あり、入室種々下語すれども契はず、只云ふ守藏の窮鬼子と、予心に竊かに謂ひらく辭し去つて他方に往か

んと、一日城下に往いて托鉢す、狂人あり若帯を把つて予を打たんと欲す、予覺えず南泉遷化の話を打破す、其餘の數段の因縁、疎山壽塔の話、大慧荷葉團々の頌、自ら謂へらく盡く打發すと、歸り來つて所見を演ぶ、師總に可否せず、只微々として笑ふのみ、此れより守藏の窮鬼子と言ふことを休む、其後省悟大に歡喜する者三兩回、恨む所は語路、到あり不到あり平生燈影裏に行くが如し、歸り來つて病に如何老人に侍す、一日息耕老師南浦和尚を送る偈に、相送れば門に當りて修竹あり、君が爲に葉々清風を起すと云ふを看讀して大に歡喜す、夜光を暗路に獲るが如く覺えず高聲に曰く我れ今日始めて語言三昧に入得せりと立つて禮拜す、其の後行脚して路勢陽を歴て一日大雨を衝いて行く、雨水膝に到る、廓然として深く荷葉團々の句中に入得す、歡喜立つことを得ず、身を放つて水中に倒る、起立することを忘却して腰包皆浸す、行人怪しみ立つて扶け起す、予呵々大笑す、人皆以て狂せりと爲す、其冬泉州信田の僧堂に在つて夜坐す、雪を聽いて得所あ

り、翌年濃東靈松の僧堂に在つて經行、忽然として従前多少の所得を打失す、大に歡喜す、三十二歳にして此の破院に住す、一夜夢らく吾が母紫絹衣を以て予に附す、提起して兩袖甚だ重きことを覺ゆ、之を探るに各一面の古鏡あり、徑り五六寸可り右手なるは光輝心肝に透徹す、自心及び山河大地澄潭の底無きが如く、左手なるは全面一點の光輝無く其の面新鍋の未だ火氣に觸れざる者の如し、忽然として左邊の光輝右邊に勝ること百千億倍なることを覺ゆ、此れより萬物を見ること自己の面を見るが如し、初めて如來は目に佛性を見ると云ふことを了知す、後來因に碧巖録を取つて讀む、従前の所見と大に異なり、其の後一夜法華經を把つて讀む、乍ら法華圓頓真正の奧義を徹見して最初一團の疑惑を打破す、従上多少の悟解了知大に錯り了ることを覺得す、覺えず聲を放つて啼泣す、須らく知るべし參禪は甚だ容易ならざること、今放蕩老懶毫釐も取るべき所無きに到ると雖も自ら覺ゆ四十年終に空しく光陰を送却せざること、是れ張五揚州に在つて金

を放つて艱辛せし所以の者に非ずや、予も亦吾子に効つて一旦の所見を擔つて措磨淨盡して一生を錯り了らば彼の張六が一錠の金を死守して其の身を窮餓し其の心肝を困煎せしと何を異なることを得ん、天竺には此れを二乘長者の窮子と言ひ漢土には此れを默照邪禪の流類と言ふ、是れ皆菩薩の威儀を知らず、佛國土の因縁を明らめざるが致す所なり、今時往々一片の空理を擔つて佛を會し祖を會し古則公案を會し了つて盡く言ふ、棒の如く陀羅尼の如く一喝の如しと、大に笑ふべし、勉旃諸子、佛道深遠なり、須らく知るべし、海の轉た入れば轉た深きが如く山の轉た上れば轉た高きに似たることを、若し自家得力の當否如何を知らんと欲せば先づ須らく南泉遷化の話に參ずべし、昔、三聖秀上座をして去つて長沙の岑禪師に問はしむ、南泉遷化の後作麼生、沙云く石頭沙彌爲りし時六祖に見ゆ、秀云く沙彌爲りし時を問はず、南泉遷化の後作麼生、沙云く伊をして尋思し去らしむ、秀云く和尚千尺の寒松ありと雖も且つ條を抽る筈無し、長沙無語、秀

歸つて三聖に擧示す、三聖覺えず舌を吐いて曰く臨濟に勝ること七步と、此の語若し見得分明なることを得ば備に許す、小分の相應を得ることを、何が故ぞ人無きに獨語すれば其の賤しきこと鼠の如し、何を以てか驗と爲ん、牙を鼓すること三下合掌して曰く、漸。

遠羅天釜續集

念佛と公案と優劣如何の問に答ふるの書

先書に正念工夫相續不斷の助けに念佛せよと勸むる者も是れ有り、如何ん、趙州の無字と一般なりとせんか將又別に仔細有りやとの御尋ね、叮嚀なる思し召しに候、人を殺すに刀を以てする有り、鎗を以てする有り、一般なりとやせんか將又別に仔細有りやと問はんに如何か答へ玉ふべきや、刀鎗器異なりと云へども、其殺すに到つては豈に兩般有んや、去る程に、忠信は碁盤を振上げて敵を追ひ、篠塚は船梁を引きはづして人を打ち、呂后は鳩酒を執つて如意を毒害し、玄武は琴絃を解いて妓女を縊殺し、關羽は龍刀を掲げ、張飛は蛇棒を取る、刀鎗は兩般なれども、只執る人の利鈍と真偽との兩般に在るらくのみ、學道も亦然り、或は

定坐し、或は誦經し、或は誦咒し、或は念佛し、努め力めて前後際斷の處に到つて無明の暗窟を踏翻し、五欲の凶賊を逼殺し、大圓鏡光を擊碎し、四智圓明の正位を透過し、大事を成辦するに到つては、行持は縦ひ品異なれどもその所證に到つては豈兩般有んや、茲に人あり力量骨格互に相同じ、各々堅甲利兵を執つて相戦はんに、一人は志念堅からず或ひは疑ひ、或は恐れ、或ひは戦はんとし、或ひは走らんとして死生決せず、進退定まらず、眼目定動し、步驟正しからず、しどろに成て相進まん、一人は危亡を顧みず、強弱を觀ぜず、一身を必死の地に擲着し、目を据る齒を切つて大精神を震つて斷々として相進まば、此兩箇の勝敗は掌を見るが如けん、十騎にして千騎に對し、百騎にして萬騎に對すといへども、百戰百勝目前に分明なり、譬へば兩陣相對せんに一方は金銀を以て募り備ひたる雜兵十萬、又一方は仁恕を以て志を合せ忠義を以て鍊り鍛へたる精兵一千、此千騎を放つて彼十萬に當てんに、惡虎の群羊を驅るが如けん、是他なし只大將の

賢と不肖とに在らくのみ、豈に勢の多少器の長短に依らんや、工夫も亦然り、一人有り常に趙州の無の字を擧揚し、一人有り常に專唱稱名せんに、無の字を擧する人は工夫純ならず、志念堅からずんば、縦ひ擧して十年二十年を経るとも何の利益か有ん、稱名の行者は打成一片に稱名し、純一無雜に專唱して、穢土を觀せず、淨土を求めず、一氣に進んで退かずんば、五日三日乃至十日を待せずして、三昧發得し佛智煥發して立所に往生の大事を決定せん、往生とは何をか云や、畢竟見性の一著なり、經に曰く、我國に生れんと十念唱へたらん人の我國に往生せずんば、正覺を取らじと誓ひ玉ふ、我が國とは何れの處ぞ目前歷々たる底の本具の自性に非ずや、見性の人に非ずんばたやすく見る事能はじ、若し然らずんば、今時諸方淨業の人々、日々にとなへ唱へて千念萬念、千億萬念す、然うして往生の大事を決定する底は半箇も亦無し、知らず無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんか、殊に知らず一念直に是れ往生極樂國、豈に十聲を待んや、此故に佛の宣はく勇猛の衆

生の爲には成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には涅槃三祇に互ると説玉へり、若し無の字と稱名と兩般の看を成ば須らく知るべし、盡く是れ邪魔外道の種族なる事を、悲む所は今時淨業の行者往々に諸佛の本志を知らず、西方に佛在りとのみ信じて西方は自己の心源なりと云事を知らず、念佛の功課に依て虚空を飛過して死後西方に行んとのみ覺悟す、一生苦吟して往生の素懷を遂る事能はず、殊に知らず十方佛土中唯有一乘法なる事を、此故に言、佛身は法界に充滿して普く一切群生の前に現すと、若佛西方にのみおはさば一切群生の前に現じ玉ふ事能はじ、若し一切群生の前に現せば特西方に限るべからず、悲い哉、如來清淨の眞身は煥爛として目前に分明なる事掌を見るが如くなれども、慧眼既に盲ひたる故に、都て是を見上つる事能はず、豈に言はずや、光明遍照十方世界と、蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず、悟る則んば十方世界草木國土を全うして直に是如來清淨光明の眞身とし、迷ふ則んば如來清淨光明の眞身を全うして錯つて十方

世界草木國土とす、此故に經に曰く、若し色を以て我を見音聲を以て我を求めば此の人邪道を行じて如來を見上つる事能はじと、眞正淨業の行者は即ち然らず、生を觀ぜず、死を觀ぜず、心失念せず、心顛倒せず、となへ唱へて、一心不亂の田地に到つて忽然として大事現前し往生決定す、此の人を指て眞正見性の人とす、自身直に是れ六十萬億那由陀、恒河沙由旬の彌陀七重の寶樹八功德池心上に昭々として目前に煥燦たり、山河大地萬象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海なる事を徹見す、專唱稱名一念不生放身捨命の端的を往と云ひ、三昧發得眞智現前の當位を生と云ふ、如上の眞理煥然として當處湛然一毫をも隔てず涌出するを來迎とす、來迎往生直下不二見性の當體なり、元祿の頃に二人の淨業者あり、一人を圓愨と云ひ、一人を圓愚と云ふ、二人志を同うして專唱怠る事なし、圓愨は山城の人也、唱念純一果して一心不亂の境致に到つて忽然として三昧發得し往生の大事を決定す、此に於て遠の初山に上つて獨湛老人に謁す、湛問ふ爾ちは是何れの處

の人ぞ、愨曰く山城、湛云く何れの宗をか業とす、愨曰く淨業、湛云く彌陀如來年多少ぞ、愨曰く某甲と同年、湛云く爾ち年多少ぞ、愨曰く彌陀と同年、湛云く即今何れの處にか在、愨即ち左手を握て少く揚ぐ、湛驚て曰く是眞箇淨業の人也と、圓愚も亦久しからずして三昧發得し大事決定す、元祿の初め豆州の赤澤なる處に行者あり、即往と云ふ、彼れ亦稱名の力に依つて大に得力あり、予向き此兩三箇の傳を記す逐一枚擧するに暇あらず、是即ち專唱稱名得力の現證なり、須らく知るべし話頭も稱名も總に是れ開佛知見道の助因なる事を、開佛知見は諸佛出世の本志なり、後方且く方便を設けて往生と名づけ見性と云ふ、豈にそれ兩般有んや、是等の意を見徹せざる故に、禪者は淨業の行者を見ては無智昏愚の凡夫見性の大事有る事を知らず、妄りに唱へて白晝に十萬億の刹土を飛過して、極樂國土に往んとす、恰かも跛籠の身づくろひして唐土へ飛んとするが如し、殊に知らず十萬億刹土は十惡八邪佛智開明の曉き十惡八邪乍ち氷消して當處即ち極樂國

念佛と公案と優劣如何の問に答ふるの書

士なる事を知らずと云うて輕賤す、淨業の行人は禪門の諸子を見ては如來他力の
 大誓を信ぜず、自力貢高の我慢を主張し大悟して生死を出んとす、片腹痛き風情
 ならずや、未代下根の我々が及ぶべき事かは、左から家鴉の朝鮮へ翔つて鷹と羽
 節を較べんと羽づくろひするに似たりと慢り狹す、法華經の行者は乃ち曰く、吾
 が經の如きは三世の諸佛出世の本懐、一切の如來成道の直路なる醍醐上味の妙經
 を指し置き、稱名參禪何の用ぞ、剩さへ妙經轉讀の法師を見ては唯有一乘の圓解
 を發せず、諸法實相の知見を開かず、只毎日わわとのみ叫びて偏へに春の蛙の眸
 にわめくに似たりなど、舌長き雜言如阿梨樹枝の金文も顧りみざる愚人皆是邪魔
 外道の所行なりと嘖り恨む、殊に知らず法華は阿含方等四味の階漸を慕過し開佛
 知見の至要を演、此故に本文に曰く開佛知見道故出現於世と、正に知るべし圓解
 の煥發を以て出世の本懐とする事を、然らば則ち參禪も念佛も及び看經誦經をさ
 へに盡く是れ見道の補助にして、行路の人の杖の如くなる事を、杖に藜杖あり、

竹杖あり、藜竹品異なりといへども其行を扶くるに至つては一なり、言事なけれ
 藜は可にして竹は不可なりと、若其れ行客心屈し體疲れて起つ事能はずば、藜杖
 竹杖何の用を成にか堪んや、參禪も亦然り只肝心は行者勇猛精進の一念子に在ら
 くのみ、云ふ事なけれ話頭是にして稱名不是なりと、行人若し勇銳の志無くん
 ば、稱名も話頭も瞽者の眼鏡、法師の櫛時はへ、果して是れ何の用ぞ、茲に數百
 人あらんに帝都へ行かん事を願うて各々糧を包んで出づ、先達好らずして錯つて
 遠境邊土虎狼充滿の廣野に留つて徒に日々杖の短長を争ひ、行装の可否を論じ、
 路費の多少を計つて、杖々とのみ唱ふるあり、路費々々とのみ叫ぶあり、終に一
 歩をも進む事を知らず空しく歲月を送つて、歳衰へ、體疲れて、果は虎狼の爲
 に獲られ、遠路邊境の閑神野鬼と成り果つるに似たり、終に帝都に到る事得ず、
 只肝心は杖子を擇ばず、行装を論ぜず、一氣に進んで退かず、速かに京師に到る
 を以て賢なりとす、若し今時に效つて、生前に佛力を頼んで、死後に西方に往ん

とならば、一生三昧發得往生決定する事能はじ、況んや真正見性の大事に於てをや、去る程に眞珠庵主の歌に『行く水に數かくよりも慕なきは、佛を頼む人の行末』と、蓋し斯言へばとて淨業を嫌ひ稱名を狹するにし非ず、正念工夫相續不斷、見性了義の扶けにとならば稱名はさて置き粉拽歌にても唱へ玉ふべし、相構へて見性の秘訣を捨て置き專唱の功勳に酬へて佛にならんと計り玉ふべからず、其仔細は譬へば茲に萬石の大船あらんに、思ふ儘に艤ひし順風を七合に受て舟歌を張り、櫓拍子を揃へて水主楫取心を合せて千尋の浪を押し切り、八重の鹽路を漕抜んと毎日勇み進むと云へども、纜を切て放たざらん限りは中々浩波を渉る事能はず、徒らに日々氣力を勞すといへども元の湊に在らくのみ、願ふに纜の金緒なれども大船を留むるに至て萬夫も及ぶべからず、學道も亦然り、譬へば茲に一個有んに、宿に靈骨有つて英豪の氣を具し、神俊の才を備へ剩さへ馬祖百丈を師家とし南泉長沙を同伴とし、勇猛の額を養ひ、打成一片に進み純一無雜に修し

たりとも、命根截斷せざらん限りは因地一下の歡喜は努々これ有べからず、命根とは何をか云ふや、無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり、天堂、地獄、穢土、淨利を化出し、三塗六趣を現狀する事は皆是彼れが力に依れり、夢幻空華の細念なれども見性の大事を妨ぐる事は百千の魔軍にも超えたり、空華の細念とも名づけ、生死の命根とも名づけ、煩惱とも名づけ、陰魔とも云ふ、一實多名仔細に看來れば畢竟我見の一法に歸せり、有我に依るが故に生死有り、涅槃あり、煩惱あり、菩提あり、此の故に言ふ心生ずれば種種の法生じ、心滅すれば種種の法滅すと、又若し我相人相衆生相あらば即ち菩薩にあらずと、佛迦葉菩薩に問玉はく、善男子何等の法をか修して大涅槃の法に契當する事を得る、迦葉菩薩其時五戒、十善、十八不共、六度萬行、八背遮、無量の法門、逐一擧げて答ふれども佛總に許可し玉はず、迦葉、佛に問ふ、世尊何等の法門か涅槃に契ふ事を得るや、佛の、の玉はく但無我の一法のみ涅槃に契ふ事を得たりと、然るに無我に兩般あ

り人あり常に心身怯弱にして一切の人を恐れ、心氣を殺して萬縁に應じて罵れども嘆らず打擲すれども管せず、常に癡々呆々として一事を経ず、一智を長ぜず、我は是れ無我を得たりとして足れりとす、此れは是れ一個の破飯糞泥猪の肥え腴れて一切無智昏愚なるが如し、是真正の無我にはあらず、況んや專唱の力に依て淨土へ行んと計り佛に成らんと擬するをや、行く底これ何物ぞ、成ずる底是れ何物ぞ、我に非ずして是れ什麼ぞ、謂ふ事なけれ然らば則ち是れ斷滅の所見なりと、是れ斷なりや是不斷なりや、真正見性の上士に非ずんば輒く知る事能はじ、真正清淨の無我に契當せんと欲せば須らく峻崖に手を撒して絶後に再び蘇つて初めて四徳の眞我に撞著せん、峻崖に手を撒すとは何ぞや、一人あり錯つて人迹不到の處に到つて、下無底の斷崖に臨めり、脚底は壁立苔滑かにして溼泊するに地なし、進む事得ず、退く事得ず、只一個の死あるのみ、纒かに頼む處は左手に薛羅を捉へ、右手は蔓葛にすがつて且らく懸絲の命を續ぐ、忽然として兩手を放撒せ

ば、七支八離枯骨も亦無けん、學道も亦然り、一則の話頭をとつて、單々に參窮せば、心死し意消して、空蕩々虚索々、萬仞の崖畔に在るが如く、手脚の著べきなし、去死十分胸間時々熱悶して忽然として話頭に和して心身共に打失す、是れを峻崖に手を撒する底の時節と云、豁然として蘇息し來れば水を飲て冷暖自知する底の大歡喜あらん、是れを往生と名づけ、見性と云、只肝要は此の專念の扶けに依て是非是非一回自性の本源に徹底すべきぞと勵み進み玉ふべし、只千萬疑がひ玉ふべからず、見性の外に成佛なく、見性の外に淨土なき事を、三界無比の大聖一切衆生の導師なりと渴仰せられさせ玉ふ十力調御の世尊如來も、雪山に入て一回見性し玉はざりし以前は流轉常没の凡夫に同じく、八千度の往來は歷玉ひき、見性大悟の曉にこそ正覺の眉を開き玉ひける者を、見性の外に成佛ありと心得、見性の外に淨刹ありと心得んずる人は上もなき不覺なるべし、觀世大士の生身にて渡らせ玉ふ二十八代の祖師達磨大師の如きは、遙かに十萬里の鯨波を凌

いて諸經諸論に不足もなき漢土へ如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞き及びにたりければ、如何なる大事をか傳へ玉ふぞと人々目を拭ひ襟を正して渴仰し申しけるに、只見性成佛の一事をのみ授け玉ひにき、破相悟性等の六門を設け玉ひにたれども畢竟見性の一處に收歸せり、然れども衆生無量なる故に法門も又無量なり、中に就て往生の一門は韋提希獄中の患難を救はんが爲めに、假りに且く設け玉ふ、若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせば、祖師只二三行の書を裁して漢土へ送り玉は、是れらくのみ、曰く專唱稱名して淨刹に往生せよと、何ぞ煩はしく千辛萬苦の風波を凌ぎ全身を鯨鯢の腮に懸て漢土へ渡り玉ふべきや、如來も亦然り、初より淨飯王宮の中に在して耶輸陀羅、瞿夷女等の妃嬪と共に娛樂を窮め玉ひ、位十善に登り、富み五印を有ちて、末後に稱名念佛して淨土に往生し玉は、是れ是れらくのみ、何の心ぞや金輪の王位を振り捨て、苦行六年阿羅羅迦摩羅の仙人に責め使はれ、其後深く雪山に入て葦蘆の股を突き貫くをも覺え

玉はず、目のあたりへ雷の落て牛馬を打ち殺たるをも知り玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて、通身瘦衰へ玉ふ事絲もて瓦を編たてたる如く、皮骨連立せり、遂に臘月八夜明星を一眼して初めて見性大悟高聲に唱へ玉はく、希有なる哉一切衆生如來の大智慧徳相を具すと、是より山を出來つて、頓漸半滿の教を説き宣へ玉ふに、乏き事なし、此に於て十號具足、果滿妙覺の如來と仰がれ玉ふ、是れ彼の善慧大士の謂ゆる頓に心源を悟つて寶藏を開き玉ふに非ずや、澆季末代、壞劫法滅の末世といへども、佛子たらん者の尊信すべき芳躅ならずや、大凡番々出世の如來歷代傳燈の祖師及一切の賢聖智者高僧に至るまで、其の所傳の秘訣行持の内證を探るに盡く自性の法門を至當とす、蓮如上人の如きも平生往生不來迎の往生と説れけるよし、願ふに是れ亦これ見性の眞理にあらずや、深く海藏の底を探つて五千餘卷の金文を五度びまで究め玉ひ、王侯より庶人に至るまで生身の如來の如く仰ぎ貴ばれ玉ひし法然上人の如きも、常に悲嘆し玉ひけるは、特に教内の理に

暗からざるのみに非ず、教外の心宗願を探る先達なき故に、索短うして深泉を汲まず、翼さ短うして長空に翔らざる心地なりと、諭置れける由、教外の心宗とは何をか云ふや、此れ見性の法門に非ずや、至人の一言毫釐も欺き玉はず、寔に恐るべく敬しつべし、神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程の止ごとなき上人だにも斯望深くおはせし、見性の大事なるものを今の人々の慢り誘り玉ふは罪深くこそ覺ゆれ、蓋し理はり知り玉はぬ上には左ばかり罪科にもならぬにこそ、惠心院の僧都の如きは二十四歳にして自性の大圓鏡を琢磨せんとし、横川に入り玉ひしより晝三部の法華經夜六萬聲の念佛中間片時も怠惰し玉はず、行年六十四歳にして初めて自身真如なる事を識得すとの玉ひけるよし、寔に貴ぶべし、自身纔に真如なる時、山河大地、萬象森羅、草木國土、有情非情、同時に不變真如の全體と現出す、是れを寂滅現前見性了悟の時節とす、高野の明遍僧都五十餘歳の秋、深く念佛三昧に入り玉ふ時、高野大師正しく藕絲の袈裟并に一紙の金文を授け玉ふ、

其の略に曰く西方の一方を指す者は方便なり、九域を簡して亂心を止む、畢命を期として名を稱せば、心眼即開の大益を得んと、心眼即開直に是れ見性の時節なり、大凡世尊一代五千餘卷の金文有つて頓漸祕密不定の妙義を説き演べ玉ひたれども、畢竟此の見性の大事を出でず、故に經に曰く、唯此一事實餘二即非真と、去る程に三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖は必定決定無き事なり、山野七八歳より心を佛理に傾け、十五歳の時出家、十九歳にして行脚、二十四歳にして初めて此の見性の大事に撞著す、其後叢林を經、昔ねく諸善知識の門闥に跨がり、博く諸經論を窺がひ、略三教の經典を探り、及び諸子百家をさへに、若し一法の自性の法門に超過せる有らば、莊老列の道といへども必ず信受し押し弘めんと誓ひ侍りき、今年六十五歳に到つて終に見性の大事に過たる法理を見ず、左も侍らずは何しに妄りに紙墨を費やして、覺えも無き事を書き付け高覽に入れ侍るべきや、只返す返すも見性の助けに便りよく侍べらば絶えずりも無く

唱へ進みて一心不亂の田地に到り玉は、必定大歡喜の眉を開き玉ふべし、若し
 それ無の字を打捨て、佛名を唱ふる事は、專唱稱名の力に依て見性分明に直に佛
 祖の骨髓に徹底する事を得ば是れ可なり、縦ひ見性明白なる事を得ずとも、稱名
 の功力に依て死後には必ず極樂に往生せん是れ一舉兩得萬全の良策なりとの底意
 ならば、早速稱名の修行を放下し純一に無の字を擧揚し玉ふべし、何が故ぞ、斯
 れは是れ二百年來禪苑を荒廢し眞風を盡害するの惡風俗、杜撰の禪徒鄙俗下賤の
 邪見解なり、夫れ禪宗は孤危が上にも轉孤危ならん事を要し、祖庭は峻峻が上に
 も轉峻峻なるを貴しとす、常に要津を把定して凡聖を通ぜず、一言を出す則ば三
 賢魂蕩し、四果眼眩す、一句を吐く則んば閑神恐れ走り、野鬼悲しみ哭す、木人
 の腸を割き、石女の髓を敲く、棟梁の質あつて神俊の才を具する底の英俗の學
 者を見る則んば、難透、難解、難信、難入底の話を放つて正法眼藏を瞎却し、
 涅槃妙心を撻奪す、學者も亦盡毒の郷を過るが如く、水も亦他の一滴をうけず、

壁に咬み横に參じて情量の窟宅を破り、智解の窠臼を抜き理盡き詞窮まり、心死
 し意消して忽然として凡に非ず聖にあらず、佛にあらず魔に非ざる底の奇怪の鈍
 瞎漢を放出して、以て佛祖の深恩を報答す、斯の如きの手段を法窟の爪牙と名け、
 奪命の神符と云ふ、大いに上々根機の人に利あり、中上の機は聞いて顧みず、淨
 家は却つて是れに反す、是れ又敬しつべきの一門なり、無量壽尊大慈善巧の專修
 にして六八の大誓に本づき、三四の修心を具す、専ら中下の機の爲に設けて無智
 昏愚の衆生を利し、十惡五逆の罪累を抜く、攝取不捨の金言を主として下きが上
 にも轉下きを要とし、易きが上にも轉易きを貴しとす、此の故に言ふ、縦ひ一
 代の教を能く能く學したりとも、一文不知の愚鈍の身になして只一向に念佛せよ
 と澆季末代五濁亂滿の邊土に一日も缺くべからざる善巧なり、禪門は力士の長け
 を闘はしむるに等し高きを以て勝れりとす、淨家は侏儒の長けを闘はしむるが如
 し、矮きを以て勝れりとす、禪門の高きを悪んで是れを廢せば佛心向上の眞風は

士を拂つて泯没せん、淨家の矮きを嫌つて是れを廢せば昏愚無智の部屬は惡趣を出づる事能はじ、願ふにそれ佛は大醫王の如し、八萬四千種の方劑を設けて八萬四千種の病根を抜く、禪と云ひ、教と云ひ、律と云ひ、淨と云ふ、各々是れ病に應ずる一方なり、譬へば世に士と云ひ、農と云ひ、工と云ひ、商と云ふ、此の四民あるが如し、士は智仁兼備へ韜略並べ全うして、王位を鎮護し逆徒を従がへ、天下を泰山の安きに置き、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、瞋らざれども民斧鉞よりも畏、尤も嚴重なるを貴しとす、重んずべきの美器なり、商は大店を張り貨財を通じ、錦繡綾羅絹帛綿布及び粟米蔗果魚肉をさへに廣きを以て好とす、緇素男女老幼尊卑其求めに應ぜざすと云ふ事なし、士若し商賈の廣きを羨み財利を貪り行ひて商賈の態を作さば大いに射御を廢し、武藝も亦忘れて笑を朋友に惹ん、主人も亦大いに瞋つて此れを擯出せん、商も又士の嚴重なるを羨み、劍を帶し鞍馬に跨つて戎面して亂りに西東に走らば人それ大いに笑はん、家道も亦廢せん、向に謂

ゆる禪を得ずんば命終の時淨土に生ぜん、兩端に涉つて修行せん人は、魚も得ず熊の掌も亦得ず、却て生死の業格に培かひ命根截斷因地一下の歡喜は努々是れ有べからず、無の字の命號と兩般なしと申す中に、得力の遲速見道の淺深に到つては少しの仔細無きにしもあらず、大凡辨道參玄の上士、情念の滲漏を塞斷し無明の眼膜を觸破するに到つては、無の字に越たる事は侍るべからず、去程に五祖の演禪師の頌に『趙州の露刃劍寒霜光焰々、更に如何と問はんと擬せば身を分つて兩段と作す』と、總じて參學は疑團の凝結を以て至要とす、此故に道ふ大疑の下に大悟あり、疑がひ十分あれば悟り十分有りと、又佛果和尚の曰く、話頭を疑がはざるを大病とすと、參玄の人纔かに大疑現前する事を得ば百人が百人千人が千人ながら打發せざるは是れ有るべからず、若し人大疑現前する時、只四面空蕩々地、虛豁々地にして生に非ず、死に非ず、萬里の層氷裏にあるが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、分外に清涼に、分外に皎潔なり、癡々呆々坐して起つ事を

忘れ、起て坐する事を忘る、胸中一點の情念無うして只一箇の無の字のみ有り、恰かも長空に立つが如し、此の時恐怖を生ぜず、了智を添へず、一氣に進んで退かざる則んば、忽然として氷盤を擲するが如く、玉樓を推倒するに似て四十年未だ曾て見ず、未だ曾て聞ざる底の大歡喜あらん、此時に當つて生死涅槃猶如昨夢、三千世界海中の漚、一切の賢聖電拂の如し、是れを大徹妙悟因地下の時節と云ふ、傳ふる事得ず、説く事得ず、恰かも水を飲で冷暖自知するが如けん、十方を目前に銷融し、三世を一念子に貫通す、人間天上の間那箇の歡喜かこれに如ん是等の得力は學者親切に進まば纔かに三日五日の功にして必ず得ん、如何が大疑現前する事を得んとならば、靜處を好まず、動處を捨てず、我が此の臍輪氣海總に是れ趙州の無、無の字、何の道理か有ると、一切の情念思想を抛下し單々に參窮せんに、大疑現前せざる底は半箇も亦無けん、如上大疑現前、純一無雜の體裁を聞き及ばれては怪しく恐ろしく、氣味わるき事に思し召さるべけれども、無

重劫來生死の重關を踏破し、十方の如來本覺の内證に徹底する程の目出度き大事なるものを左ばかりの艱辛はあらではあるべきと覺悟是れあるべし、熟願ふに無の字を參究して大疑現前し、大死一番して大歡喜を得る底は、數限りも無く是れあり、名號を唱へて少分の力を得る底は兩三箇ならでは聞き及ばずなん侍り、惠心院の僧都も智徳と云ひ、信心力と云ひ、無の字か麻三斤の話など參究し玉ひたらんには、自身真如なる程の事は一月二月乃至一年半程の中には發明し玉ふべきものを名號誦經の功によりて四十年の精彩を盡し玉ひたるなるべし、是れ唯疑團のおはすとおはせざるとに依れり、須らく知るべし、疑團は道に進む羽翼なる事を、法然上人の如き道徳仁義精進勇猛暗中に聖教を披覽し玉ふに、眼の光りを用ひ玉ひける程なれば、少しの疑團だに在したらんには、立地に大事了畢し往生決定し玉ふべきものを、豈に索短うして深泉を汲まざるなど、悲歎し玉ふに及ばんや、去る程に、楊岐、黃龍、眞淨、息耕、佛鑑、妙喜、の諸老をさへ大凡

百千億の諸佛名あり、百千億の諸神呪あり、授與すべく擧揚すべき法門は、不足も無き中に特り此無の字を與へて擧揚せしむ、豈に長處なからんや、顧ふに無の字は疑團起り易く、名號は疑團起り難き故なるべし、然るに禪門に於て專唱稱名往生を希望する事は古へ禪苑凋枯せず、真風未だ地に墜ざりし日は一向に無き事也、西天の四七唐土の二三、傳燈歷代の祖師、南嶽、青原、馬祖、石頭、百丈、黃檗、南泉、長沙、臨濟、興化、南院、風穴、首山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、晦堂、息耕、妙喜、及び五家七宗の諸老をさへに梁、陳、隋、唐、宋、元の間六朝の大宗匠、各々孤危の宗風を立して、臂に奪命の神符を繋げ、口に法窟の爪牙を咬鳴して只宗風の地に墜ん事を恐れて晝夜に願輪に答つて屹々として怠る事無し、破口にも往生淨土の事を論ぜず、悲哉、時乎、命乎、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衛震ふ、流へて大明の末に至つて、雲棲の株宏なる者あり、參玄力足らず見道眼暗うして進むに寂滅の樂みなく、退くに生死の恐れあり、悲嘆押さへ

難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕つて、祖庭孤危の眞修を捨て、自ら蓮池大師と稱して、彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して後學を引く、鼓山の元賢永覺大師、淨慈要語を造つて擊節して輔佐く、此に於て漢土に普く扶桑に溢れて終に救ふ事無きに至る、假令今の世に當つて臨濟、徳山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、息耕、妙喜の諸老臂を褰げ齒を切ばり、手に唾きして攘斥すと云ふとも、此の狂瀾を廻す事能はじ、是れ全く淨業の宗旨を狭し、專唱の修行を輕賤するに非ず、禪門に在りながら禪定を修せず、參禪に懶く志行懶惰にして見性眼昏く禪學力乏しうして茫々として一生を過ぎ了つて、命日峻嶮に逼るに及んで來生永劫の苦輪を恐れ、俄かに欣求淨土の行課を勤め、在家無智の男女に對し、いかめしげに長念珠かい爪ぐり、高か念佛しながら末代下根の我れ等に似合たる厭離穢土の專修に超えたる事は侍らぬぞとよなど、頭べ禿ろに齒疎なるが動もすれば殊勝げに打ち泣き打ち泣き目をしば扣きて口説立たるは實々しけれども、從前曾て勤めざる禪定何の

利益か有ん、従前曾て修せざる禪學何の靈驗か有らん、これ等の族は禪門に在りながら禪門を誘倒す、蠱啄の蟲の梁柱より生じて却て梁柱を割くが如し、黠檢せずんば有るべからず、壯年の懶惰懈怠は却て老來の憂惱悲歎となんぬ、老來の憂惱悲歎は責るに足らず、既に往しをば咎めじ、壯年の懶惰懈怠は各々宜く恐れずんばあるべからず、大明以來此の黨甚だ多し、盡く是れ庸才懦弱の禪徒なり、三十年前、去る老宿の悲嘆せられるは嗟衰へたる哉、向後三百年を過ぎば、天下の禪苑盡く總盤を張り、木鐘を据る、六時禮讚四隣を驚かすに至らんと云うて落涙せられる由、寔に恐るべし、老僧最後親切の一著あり、眉毛を惜まず、殿下の爲に擧揚し去らん、一喝の會を作す事なかれ、陀羅尼の會を作す事なかれ、況や崑崙に菓を呑み玉はんをや、作麼生か是れ親切の一句、僧趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや否や、州曰く無。

穴賢

客難に答ふ

元明の禪家流、往々に稱佛に偏す、此れ武夫を明月に混じ、燕石を隋侯に雜ふるなり、爾るより來た天下の叢林擊節相從ふ、滔々乎として踵を繼ぐ、宗風の陵夷職として是れに由る、此の時に當つて、無畏の一聲を假るに非ざれば多少の頑皮韜をして頭腦裂破せしむるに由なけん、向きに鍋島侯、書を馳せて之が問を致すや、師兩端を叩いて竭す、謂つ可し針を霧海に視し珠を合浦に還す者なりと、一日客あり予に謂つて曰く、淨土の一門は如來の勝方便なり、馬鳴之を稱し龍樹之を慕ふ、勝妙の國土實に之有るに似たり、然るに今之を卻く、其他の劣機之を聞くとときは必ず望みを淨土に斷たん、予曰く噫事淨土の如きは如來の不可思議莊嚴海中此の事なきに非ず、只是れ鏡像幻化ならく而已、然りと雖も幻化の幻化たる所以を識破するときは、即ち幻化の幼化と爲すべき無きなり、但法身幽微にして

客難に答ふ

法體縁じ難きを以て且く佛を念じ形を觀じ以て禮讃せよと教ふ、是れ他無し愚凡障重きが故なり、若夫大心の衆生ならば那處か是れ淨土ならざらん、願ふに子が執する所の者は莊嚴有餘等なり、師の示す所の者は寂光の理士なり、宜哉子の疑ひを生ずると也、佛華嚴經に曰く如來の淨土は或は如來の寶冠にあり或は耳瑠に在り或は瓔珞にあり或は衣紋に在り或は毛孔に在り此の如くの毛孔既に世界を容るゝが故にと的かに知りぬ方處なく涯畔なきことを、蓋し二尊者の如き悲願廣大にして物の爲に前驅す、之を權に幻化の衣を着けて幻化の國に願生すと謂はんか、之を此土の本土を起たずして無生の往生を現すと謂はんか、之を要するに如來出世の本懷、祖師應機的作用、其の萬端にして其致一なり、但一切衆生をして佛智見に悟入せしめんと欲してなり、更に餘蘊なきなり、法華經に曰く諸佛世尊種種の方便種々の譬喩種々の因縁是皆一佛乘の爲の故に、諸の衆生の爲に諸法を演説すと、是の如くなるときは、則淨土の設け豈一佛乘の助と爲るに非ず耶、吾老

師如上の丁寧告誡豈に他有らんや、其莊飾を卻けて之が本色を呈す、譬ば眞金を以て暗を止むるが如く、苟も黄葉と爲ば他後悔有らん、又元明の間宗旨を屈辱する者の爲に激切する所あるは、則是れ屋裏鼓を鳴らすの攻めなり豈に敢て他の信男信女願生の人を教驅して自家底を粧重する者ならんや、人有りて専修稱名忽然として三昧を發得するときは、則ち然ることを期せずして必ず然り、是れ佛道無二なるが故なり、子其れ思を好せば歴然として解すべし、客の曰く淨土幻化ならば何物か幻化ならざる、禪も亦幻化なるか、夫れ佛の如きは萬善を曠劫に積んで無始の遺塵を蕩す、果報を以ての故に其土清淨なることを獲たり、之を幻化と謂ふべからず、借如禪門に譏られて其が爲に短せらるゝとも如來に讚せらるゝときは、則必ず所長有らん、予が曰く果報の土、實に是れ幻化なり、蓋し昔に是を論ぜん、大毘盧舍那五智圓明常住の本體は猶清淨の摩尼寶珠の如し、而も能く種々の色像を現す、淨なるときは則ち淨現じ穢なるときは則ち穢現す總に是れ所現

の物なり、無現にして現なるが故に無に非ず、現すと雖も不現なれば又有に非ず、有既に有ならざる時は即ち無何を據らん、不思議の致すところ有無を其間に容ること能はず、而も何物か現ぜざらん所以に萬有森然たるも其來る所以を知らず、一虚蕭然たるも其往く所以を識ること罔し、色像能依なるを以ての故に寶珠を離れて色像なし、寶珠の所現なるを以ての故に色像を離れて、寶珠なし、寶珠即ち色像、色像即ち寶珠、人有りて實に此の如き大寶珠を體するときは則ち能く不可說微塵數の淨土を現じて包羅せずと云ふことなく、含蓋せずと云ふことなし、唯是れ當處湛然なり、彼の一佛國土に繫念する者と奚ぞ翹だ霄壤のみならんや、是の故に至人は往くとして寶珠ならずと云ふことなし、光々映徹、主伴無盡なり、愚凡は之に反す、是故に往くとして色像ならずと云ふことなし、法々質礎淨穢駁雜なり是れ他の契證するると否なるとに由るのみ、淨土の如きは中下根の爲に假に微妙の色像を縁じて無依の珠體を感ぜしむる者なり、故に希望を以て之が媒と爲す、

色像を見ることを得ば斯れ可なり、寶珠は見ることを得べからざるなり、禪家の如きは上々の機の爲に直に圓明の寶珠を指して有依の色相を見ざる者なり、故に妙悟を以て之が則と爲し、寶珠も亦擊碎す、何の色像と云ふことか之有らん、蓋し禪と淨土と途軌殊なり、禪は佛心印を傳へ、正法眼藏を荷擔する者なり、佛心即ち禪、更に何の佛か有らん、正法即ち是れ宗更に何の經か有らん、故に調御師金襴を大龜氏に附す、滔々相續血脈不斷猶瓶水の相承るが如し、實に法中の王たり、之を世の帝者、天の曆數爾が躬に在りと云ふに譬ふ、乃し能く天下を以て己が任となし、欲哲欽明刃を萬機に遊ばしめて理統べずと言ふことなく、威伏せずと云ふことなし、是の故に天下主有るときは則ち上下位し、萬物安んず、若し一日も其主を失ふときは則ち天下の壞亂此より甚しきは莫し、大なる矣哉主たること民得て而して遁ること無し、事淨土の如きは、計我著相の族を攝取不捨して巧に善く根機に逗す蓋し漚和の法門なり、其珠體よりして之を言ふときは則ち幻化に非ずし

て何ぞや、是の故に圓覺經に曰く不可說恒河沙諸佛の世界は猶空華の亂起亂滅するが如しと、當に知るべし一切の世界皆如幻にして住することを是を以て實效に明むる所僉無形を以て淨土と爲す、華嚴に曰く眞に依りて住す國土に非ざと、生公も亦曰ふ、佛形累あらば土に託して以て居せん、佛は是れ常住法身なり、何ぞ國土を須ひんと、當に知るべし、十方諸佛所有の國土悉く是れ幻化にして眞實に非ざるなり、是に由つて之を觀れば、佛道は必ず茲に在らざること章然たり矣、知らざる者自ら謂らく禪にして淨土を兼ぬるは虎にして翼を扱む者なり、或は謂ふ、禪にして淨土なければ十人は九人蹉路すと、然らば彼の幹墨揚申が徒の如く、帝者をして國人の業を習はしむと謂はんか、雷に其祚を有つこと能はざるのみならず、必ず其國を亡すに至らん、苟も其道の明ならざること憂ひば、惟だ痛く勵み密に進んで自ら其徳を全うするに在らんのみ、奚を以てか兼ぬることを爲さん、華嚴觀に云く、信有りて法界を信ぜざれば、信是れ邪なりと、凡そ諸經

論中具に二行を明す、一には無念、二には有念、而も皆佛道を成ず可しと雖も、優劣懸かに殊なり、參禪辨道は即ち無念無想の念佛なり、此を眞如三昧と謂ふなり、欣求淨土は即ち存想計名の念佛なり、是を淨業を修習すと謂ふ、但能く不二に通達するを便ち眞の佛子と爲す、想ふに夫の之を兼ぬると云ふは、蓋し本を二にするが故なり、觀經に云く、諸佛如來は法界身なり、是心即ち是れ三十二相八十隨形好なり、是心作佛是心是佛と又曰く佛身の高さ六十萬億那由多恒河沙由旬、彼の佛の圓光百億三千大千世界の如しと、如來誠諦の語、此に到つて内證を顯示す、其旨甚深なり、之れを名けて恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變の妙土と曰ふ、此くの如くの妙土、形相を以て莊嚴すべからず金珠を以て修飾すべからず、所以に金剛般若に曰く、若し菩薩是の言を作さん、我當に佛土を莊嚴すべしと、是を菩薩と名けず、何を以ての故に如來佛土を莊嚴すと説き給ふは、即ち莊嚴に非ず、是を莊嚴と名くと、又維摩經に曰く其の心の淨きに隨つて即ち佛土淨しと、

果した此くの如くならば、參禪學道は豈是れ佛土を莊嚴するに非ずや、彼の元明の禪者自ら其の造詣の精しからざるを蔽はんと欲す、故に傳會して以て之を文る、甚しき者邯鄲の歩みに過ぎざるなり、陽に之を慕ふ爲して陰かに之に悖る、又何ぞ取らん耶、世の佛を學ぶ者狐疑して之を能く正すこと莫く雷同して難を易に換るときは則ち如來の正法眼藏復た息むに幾し、思はざるべけんや、吾が師之を開けて廓如たり、豈辯を好まんや、已むことを得ざればなり、客曰く幻化の法門我復何ぞ望まん、子が言ふ所の如くんば則ち晝らん者歟、予が曰く然あらず、三乘所趣の法體は異なることなけれ共、但心に大小有るが故に差を爲すのみ、夫れ幻を以て幻を幻とするときは則ち幻とする所而も幻なるべし、幻を幻とするに、幻に非ざるを以てするが故に、幻なりと雖も、而も幻に非ず、是の故に涅槃經に曰く、善男子或は是色有り或は是色に非ず、非色と言ふは即是れ聲聞緣覺の解脱なり、是色と言ふは即是れ諸佛如來の解脱なり、善男子是の故に解脱も亦色

亦非色なりと、菩薩從上來度門を谷響に設け萬行を空華に修す、前に謂ゆる種々の色像即是清淨の寶珠にして事理不二なる者なり、然りと雖も、若し幻化を識破せざるときは、則ち幻化上頭に復幻化を逐ふ、遂に其れが爲めに魅著せられて死に抵るまで脱すること能はず、是れ吾老師我が門寶珠を昧す者の爲に痛く之を卻くる所以なり、豈又幻化を撥無して眞實を證する者ならんや、龍樹大士の曰く、寧ろ有の見を起すこと須彌山の如くすべくとも、空見を起すこと芥子許りの如くもす可からず、寡聞の比丘の如き、方等千部を受持して、生ながら陷墜することを得たり、當に知るべし幻化を除いて佛陀なく、幻化を離れて教乘なきことを、儻し如幻の神力を滅盡して、下化の佛種を焦敗せば、縱令等正覺を成ずることを得とも、是咸顛倒の二乘爲り、佛道と迥かにして殊なり矣、諸佛の妙用の如きんば、感ずるときは則ち必ず應有り、應ずる所復感を爲す、感ずる所復應有るときは則ち此如幻の力に憑らずと云ふことなし、尙國を爲むる者凡民を救ふを以て本と爲

すが如し、是を名けて億兆の君子と爲す、當に知るべし幻化は是れ佛界の大寶聚、
 幻化は是れ法門の大柱礎、菩薩の種子なり、諸佛の本命なり、然して之を現する
 と之を御くると、未だ嘗つて妙處なくんばあらず、唯寶珠體得上自從して受用し
 將ち來り、幻化識破上自從して與奪し將ち去る者なり、豈亦容易ならんや、若し
 夫れ胡亂の禪者輕慢の白衣、道之れ學ばず教之れ明めず大言放語して師の靈に倣
 はば未だ免れず、如來稀有の威儀を誹謗し、老師血滴の親言に孤負すること、
 吾子夫れ是を思へ、客唯々として退く便ち答客難を作る。

寛延四年未歲林鐘日

參學某甲拜識

遠羅天釜續集開版緣由

遠羅天釜は、時平日用ふる所の茶銚也、何の義たるを知らず、而して取て以
 て此書に名く矣、此書は師が門徒と往復の簡語にして、其草稿、僉信宿を經
 ずして而して成る也、想ふに暗記の失必ず多からん焉、大方の學者、茶味あ

つて存することを識らば焉、何ぞ事故を以て爲ん哉、辛未の春、余播に之き
 て楠田某と邂逅す、余に謂つて曰く、子先きに鶴林老師の遠羅天釜を編すと
 雖、恨くは念佛の一書を缺けり、子若し之を補は、願くは小財を捨て、
 以て梓費を助けんと、今秋京師の書肆田原吉田の二氏余に詣して、遠羅天釜
 舊板の正からざるを一新せんと乞ふ、余便ち之を可とす乃ち此の一本を副ふ
 ることを得て、且つ、豊、琅の二道友と之を筆し、之を校し、又之を區畫し
 て以て之を授くと云ふ

寛未仲秋吉旦

慧 梁 謹 識

遠羅天釜跋

先佛の遺言、赫乎として三藏存し焉、乃祖の立旨、炳然として五燈傳ふ焉、蓋、
 自利利他、自ら然らざることを能はざる也、於此の書の如きは明辨觀縷、先規
 を墜さず、謂つべし未聞の聞也と、之を讚する則は、大虚に翳を生ず、之を誘す
 る則は、巨海に漚を起す、余亦何をか言はんや、其れ或は諸を炬に附し、或は諸
 を紙に上す、其跡異なりと雖、其道一也、何則法門の威儀、唯此を是れ勤むれば
 なり、向に近驛二三の白衣、余に語つて曰く、頃聞く、師、徒に示すの長書有
 りと、我嘗て觀覽便りなくして且つ謄寫に嫌あり、冀くば力を戮せて諸を梓に
 鋟め、以て住庵精修の諸子をして墨を吮るの勞を免れ令めん、余が曰く、善哉、
 如し政有らば吾用ひずと雖、吾其れ之を與り聞かん、是に於て平跋す焉、寬
 延己巳仲春、參學小比丘慧梁焚香稽首して芙蓉峰下に書す、

坐禪和讚

衆生本來佛なり。水と氷の如くにて。水をはなれて氷なく。衆生の外に佛なし。
 衆生近きを知らずして。遠く求むるはかなさよ。譬へば水の中に居て。渴を叫ぶ
 がごとくなり。長者の家の子となりて。貧里に迷ふに異ならず。六趣輪廻の因縁
 は。己が愚癡の闇路なり。闇路にやみちを踏み添へて。いつか生死をはなるべき。
 夫れ摩訶衍の禪定は。稱嘆するに餘りあり。布施や持戒の諸波羅密。念佛懺悔修
 業等。其品多き諸善行。皆この中に歸するなり。一座の功をなす人も。積みし無
 量の罪ほろぶ。惡趣いづくにありぬべき。淨土即ち遠からず。辱なくも此の法
 を。一たび耳にふる時。さんたん隨喜する人は。福を得る人限りなし。いはん
 や自ら回向して。直に自性を證すれば。自性即ち無性にて。すでに戲論を離れた
 り。因果一如の門ひらき。無二亦無三の道直し。無相の相を相として。行くも歸

るも餘所ならず。無念の念を念として。謠ふも舞ふも法の聲。三昧無碍の空ひろく。四智圓明の月さえん。此時何をか求むべき。寂滅現前するゆゑに。當所即ち蓮華國。此身即ち佛なり。

大道ちよぼくれ

きたく、やれきた、それきた、またもござらぬ、さいくござらぬ。歸命頂禮、みなさんき、ねへ、人々御所持の心と云ふやつは、是れぞと申してしつかと致した、目鼻も手足もござらぬながらも、扱てく自由なわるめてをりやるよ、云ふに及ばぬこと、は思へど、千年萬年此の世に暮すと、思てござるがうかくするまに、やんがておみやれ、無常の使が迎ひにござると、節氣じやあるまい、うろたへまわつて、忙しさうだよ、連れられ行くのをまんざら見ながら、錢金持たねば、人ではござらぬなんぞと心得錯り、欲徳ばつかりを頭の皿から、かゝのはて迄、立つにも居るにも、ちつとも忘れず、偶々難得人間世界へ来たこそ幸ひ、其上あまたの貴き聖の尊みたまひし、五倫五常の大きな道筋、善惡邪正も、あまさをすもらすず説き演べ玉ふて、置かれしことなりや貴きことだよ、昔々のずつと

昔の、まだしも此世の出来ないさきから、今年今月即今日、數へも及ばぬ年を
 經たれど、ちつとも減らず、そつとも増つさず末世になるほど、神や佛は彌々た
 うとく、かつかういや増し、威光もいや増し、思へばくどうでもきやつらは、
 親玉かぶちやよ、若しやれ皆様、惡事正根のしつばうだざり、神や佛のちよろ
 ちよろ寵愛し玉ふ、正直正路の結構な悟を、ちつともなりとも、そつともなり共、
 求める心ができれば幸ひ、相應に勵んで出精めされよ、おみさん方のおしやますこ
 とには、惡事と申して、外ではあるまい、人を殺さず火付けや盗みは、元より
 爲まいし、何が因果で、死ぬと地獄の、青鬼赤鬼斑鬼のと、根もなき虚言聞く耳
 塞いで、白木の凡夫が無事は貴人と、御飯の三杯喰べるに任して、鸚鵡や狸々の
 しやべくる様だが、微細の様子は、夢にも見ないで、理窟と我でふす口先ばつか
 り、本に誠に道理はしらない、たとへばしつても、行ひ悪しけりや、何んにもな
 らない、藥を吞まざる病人ばらには、扁鵲者婆等も匙なげ捨つ、天窓を攪いた

る様なるもんだよ、夫故佛も、縁なき衆生は濟度は仕られぬ、阿闍提だのなんか
 のとて、くどくもくどくももどく説演べ玉ひて置かれしことぢやぞ、阿闍提と
 は、どうした人だよ、どの様な人だよ、問はるゝやからへ答へて申さば、あせん
 だいとは、外にはござらぬ、問はるゝこなたが阿闍のきつほん、茲等の大事は、
 十代傳はる黄金の釜より秘藏なことだに、たやすく心得あつてのこうでの、すじ
 つたもじつた、なんぞと理窟でやつても、大事に臨んで、なんにもならない、大
 事と申して外でもござらぬ、前にも所謂冥途の方より使がきた時、理窟で行くな
 ら、どう共こう共云つてなおみやれ、其場に臨んで、四も五も云はせず、時刻が
 移ると、閻魔の目玉の底がつんでる、なんぞとぬかして、引立て行くぞや、皆様
 せつないこんだよ、一から十迄あがきにわがいて、うろたへまはつて現世がかう
 では、未來も大方ろくでは有るまい、神や佛はやれく不便や、何とぞ助けてや
 りたい者ぢやと、涙を流していたわり玉へど、自業の罪過は、どうでも遁れぬ、

かうぢやによつて、皆さん必ず油断をめさるな、魚の中でも、鯉と謂ふやつは、
 理口なやつめで、ありやくよいやな、どつこいさと瀧津瀬登りて、龍ともなる
 げな、狐も稻荷の鳥居をひよつくらひよつと、飛びこえ神にもなるげな、鳩めは
 グウ〜、愚痴なるながらも、三枝の禮をば、見事に勤める、雀はチウ〜、忠
 義の一道、鴉はカアカア、反哺の孝行、夜晝鳴けども、耳にも止めず、明ても暮
 ても、はあスウ〜云ふこと許が人でも有るまい、立つにも居るにも、ひよこひ
 よこ〜つく事許りが人ではないぞと、魚めや鳥にも劣ると云はれちや、一分立
 つまい、本に誠に立たずと思へば、本へ還つて、孝悌忠信行ひめされて、人とお
 なりやれ、本に皆様神に成るにも佛になるにも、人からならねば、成り様がござ
 らぬ、本に誠にめんどな事ない、以の字も呂の字も知らない祖父様も、惠の字と
 壽の字も分らぬ婆さまも、南無からたんのう、如是我聞、一字の、阿蘭陀交りの
 長物語は、必ずよしなよ、夫れより平日たやすく、慈悲心正直堪忍、三つをたも

つて、出る息入る息、無理せぬ様にと工夫をめされよ、しかつめらしくも、手に
 取めさるゝ念珠は、百八出る息入る息、數珠くりめさるゝ、根本があつばれ、阿
 彌陀の正體成るぞや、あんまり近くてあきれたことだよ、困つたことには、人々
 御所持の心といふやつは、おてゝこてんより替るが早いぞ、正直正路の貴人に向
 つちや、慇懃丁寧なしやツ顔なしたり、御主や親には、不情なつらつき、女房や
 子供にや、鼻毛をのばして、外目もあんまり阿房な様だよ、金借る朝にや、地藏
 に化けたり、請る夕にや、閻魔もはだして飛ぶ様なつらつき、瞬きするまに人事
 云ふやら、焼もちやくやら、いや早はをへない事だよ、扱て又雨風雷電なんどは、
 天の制度の事とは申せ、分ても〜、恐れおのゝき、謹むべけれど、然るを己が
 勝手が悪けりや、却て罵り、怒りを起して呵したり、罵つたり、おへない天気
 だ、どうぢやかうぢやと、恐れ多くも月日を指さし、其上向つて小便たれたり、
 なにからなにまで天地に背いて、大膽ばかり、自分の意見で曰ふより外には、教の

道とてなんにもないぞや、なんだか〜、おそろしさうだよ、おら、はどうしやうヲ、イ〜。

御洒落御前物語

爰に播磨の灘屋の娘。年は十六おしやらく盛り。きりやう骨柄サテたぐひなき。唐で揚貴妃日本で小町。釋迦も達磨も手をうちにげる。去年の春より只うつ〜と。色でやせるか辛苦があるか。かたり玉へと皆人間へば。辛苦なければ色でもやせぬ。わしは悟りにうき身を棄つす、ねてもおきてもサテ歩むにも。どうぞどろぞと只一筋に、心がけたりや途うち明いて。兎角皆さん異見ぢやないが。わしがいふ事よく聞かしやんせ。憐れなるかな世間の人の。くらす稼業をよく〜見れば。千とせ百とせいくべき様に。心うか〜月日を送る。今に死ぬべき事とも知らず。慈悲もなさけも後生の事も。徳のあまりとかつあやまりて。未來苦患のある事しらず。此世來世を助かりたくば。うたぬ隻手の聲き、玉へ。經や陀羅尼を讀む功德より。直に佛の御姿となる。未來はちすはまたるい事よ。西も東も南

も北も。泥や草木や海山かけて。蓮華ならざる處はないぞ。西方極樂十萬億も。直に足元ソリヤ鼻の先。ソレも隻手の聲かざれば。ドコもカシコも三途の地獄。または劍の山ともなるぞ。兎角つとめて見性すれば。三途地獄も劔の山も。消えて浄土とあらはれにけり。今に死ぬとも天保の皮よ。自己が開けにや此世をかけて。萬劫末代地獄よ修行。たとひ學問博識とても。死ねば奈落の罪人となる。在家なりとも見性すれば。生死はなれてあきらか世界。悟ひらかぬ御寺にやましよ。色かばくちの御話なれば。晝夜ねずとも面白かるが。こんな話は氣に入るまいと。心づよくも言ひ聞かすれば。みんなそびらに汗水流し。笑止がほして我家へかへる。無残なるかなその歳の暮。思ひがけなき病について。床の上にと打ち臥したれば。今はかぎりと兩親達は。あとや枕に立そひよりて。涙ながして念佛すゝむ。娘もとより見性すれば。母に向ひて申する様は。わしがからだは去年の春に。往生極樂うたがひもなし。いまは死ぬとも苦しみはない。辭世一首と紙筆とりて。

ついに一首の歌かきつけぬ。其や紀念の最後の一句。

向う通るは清十郎ぢやないか

笠がよく似た菅笠が

見性成佛丸方書

私事は、小田原勇助と申して、生れぬ先の親の代から薬屋でござります。推賣は天下御法度でござりますれども、先づ功能の一通り、御聞きくだされませ。私賣弘むる處の薬は、見性成佛丸と申して、直指人心入りでござります。此の薬を御用ひなされますれば、四苦八苦の病を凌ぎ、三界浮沈の苦みも、六道輪廻の悲みも、安樂になります。此の薬と申しますは、天竺の伽毘羅國淨飯大王の御子悉多太子と申して、生れながら七足歩み天上天下唯我獨尊と仰せられて、各様方が御存知の檀特山の爰別れとは、其時藥種を把りに山におん入りなされまして、難行苦行、其後に五千四十餘卷四通りの薬法書が出来ました。其時御弟子の内十六弟子並に五百人と秀てた上手が出来まして、衆生の病を直す其根元は成佛丸で、此の薬を傳へられましたが、其後天竺にて四七二十八人ござりまして、二十八人

目の達磨大師がきびしく傳へられまして、大唐にては、二三人、五家七軒と別れましたが、兎や角とござりました。神光の臂の痛み、玄沙の足の痛み、雲門のちんばもなほり、百丈の鼻血も留り、其外數々ござりますれども、中々申し盡されませぬ。吾朝にては、千光國師始めて傳へられまして、其後に二十四人の妙薬師が出来まして、其後紫野の大燈は、天子様の御用ひに預かりましたが、其時顯露丸祕密丸と申する、賣薬師が出来まして、成佛丸と功能を争ふ事となり、勅命あつて、三井寺、奈良、比叡山邊の賣薬師と禁裡にて論議致されたが、大燈がかたれました。花園の鳳凰様は、美濃の伊深へ勅使を立てられ、關山國師を召出され、此御薬を御召させられ、御褒美として天子様の御盃を賜りました。花園屋と申すは、即ち私本家でござります。此の薬の製法、先づ趙州の柏樹を斧できり、六祖の臼ではたき、馬祖の西江水を汲み、大燈の八角盤で煉立、白隠の隻手にのせ、俱胝の一指で丸め、玄沙の白紙に包み、其の上書を禪宗臨濟郡花園屋